

Oracle® Solaris 10 1/13 インストールガイド ド:JumpStart インストール

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	7
1 Oracle Solaris インストールの計画についての参照先	11
計画とシステム要件についての参照先	11
2 JumpStart (概要)	13
JumpStart とは	13
JumpStart の使用例	14
JumpStart プログラムが Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする際の流れ	15
3 JumpStart インストールの準備 (タスク)	19
タスクマップ: JumpStart インストールの準備	20
ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成	21
▼ JumpStart ディレクトリをサーバー上に作成する方法	22
すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする	24
スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成	26
▼ SPARC: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法	27
▼ x86: GRUB を使用してプロファイルフロッピーディスクを作成する方法	29
rules ファイルの作成	31
rules ファイルの構文	31
▼ rules ファイルを作成する方法	32
rules ファイルの例	33
プロファイルの作成	35
プロファイルの構文	35
▼ プロファイルを作成する方法	36
プロファイルの例	36
プロファイルのテスト	49

▼ プロファイルをテストするために一時的な Oracle Solaris 環境を作成する方法 ...	49
▼ プロファイルをテストする方法	51
プロファイルテストの例	53
rules ファイルの妥当性を検査する	54
▼ rules ファイルを検証する方法	54
4 JumpStart のオプション機能の使用 (タスク)	57
開始スクリプトの作成	57
開始スクリプトについて	58
開始スクリプトによる派生プロファイルの作成	58
開始スクリプトと終了スクリプトを使ったインストール継続期間の追跡	59
終了スクリプトの作成	60
終了スクリプトについて	61
終了スクリプトによるパッケージとパッチの追加	62
終了スクリプトによるルート環境のカスタマイズ	64
終了スクリプトによる非対話式インストール	64
圧縮された構成ファイルの作成	65
▼ 圧縮された構成ファイルを作成する方法	65
ディスク構成ファイルの作成	66
▼ SPARC: 単一ディスク構成ファイルを作成する方法	66
▼ SPARC: 複数ディスク構成ファイルを作成する方法	67
▼ x86: 単一ディスク構成ファイルを作成する方法	68
▼ x86: 複数ディスク構成ファイルを作成する方法	71
サイト固有のインストールプログラムの使用	72
5 カスタムルールおよびプローブキーワードの作成 (タスク)	73
プローブキーワード	73
custom_probes ファイルの作成	74
custom_probes ファイルの構文	74
custom_probes ファイル内の関数名の構文	75
▼ custom_probes ファイルを作成する方法	75
custom_probes ファイルの妥当性検査	76
▼ custom_probes ファイルを検証する方法	77

6	JumpStart インストールの実行(タスク)	79
	JumpStart インストールに関する問題	80
	SPARC: JumpStart インストールのためのシステムの設定(タスクマップ)	82
	SPARC: JumpStart インストールの実行	83
	▼ JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする ..	83
	▼ SPARC: JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードす る	85
	SPARC: boot コマンドのコマンドリファレンス	86
	x86: JumpStart インストールのためのシステムの設定(タスクマップ)	88
	x86: JumpStart インストールの実行	89
	▼ x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグ レードを実行する方法	90
	x86: システムのブートのためのコマンドリファレンス	92
7	JumpStart によるインストール(例)	95
	サイトの設定例	96
	インストールサーバーの作成	97
	x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成	98
	JumpStart ディレクトリの作成	99
	JumpStart ディレクトリの共有	99
	SPARC: エンジニアリング部のプロファイルの作成	99
	x86: マーケティング部のプロファイルの作成	100
	rules ファイルの更新	101
	rules ファイルの妥当性を検査する	101
	SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設 定	102
	x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定	102
	SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインス トール	104
	x86: マーケティングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインス トール	104
8	JumpStart キーワードリファレンス	105
	ルールキーワードと値の説明	105
	プロファイルキーワードと値	110
	プロファイルキーワードのクイックリファレンス	110

プロファイルキーワードの説明と例	112
JumpStart の環境変数	160
プローブキーワードと値	162
9 JumpStart による ZFS ルートプールのインストール	165
Solaris 10 10/09 リリースの新機能	165
ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart インストール (概要と計画)	166
ZFS ルートプールの JumpStart インストールの制限事項	166
ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart キーワード (リファレンス)	168
bootenv プロファイルキーワード (ZFS と UFS)	168
install_type キーワード (ZFS と UFS)	169
pool プロファイルキーワード (ZFS のみ)	170
root_device プロファイルキーワード (ZFS と UFS)	171
ZFS ルートプール用の JumpStart プロファイルの例	171
追加リソース	175
用語集	177
索引	185

はじめに

このドキュメントでは、SPARC および x86 アーキテクチャベースの、ネットワークに接続されたシステムとネットワークに接続されていないシステムの両方で、Oracle Solaris オペレーティングシステム (OS) をインストールおよびアップグレードする方法を説明します。このドキュメントでは、Oracle Solaris の機能である JumpStart インストール方法の使用法と、インストール時に RAID-1 ボリュームを作成する方法についても説明します。

このドキュメントには、システムハードウェアや周辺装置を設定する方法は含まれていません。

注 - この Oracle Solaris のリリースでは、SPARC および x86 系列のプロセッサアーキテクチャを使用するシステムをサポートしています。サポートされるシステムは、Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists に記載されています。このドキュメントでは、プラットフォームにより実装が異なる場合は、それを特記します。

このドキュメントの x86 に関連する用語については、次を参照してください。

- x86 は、64 ビットおよび 32 ビットの x86 互換製品系列を指します。
- x64 は特に 64 ビット x86 互換 CPU を指します。
- 「32 ビット x86」は、x86 をベースとするシステムに関する 32 ビット特有の情報を指します。

サポートされるシステムについては、[Oracle Solaris OS: Hardware Compatibility Lists](#) を参照してください。

対象読者

このドキュメントは、Oracle Solaris OS のインストールを担当するシステム管理者を対象としています。このドキュメントは、次の 2 種類の情報を提供します。

- ネットワーク環境で複数の Oracle Solaris マシンを管理するエンタープライズシステム管理者向けの上級 Oracle Solaris インストール情報
- Oracle Solaris のインストールやアップグレードをときどき行うシステム管理者向けの基本 Oracle Solaris インストール情報

関連ドキュメント

表 P-1 に、システム管理者向けのドキュメントの一覧を示します。

表 P-1 Oracle Solaris をインストールするシステム管理者向けのドキュメント

説明	情報
システム要件または上位計画の概要に関する情報が必要ですか。あるいは、Oracle Solaris ZFS のインストール、ブート、Oracle Solaris ゾーン区分技術、または RAID-1 ボリュームの作成に関する概要が必要ですか。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』
DVD または CD メディアから 1 つのシステムをインストールする必要がありますか。Oracle Solaris インストールプログラムは、手順を追ってインストールを案内します。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: 基本インストール』
停止時間をほとんど設けしないで、システムをアップグレードしたり、パッチを適用したりする必要がありますか。Oracle Solaris の機能である Live Upgrade を使うことにより、アップグレード時のシステム停止時間を短縮します。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』
ネットワークやインターネットを介してセキュリティー保護されたインストールを行う必要がありますか。WAN ブートを使用して、リモートクライアントをインストールします。あるいは、ネットワークインストールイメージからネットワークを介してインストールする必要がありますか。Oracle Solaris インストールプログラムは、手順を追ってインストールを案内します。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』
複数のシステムをすばやくインストールしたり、パッチを適用したりする必要がありますか。Oracle Solaris の機能であるフラッシュアーカイブソフトウェアを使用してアーカイブを作成し、クローンシステム上に OS のコピーをインストールします。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: フラッシュアーカイブ (作成とインストール)』
システムのバックアップが必要ですか。	『Oracle Solaris の管理: デバイスとファイルシステム』の第 19 章「UFS ファイルシステムのバックアップと復元 (概要/タスク)」
トラブルシューティングに関する情報、既知の問題の一覧、またはこのリリース用のパッチの一覧が必要ですか。	『Oracle Solaris Release Notes』
使用しているシステムが Oracle Solaris 上で動作することを確認する必要がありますか。	SPARC: 『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』
このリリースで追加されたパッケージ、削除されたパッケージ、または変更されたパッケージを確認する必要がありますか。	『Oracle Solaris Package List』

表 P-1 Oracle Solaris をインストールするシステム管理者向けのドキュメント (続き)

説明	情報
使用しているシステムやデバイスが SPARC ベースの Oracle Solaris システム、x86 ベースの Oracle Solaris システム、およびその他のサードパーティーベンダーで動作するかどうかを確認する必要がありますか。	Solaris Hardware Compatibility List (x86 版)

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子的なサポートを利用することができます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

表記上の規則

次の表では、このマニュアルで使用される表記上の規則について説明します。

表 P-2 表記上の規則

字体	説明	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
<i>aabbcc123</i>	Placeholder: 実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
<i>AaBbCc123</i>	書名、新しい単語、および強調する単語を示します。	『ユーザーズガイド』の第 6 章を参照してください。 キャッシュは、ローカルに格納されるコピーです。 ファイルを保存しないでください。 注: いくつかの強調された項目は、オンラインでは太字で表示されます。

コマンド例のシェルプロンプト

Oracle Solaris OS に含まれるシェルで使用する、UNIX のシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを次に示します。コマンド例では、シェルプロンプトはコマンドが標準ユーザーまたは特権ユーザーのどちらによって実行されるべきかを示しています。

表 P-3 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェル	\$
Bash シェル、Korn シェル、および Bourne シェルのスーパーユーザー	#
C シェル	machine_name%
C シェルのスーパーユーザー	machine_name#

Oracle Solaris インストールの計画についての参照先

このドキュメントでは、Oracle Solaris の機能である自動化された JumpStart インストールプログラムを使って Oracle Solaris オペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。このドキュメントでは、JumpStart プログラムを使用したインストールに関して理解しておく必要のある情報をすべて提供しますが、JumpStart インストールの準備を始める前に、インストールドキュメントコレクション内の計画ドキュメントを参照しておくことも役立ちます。次に示す参照先には、システムをインストールする前に役立つ情報が記載されています。

計画とシステム要件についての参照先

『Oracle Solaris 10 8/11 インストールガイド (インストールとアップグレードの計画)』には、システム要件と、ファイルシステムを計画するうえでのガイドラインやアップグレードの計画などの上位計画の概要が記載されています。このセクションでは、このドキュメントの各章の概要を説明します。

計画ガイドの章の説明	参照
この章では、Oracle Solaris OS のインストールやアップグレードを行う前に決定しておく必要のある内容について説明します。たとえば、ネットワークインストールイメージや DVD メディアをどのようなときに使用するかを判断するために必要な情報や、すべての Oracle Solaris インストールプログラムについての説明を記載しています。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 2 章「Oracle Solaris のインストールおよびアップグレードロードマップ」
この章では、Oracle Solaris OS のインストールやアップグレードに伴うシステム要件について説明します。また、ディスク容量の計画に関する一般的な指針や、スワップ空間のデフォルトの割り当てについても説明します。アップグレードの制限についても説明します。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 3 章「システム要件、ガイドライン、およびアップグレード情報」

計画ガイドの章の説明	参照
<p>この章には、システムのインストールやアップグレードに必要な情報の収集に役立つチェックリストが含まれています。ここで提供される情報は、対話式インストールの実行時などに役立ちます。このチェックリストでは、対話式インストールを行うために必要なすべての情報が得られます。</p>	<p>『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第4章「インストールまたはアップグレードの前の情報の収集」</p>
<p>これらの章では、Oracle Solaris OS のインストールやアップグレードに関連するいくつかの技術の概要を説明します。これらの技術に関連するガイドラインと要件も含まれています。これらの章には、ZFS インストール、ブート、Oracle Solaris ゾーン区分技術、およびインストール時に作成できる RAID-1 ボリュームについての情報が含まれています。</p>	<p>『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』のパート II 「ZFS、ブート、Oracle Solaris ゾーン、および RAID-1 ボリュームに関連するインストールについて」</p>

JumpStart (概要)

この章では、Oracle Solaris の機能である JumpStart のインストール処理について紹介し、その概要を示します。

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、[第9章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」](#) の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- [13 ページの「JumpStart とは」](#)
- [15 ページの「JumpStart プログラムが Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする際の流れ」](#)

JumpStart とは

JumpStart は、あらかじめ作成したプロファイルに基づいて複数のシステムのインストールやアップグレードを自動的に行うことができるコマンド行インタフェースです。プロファイルには、どのようにソフトウェアをインストールするかを定義します。さらに、インストール前とインストール後に実行するタスクを、シェルスクリプトを使用して指定することができます。システムのインストールまたはアップグレードにどのプロファイルとスクリプトを使用するかを選択できます。JumpStart では、選択したプロファイルとスクリプトに基づいて、システムのインストールまたはアップグレードが行われます。また、`sysidcfg` ファイルを使用して構成情報を指定することにより、JumpStart インストールを完全に自動化することも可能です。

注-クライアントシステムのルートパスワードは、`root_password` キーワードを `sysidcfg` に含めることによって、インストール前に事前に設定できます。[sysidcfg\(4\)](#) のマニュアルページを参照してください。

Oracle Solaris の機能である自動登録は、Oracle Solaris 10 9/10 リリースで新規に追加された機能です。システムをインストールまたはアップグレードすると、システムの構成データは、既存のサービスタグ技術によってリブート時に自動的にオラクル製品登録システムに伝達されます。システムに関するこのサービスタグデータは、オラクルの顧客向けサポートとサービスの向上などに役立てられます。

インストールまたはアップグレードの前に、`auto_reg` キーワードを `sysidcfg` ファイルに含めた場合は、インストールを完全に自動のままにできます。ただし、`auto_reg` キーワードを含めなかった場合は、インストール時またはアップグレード時に、自動登録のサポート資格情報とプロキシ情報を指定するように求められます。

JumpStart の使用例

この章では、1 例を挙げて JumpStart の処理を説明します。この例では、次のパラメータを使用してシステムが設定されています。

- 100 台の新しいシステムに Oracle Solaris をインストールする必要があります。
- システムの 70 台は SPARC ベースのシステムで、エンジニアリング部が所有し、開発者用の Oracle Solaris OS ソフトウェアグループを備えたスタンドアロンシステムとしてインストールする必要があります。
- 残りの 30 台は x86 ベースのシステムで、マーケティング部が所有しています。これらは、エンドユーザー用の Oracle Solaris OS ソフトウェアグループを備えたスタンドアロンシステムとしてインストールする必要があります。

まず、システム管理者はシステムグループごとに `rules` ファイルとプロファイルを作成する必要があります。`rules` ファイルは、Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするシステムグループごと(または1つのシステム)のルールが入ったテキストファイルです。各ルールは1つ以上のシステム属性に基づいたシステムグループを識別します。また、各ルールは各グループをプロファイルにリンクします。

プロファイルは、グループ内の各システムに Oracle Solaris ソフトウェアがどのようにインストールされるかを定義するテキストファイルです。`rules` ファイルとプロファイルは、JumpStart ディレクトリに置かれている必要があります。

この例の場合、システム管理者は2つの異なるルールで `rules` ファイルを作成します。1つはエンジニアリング部用のルールで、もう1つはマーケティング部用のルールです。ルールごとに、エンジニアリング部とマーケティング部を区別するために、システムのネットワーク番号が使用されます。

各ルールには、適切なプロファイルへのリンクも含まれています。たとえば、エンジニアリング部用のルールでは、エンジニアリング部用に作成した `eng_profile` というプロファイルへのリンクを追加します。マーケティング部用のルールでは、マーケティング部用に作成した `market_profile` というプロファイルへのリンクを追加します。

`rules` ファイルとプロファイルは、フロッピーディスクまたはサーバー上に保存できます。

- プロファイルフロッピーディスクは、JumpStart インストールを、ネットワークに接続されていないスタンドアロンシステムで実行するときが必要です。
- プロファイルサーバーは、JumpStart インストールを、サーバーにアクセスできるネットワークに接続されたシステムで実行するときを使用します。

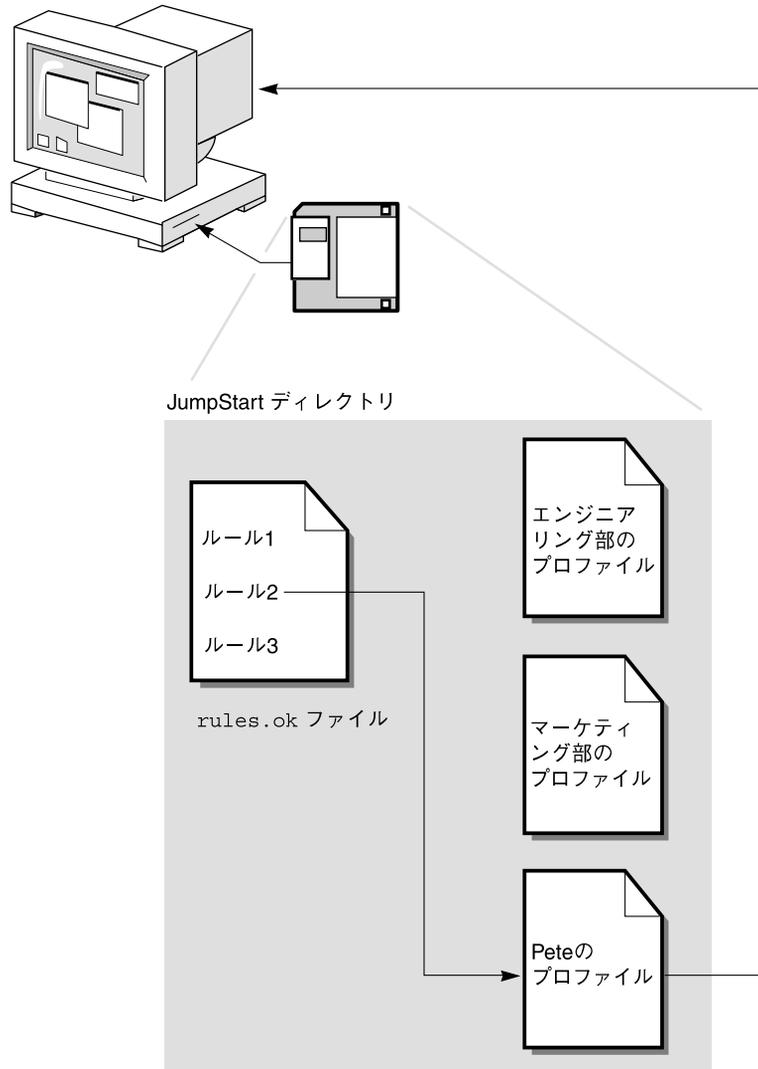
`rules` ファイルとプロファイルを作成した後、`check` スクリプトを使用して、これらのファイルの妥当性を検査する必要があります。`check` スクリプトが正常に動作する場合、`rules.ok` ファイルが作成されます。`rules.ok` ファイルは `rules` ファイルの生成バージョンであり、JumpStart プログラムによって Oracle Solaris ソフトウェアのインストールに使用されます。

JumpStart プログラムが Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする際の流れ

`rules` ファイルとプロファイルの検証が終わったら、JumpStart インストールを開始します。JumpStart プログラムは、`rules.ok` ファイルを読み取ります。続いて、Oracle Solaris ソフトウェアがインストールされるシステムに一致する定義済みのシステム属性を持つ最初のルールを検索します。一致するルールが見つかったら、JumpStart プログラムはそのルール内に指定されているプロファイルを使用してシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。

次の図に、ネットワークに接続されていないスタンドアロンシステムでの JumpStart インストールの流れを示します。システム管理者は、Pete のシステムで JumpStart インストールを開始しています。JumpStart プログラムは、システムのフロッピーディスクドライブに挿入されているフロッピーディスク上の `rules` ファイルにアクセスします。JumpStart プログラムは、ルール 2 をシステムに対応付けます。ルール 2 には、JumpStart プログラムが Pete のプロファイルを使用して Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするように指定されています。JumpStart プログラムは、Pete のプロファイルを読み取り、システム管理者が Pete のプロファイルに指定した指示に基づいて Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。

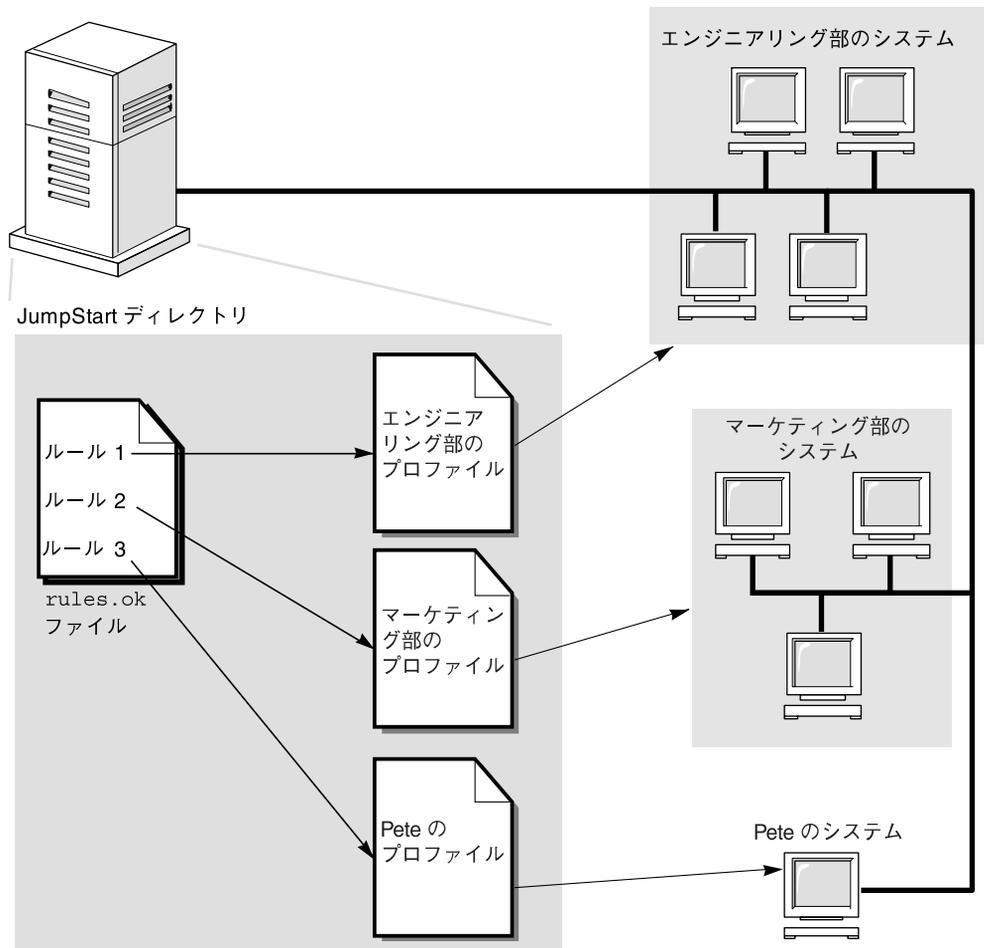
図 2-1 JumpStart インストールの流れ: ネットワークに接続されていない場合の例
Pete のシステム



次の図に、ネットワーク上の複数のシステムでの JumpStart インストールの流れを示します。事前に個別のプロファイルが設定され、1 台のサーバーにまとめて保存されています。システム管理者は、エンジニアリング部のシステムの中の 1 台で JumpStart インストールを開始します。JumpStart プログラムは、サーバー上の JumpStart/ディレクトリに存在する rules ファイルにアクセスします。そして、エンジニアリング部のシステムをルール 1 に対応付けます。ルール 1 には、JumpStart プログラムがエンジニアリング部のプロファイルを使用して Oracle Solaris ソフト

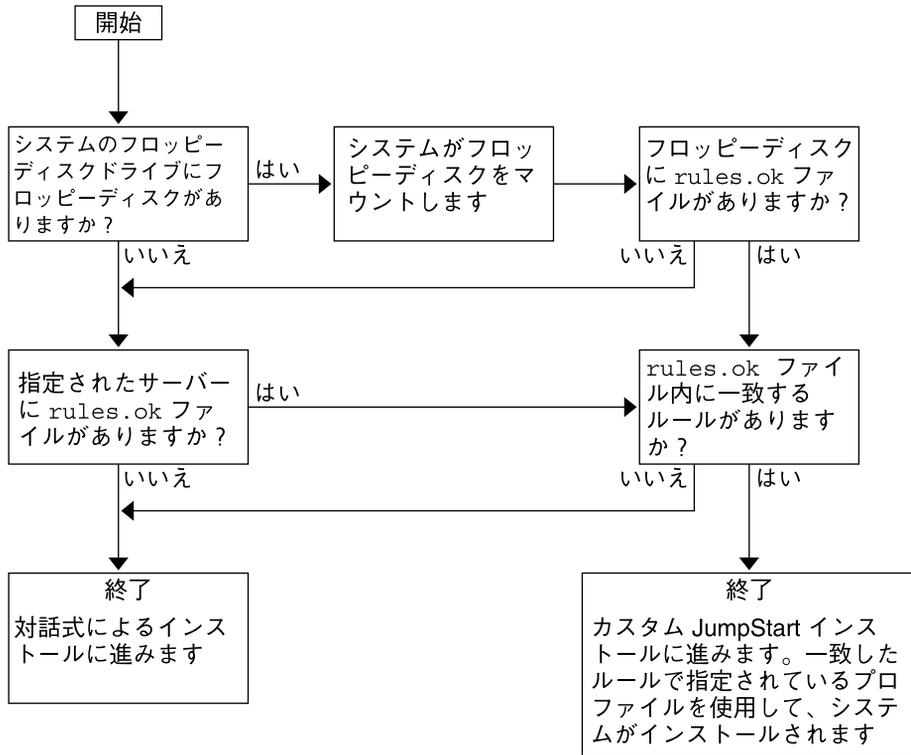
ウェアをインストールするように指定されています。JumpStart プログラムは、エンジニアリング部のプロファイルを読み取り、システム管理者がエンジニアリング部のプロファイルに指定した指示に基づいて Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。

図 2-2 JumpStart インストールの流れ: ネットワークに接続されている場合の例



次の図に、JumpStart プログラムが JumpStart ファイルを検索する順序を示します。

図 2-3 JumpStart インストール実行時の流れ



JumpStart インストールの準備 (タスク)

この章では、JumpStart インストール方法を使用して各サイトのシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために必要な準備の手順について説明します。

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、第9章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 20 ページの「タスクマップ: JumpStart インストールの準備」
- 21 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」
- 26 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」
- 31 ページの「rules ファイルの作成」
- 35 ページの「プロファイルの作成」
- 49 ページの「プロファイルのテスト」
- 54 ページの「rules ファイルの妥当性を検査する」

タスクマップ:JumpStart インストールの準備

表 3-1 タスクマップ:JumpStart インストールの準備

タスク	説明	参照先
旧バージョンの Oracle Solaris ソフトウェアがシステム上にインストールされている場合は、システムをアップグレードする方法を決定します。	システムに以前の Oracle Solaris リリースがインストールされている場合は、システムをアップグレードする方法を決める必要があります。システムアップグレードの前と後に実施すべき作業を明確にしておいてください。計画を立てることによって、プロファイル、開始スクリプト、終了スクリプトなどの作成が容易になります。	『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド:インストールとアップグレードの計画』の「アップグレード計画」
JumpStart ディレクトリを作成します。	<p>サーバーの場合</p> <p>ネットワーク接続されたシステムに対して JumpStart インストールを実行する場合は、プロファイルサーバーを作成する必要があります。プロファイルサーバーには、JumpStart ファイル用の JumpStart ディレクトリが入っています。</p> <p>フロッピーディスクの場合</p> <p>ネットワークに接続されていないシステムに対して JumpStart インストールを実行する場合は、プロファイルフロッピーディスクを作成する必要があります。プロファイルフロッピーディスクには、JumpStart ファイルが入っています。</p>	<p>21 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」</p> <p>26 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」</p>
ルールを rules ファイルに追加します。	各システムグループまたは単一のシステムをどのようにインストールするか決定したあとで、インストールする各グループに対してルールを作成します。各ルールは、1つ以上のシステム属性に基づいてグループを識別し、それぞれのグループを1つのプロファイルにリンクします。	31 ページの「rules ファイルの作成」

表 3-1 タスクマップ: JumpStart インストールの準備 (続き)

タスク	説明	参照先
ルールごとにプロファイルを作成します。	プロファイルは、Oracle Solaris ソフトウェアをシステムにインストール方法 (たとえば、どのソフトウェアグループをインストールするか) を定義するテキストファイルです。すべてのルールはプロファイルを指定して、ルールが一致したときに Oracle Solaris がシステムにどのようにインストールされるかを定義します。通常は、ルールごとに異なるプロファイルを作成します。しかし、複数のルールで同じプロファイルを使用することも可能です。	35 ページの「プロファイルの作成」
(オプション) プロファイルをテストします。	プロファイルの作成後、 <code>pfinstall(1M)</code> コマンドを使用すれば、プロファイルを使用してシステムをインストールまたはアップグレードする前に、プロファイルをテストできます。	49 ページの「プロファイルのテスト」
<code>rules</code> ファイルの妥当性をチェックします。	<code>rules.ok</code> ファイルは、 <code>rules</code> ファイルから生成されたファイルで、JumpStart プログラムはこれを使用して、インストールするシステムとプロファイルとを一致させます。 <code>rules</code> ファイルの妥当性をチェックするには、 <code>check</code> スクリプトを使用する必要があります。	54 ページの「 <code>rules</code> ファイルの妥当性をチェックする」

ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成

ネットワーク上のシステム用に JumpStart インストールを設定するときには、サーバー上に JumpStart ディレクトリを作成する必要があります。JumpStart ディレクトリには、重要な JumpStart ファイル (`rules` ファイル、`rules.ok` ファイル、プロファイルなど) がすべて置かれます。JumpStart ディレクトリは、プロファイルサーバーのルート (`/`) ディレクトリに作成する必要があります。

JumpStart ディレクトリがあるサーバーを「プロファイルサーバー」と呼びます。プロファイルサーバーは、インストールサーバーまたはブートサーバーと同じにすることも、あるいはまったく異なるサーバーとすることもできます。プロファイルサーバーは、異なったプラットフォームのシステムに JumpStart ファイルを提供できます。たとえば、x86 サーバーは、SPARC ベースのシステムと x86 ベースのシステムの両方に JumpStart ファイルを提供できます。

注- プロファイルサーバーの作成後、システムがそのサーバーにアクセスできるように設定する必要があります。詳しい手順については、[25 ページの「ワイルドカードエントリを使用してすべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする」](#)を参照してください。

▼ JumpStart ディレクトリをサーバー上に作成する方法

注- この手順では、システムで Solaris Volume Manager を実行していると仮定しています。ディスク管理に Solaris Volume Manager を使用しない場合は、『[Oracle Solaris の管理: デバイスとファイルシステム](#)』で、Solaris Volume Manager を使用せずにリムーバブルメディアを管理する方法の詳細を確認してください。

- 1 JumpStart ディレクトリを作成するサーバーを見つけます。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス](#)』の「[RBAC の構成 \(タスクマップ\)](#)」を参照してください。

- 3 サーバーに JumpStart ディレクトリを作成します。

```
# mkdir -m 755 jumpstart-dir-path
```

jumpstart-dir-path は、JumpStart ディレクトリの絶対パスです。

たとえば、次のコマンドは、ルート (/) ディレクトリに *jumpstart* というディレクトリを作成し、アクセス権を 755 に設定します。

```
# mkdir -m 755 /jumpstart
```

- 4 */etc/dfs/dfstab* ファイルに次のエントリを追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 jumpstart-dir-path
```

たとえば、次のエントリは */jumpstart* ディレクトリを共有します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /jumpstart
```

- 5 「*shareall*」 と入力し、Return キーを押します。
- 6 (省略可能) サンプルの JumpStart ファイルを JumpStart ディレクトリにコピーします。
 - a. インストールディスクまたはイメージにアクセスします。

サンプルのコピー元	手順
プラットフォームに対応した Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD	サーバーの CD-ROM ドライブに、Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD を挿入します。 Solaris Volume Manager が自動的に CD または DVD をマウントします。
ローカルディスク上にある、プラットフォームに対応した Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD のイメージ	Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 イメージが置かれたディレクトリに移動します。コマンド例を示します。 <code>cd /export/install</code>

- b. サンプルの **JumpStart** ファイルをプロファイルサーバー上の **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
# cp -r media-path/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart-dir-path
media-path          CD、DVD、またはローカルディスク上のイメージのパス
jumpstart-dir-path JumpStart ファイルの例を配置する、プロファイル
                  サーバー上のパス
```

たとえば、次のコマンドは、`jumpstart_sample` ディレクトリをプロファイルサーバー上の `/jumpstart` ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* /jumpstart
```

- c. サンプル **JumpStart** ファイルを更新し、それらのファイルがサイトの環境内で動作するようにします。
- 7 **root** が **JumpStart** ディレクトリを所有していて、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認します。
- 8 ネットワーク上のシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるように設定します。
詳しい手順については、25 ページの「ワイルドカードエントリを使用してすべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする」を参照してください。

すべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする

プロファイルサーバーを作成する際に、システムが JumpStart インストール中にプロファイルサーバーの JumpStart ディレクトリにアクセスできるようにする必要があります。アクセスできるようにするには、次の表で説明するいずれかの方法を使用します。

コマンドまたはファイル	アクセスの提供	手順
add_install_client コマンド	<p>ネットワークインストールでシステムを追加するたびに、add_install_client コマンドに -c オプションを使用してプロファイルサーバーを指定します。</p> <p>注-NFS を使用していない場合は、別の方法を使用してアクセスを提供する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SPARC システムでは boot コマンドを使用します ■ x86 システムでは GRUB メニューを編集します。GRUB は Oracle Solaris の機能です。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ DVD メディアの場合は、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムの追加」を参照してください。 ■ CD メディアの場合は、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムの追加」を参照してください。

コマンドまたはファイル	アクセスの提供	手順
システムのブート時に JumpStart ディレクトリの場所を指定します	<ul style="list-style-type: none"> ■ SPARC システムでは、<code>boot</code> コマンドを使用してシステムをブートします。システムのブート時にプロファイルサーバー上の JumpStart ディレクトリの場所を指定します。JumpStart 構成ファイルは、圧縮して1つのファイルにする必要があります。続いて、圧縮されたその構成ファイルを HTTP サーバーまたは HTTPS サーバーに保存します。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 65 ページの「圧縮された構成ファイルの作成」 ■ 85 ページの「SPARC: JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする」の手順 3
	<ul style="list-style-type: none"> ■ x86 システムでは、システムをブートするときに GRUB メニューのブートエントリを編集して、プロファイルサーバーの JumpStart ディレクトリの場所を指定します。JumpStart 構成ファイルは、圧縮して1つのファイルにする必要があります。続いて、圧縮されたその構成ファイルを HTTP サーバーまたは HTTPS サーバーに保存します。GRUB メニューのエントリを編集する場合は、圧縮ファイルの場所を指定します。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 65 ページの「圧縮された構成ファイルの作成」 ■ 90 ページの「x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグレードを実行する方法」
<code>/etc/bootparams</code> ファイル またはネームサービスの <code>bootparam</code> データベース	ワイルドカードを追加します。	

ワイルドカードエントリを使用してすべてのシステムがプロファイルサーバーにアクセスできるようにする

ネットワークインストールの情報を次の場所に格納している場合にのみ、ワイルドカードエントリを使用して、すべてのシステムにプロファイルサーバーへのアクセスを許可できます。

- `/etc/bootparams` ファイル内
- ネームサービスの `bootparams` データベース内

システムは、同じタイプ (たとえば、すべて SPARC システム) である必要があります。

ファイルまたはデータベースに次のエントリを追加します。

- ```
* install_config=server:jumpstart-dir-path
*
server
```
- すべてのシステムにアクセスできるように指定するワイルドカード文字
- JumpStart ディレクトリがあるプロファイルサーバーのホスト名

`jumpstart-dir-path` JumpStart ディレクトリの絶対パス

たとえば、次のエントリはすべてのシステムが、`sherlock` というプロファイルサーバーにある `/jumpstart` ディレクトリにアクセスできるようにします。

```
* install_config=sherlock:/jumpstart
```



---

注意- この手順を使用した場合、インストールクライアントをブートしたときに次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
WARNING: getfile: RPC failed: error 5: (RPC Timed out).
```

このエラーメッセージの詳細は、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「ネットワークからのブート時のエラーメッセージ」を参照してください。

---

これで、すべてのシステムはプロファイルサーバーにアクセスできるようになりました。

## スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成

JumpStart ディレクトリが収められているフロッピーディスクを「プロファイルフロッピーディスク」と呼びます。ネットワークに接続されていないシステムには、プロファイルサーバーへのアクセス権はありません。このため、システムがネットワークに接続されていない場合はフロッピーディスク上に JumpStart ディレクトリを作成する必要があります。プロファイルフロッピーディスクを作成するシステムには、フロッピーディスクドライブが必要です。

JumpStart ディレクトリには、`rules` ファイル、`rules.ok` ファイル、プロファイルなどの基本的な JumpStart ファイルがすべて収められています。JumpStart ディレクトリは、プロファイルフロッピーディスクのルート (`/`) ディレクトリに作成する必要があります。

次のいずれかの手順を参照してください。

- 27 ページの「SPARC: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法」
- 29 ページの「x86: GRUB を使用してプロファイルフロッピーディスクを作成する方法」

## ▼ SPARC: プロファイルフロッピーディスクを作成する方法

注- この手順では、システムで Solaris Volume Manager を実行していると仮定しています。フロッピーディスク、CD、および DVD の管理に Solaris Volume Manager を使用しない場合は、『Oracle Solaris の管理: デバイスとファイルシステム』で、Solaris Volume Manager を使用せずにリムーバブルメディアを管理する方法の詳細を確認してください。

- 1 フロッピーディスクドライブを持つ SPARC システムを見つけます。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス』の「RBAC の構成 (タスクマップ)」を参照してください。
- 3 空のフロッピーディスクまたは上書き可能なディスクをフロッピーディスクドライブに挿入します。
- 4 フロッピーディスクをマウントします。  

```
volcheck
```
- 5 システム上の `/etc/mnttab` ファイルに次のようなエントリがあるかどうかを調べて、フロッピーディスクに UNIX ファイルシステム (UFS) が含まれているかどうかを判定します。  

```
/vol/dev/diskette0/scrap /floppy/scrap ufs suid,rw,largefiles,dev=1740008 927147040
```

  - エントリが存在する場合は、次の手順に進みます。
  - エントリが存在しない場合は、フロッピーディスク上に UFS を作成します。  

```
newfs /vol/dev/aliases/floppy0
```
- 6 (省略可能) サンプルの JumpStart ファイルを JumpStart ディレクトリにコピーします。
  - a. インストールディスクまたはイメージにアクセスします。

| サンプルのコピー元                                                                                                  | 手順                                                                                                                                                                             |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版)                 | サーバーの CD-ROM ドライブに Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) を挿入します。<br><br>Solaris Volume Manager が自動的に CD または DVD をマウントします。 |
| ローカルディスク上の Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) イメージ | Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) イメージが置かれたディレクトリに移動します。コマンド例を示します。<br><br><b>cd /export/install</b>                  |

- b. サンプルの **JumpStart** ファイルをプロファイルフロッピーディスクの **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
cp -r media-path/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart-dir-path
```

*media-path*            CD、DVD、またはローカルディスク上のイメージのパス

*jumpstart-dir-path*   サンプルの JumpStart ファイルを置くプロファイルフロッピーディスクのパス

注-すべての JumpStart インストールファイルは、フロッピーディスクのルート (/) ディレクトリに置かれている必要があります。

たとえば、次のコマンドは、Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) の `jumpstart_sample` の内容を、プロファイルフロッピーディスク `scrap` のルート (/) ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* /floppy/scrap
```

- c. プロファイルフロッピーディスク上の **JumpStart** ファイルの例を更新して、サイトの環境内で動作するようにします。
- 7 **root** が **JumpStart** ディレクトリを所有していて、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認します。
- 8 フロッピーディスクを取り出します。

```
eject floppy
```

これで、プロファイルフロッピーディスクの作成が完了しました。これで、`rules` ファイルを更新してプロファイルフロッピーディスクにプロファイルを作成し、JumpStart インストールを実行できます。続行するには、[31 ページの「rules ファイルの作成」](#)へ進みます。

## ▼ x86: GRUB を使用してプロファイルフロッピーディスクを作成する方法

GRUB を使用してプロファイルフロッピーディスクを作成するには、この手順を使用します。GRUB メニューを使用すればインストール手順の実行中にブート処理を実行できます。以前のリリースではシステムのブートに Oracle Solaris Device Configuration Assistant (デバイス構成用補助) が必要となる場合がありますが、GRUB メニューはそれに代わるものです。

---

注 - この手順では、システムで Solaris Volume Manager を実行していると仮定しています。フロッピーディスク、CD、および DVD の管理に Solaris Volume Manager を使用しない場合は、『Oracle Solaris の管理: デバイスとファイルシステム』で、Solaris Volume Manager を使用せずにリムーバブルメディアを管理する方法の詳細を確認してください。

---

- 1 フロッピーディスクドライブを持つ x86 システムを見つけます。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス』の「RBAC の構成 (タスクマップ)」を参照してください。
- 3 空のフロッピーディスクまたは上書き可能なディスクをフロッピーディスクドライブに挿入します。
- 4 フロッピーディスクをマウントします。  
`# volcheck`
- 5 (省略可能) サンプルの JumpStart ファイルを JumpStart ディレクトリにコピーします。
  - a. インストールディスクまたはイメージにアクセスします。

| サンプルのコピー元                                                                              | 手順                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) | サーバーの CD-ROM ドライブに、Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) を挿入します。<br><br>Solaris Volume Manager が自動的に DVD または CD をマウントします。 |

| サンプルのコピー元                                                                                              | 手順                                                                                                                                                                   |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ローカルディスク上の Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) イメージ | Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) イメージが置かれたディレクトリに移動します。たとえば、次のように入力します。<br><br><code>cd /export/install</code> |

- b. サンプルの **JumpStart** ファイルをプロファイルフロッピーディスクの **JumpStart** ディレクトリにコピーします。

```
cp -r media-path/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* jumpstart-dir-path
media-path CD、DVD、またはローカルディスク上のイメージのパス
jumpstart-dir-path サンプルの JumpStart ファイルを置くプロファイルフ
 ロッピーディスクのパス
```

注-すべての JumpStart インストールファイルは、プロファイルフロッピーディスクのルート (/) ディレクトリに置かれている必要があります。

たとえば、次のコマンドは、Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) の `jumpstart_sample` の内容を、プロファイルフロッピーディスク `scrap` のルート (/) ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /cdrom/cdrom0/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample/* /floppy/scrap
```

- c. プロファイルフロッピーディスク上の **JumpStart** ファイルの例を更新して、サイトの環境内で動作するようにします。
- 6 **root** が **JumpStart** ディレクトリを所有していて、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認します。
  - 7 「ファイル・マネージャ (**File Manager**)」ウィンドウの「取り出し (**Eject Disk**)」をクリックするか、コマンド行に `eject floppy` と入力して、フロッピーディスクを取り出します。
  - 8 「リムーバブルメディア・マネージャ (**Removable Media Manager**)」画面で「了解 (**OK**)」をクリックします。
  - 9 フロッピーディスクを手動で取り出します。

次の手順 これで、プロファイルフロッピーディスクの作成が完了しました。rules ファイルを更新してプロファイルフロッピーディスクにプロファイルを作成し、JumpStart インストールを実行できます。続行するには、31 ページの「rules ファイルの作成」へ進みます。

## rules ファイルの作成

rules ファイルは、Oracle Solaris OS をインストールする各システムグループのルールが含まれているテキストファイルです。各ルールは1つ以上のシステム属性に基づいたシステムグループを識別します。また、各ルールは各グループをプロファイルにリンクします。プロファイルは、グループ内の各システムに Oracle Solaris ソフトウェアがどのようにインストールされるかを定義するテキストファイルです。たとえば、次のルールは JumpStart プログラムが basic\_prof プロファイル内の情報を使用し、sun4u プラットフォームグループを持つすべてのシステムに対してインストールを実行することを示します。

```
karch sun4u - basic_prof -
```

rules ファイルを使用して、JumpStart インストールに必要な rules.ok ファイルを作成します。

---

注-26 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」または 21 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」の手順に従って JumpStart ディレクトリを設定した場合は、rules ファイルのサンプルがすでに JumpStart ディレクトリに置かれています。rules ファイルのサンプルには、説明といくつかのルール例があります。サンプルの rules ファイルを利用する場合は、使用しないルール例は必ずコメントにしておいてください。

---

## rules ファイルの構文

rules ファイルには、次の属性が必要です。

- ファイルに rules という名前が付けられています。
- ファイルに1つ以上のルールが含まれています。

rules ファイルには、次の要素を任意に含めることができます。

- コメント  
行中の # 記号の後ろのテキストは、JumpStart によってコメントとして扱われ  
ます。行が # 記号で始まる場合は、行全体がコメントとして扱われます。
- 1 行以上の空白行

- 1つまたは複数の複数行ルール  
1つのルールを新しい行に折り返すには、Return キーを押す直前にバックスラッシュ文字 (\) を入力します。

## ▼ rules ファイルを作成する方法

- 1 テキストエディタを使って **rules** という名前のテキストファイルを作成するか、作成済みの **JumpStart** ディレクトリにあるサンプルの **rules** ファイルを開きます。

- 2 **Oracle Solaris** ソフトウェアをインストールするシステムの各グループの **rules** ファイルにルールを追加します。

rules ファイルのキーワードと値については、[105 ページの「ルールキーワードと値の説明」](#)を参照してください。

rules ファイル内のルールは、次の構文に従って記述します。

```
!rule-keyword rule-value && !rule-keyword rule-value ... begin profile finish
```

!                   ルールキーワードの前で使用し、否定を示す記号。

*rule-keyword*    ホスト名 (hostname) やメモリーサイズ (memsize) などの一般的なシステム属性を記述する、事前定義された字句単位または語。rule-keyword は、同じ属性を持つシステムを1つのプロファイルに対応させるためにルール値とともに使用されます。ルールキーワードの一覧は、[105 ページの「ルールキーワードと値の説明」](#)を参照してください。

*rule-value*     対応するルールキーワードに特定のシステム属性を付与する値。ルール値については、[105 ページの「ルールキーワードと値の説明」](#)を参照してください。

&&               ルールキーワードとルール値の複数のペアを1つのルールに結合するために使用する記号 (論理演算子 AND)。JumpStart インストール時に、システムがルール内のすべてのペアに一致しなければ、ルールの一致は成立しません。

*begin*           インストール開始前に実行されるオプションの Bourne シェルスクリプト名。開始スクリプトがない場合、このフィールドにマイナス記号 (-) を指定する必要があります。開始スクリプトはすべて、JumpStart ディレクトリになければなりません。

開始スクリプトの詳しい作成方法については、[57 ページの「開始スクリプトの作成」](#)を参照してください。

*profile*        テキストファイル名。システムがルールに一致したときに Oracle Solaris ソフトウェアがシステムにどのようにインストールされるか

を定義しています。プロファイル内の情報は、プロファイルキーワードと、それらに対応するプロファイル値から構成されます。すべてのプロファイルは JumpStart ディレクトリになければなりません。

---

注-プロファイルフィールドの別の使用方法については、72 ページの「サイト固有のインストールプログラムの使用」と 58 ページの「開始スクリプトによる派生プロファイルの作成」を参照してください。

---

*finish* インストール終了後に実行されるオプションの Bourne シェルスクリプト名。終了スクリプトがない場合、このフィールドにマイナス記号 (-) を指定する必要があります。終了スクリプトはすべて、JumpStart ディレクトリになければなりません。

終了スクリプトの詳細な作成方法については、60 ページの「終了スクリプトの作成」を参照してください。

各ルールには、少なくとも次の要素を含める必要があります。

- キーワード、値、および対応するプロファイル
- *begin* および *finish* フィールド内のマイナス記号 (-) (開始および終了スクリプトが指定されない場合)

- 3 **rules** ファイルを JumpStart ディレクトリに保存します。
- 4 **root** が **rules** ファイルを所有していて、そのアクセス権が 644 に設定されていることを確認します。

## rules ファイルの例

次のサンプルファイルは、rules ファイル内のルールをいくつか示しています。各行には、ルールキーワードとそのキーワードに有効な値があります。JumpStart プログラムは、rules ファイルを上から下へ走査します。

ルールキーワードと値を既知のシステムに一致させることができた場合、JumpStart プログラムはプロファイルフィールドに示されているプロファイルによって指定された Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。

rules ファイルの制限に関する詳細なリストについては、31 ページの「rules ファイルの構文」を参照してください。

## 例3-1 rule ファイル

```

rule keywords and rule values begin script profile finish script

hostname eng-1 - basic_prof -
network 192.168.255.255 && !model \
'SUNW,Sun-Blade-100' - net_prof -
model SUNW,SPARCstation-LX - lx_prof complete
network 192.168.2.0 && karch i86pc setup x86_prof done
memsize 64-128 && arch i386 - prog_prof -
any - - generic_prof -

```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|          |                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| hostname | このルールは、システムのホスト名が <code>eng-1</code> の場合に一致します。 <code>basic_prof</code> プロファイルは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。                                                                                                                                            |
| network  | このルールは、システムがサブネット <code>192.168.255.255</code> 上にあり、 <i>Sun Blade 100</i> ( <code>SUNW,Sun-Blade-100</code> ) でない場合に一致します。 <code>net_prof</code> プロファイルは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。このルールでは、バックスラッシュ文字 ( <code>\</code> ) を使って、1つのルールを新規行に継続する例も示されます。 |
| model    | このルールは、システムが <code>SPARCstation LX</code> である場合に一致します。 <code>lx_prof</code> プロファイルと <code>complete</code> 終了スクリプトは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。                                                                                                         |
| network  | このルールは、システムがサブネット <code>192.168.2.0</code> 上にあって、 <code>x86</code> ベースのシステムである場合に一致します。 <code>setup</code> 開始スクリプト、 <code>x86u_prof</code> プロファイル、および <code>done</code> 終了スクリプトは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。                                           |
| memsize  | このルールは、システムが <code>64-128M</code> バイトのメモリーを持つ <code>x86</code> システムである場合に一致します。 <code>prog_prof</code> プロファイルは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。                                                                                                             |
| any      | このルールは、前述のルールに一致しなかったすべてのシステムに一致します。 <code>generic_prof</code> プロファイルは、このルールに一致するシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするために使用されます。 <code>any</code> を使用する場合は、この値を常に <code>rules</code> ファイルの最後のファイルとして使用する必要があります。                                                                     |

## プロファイルの作成

プロファイルは、システムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする方法を定義するテキストファイルです。プロファイルには、インストール要素(インストールするソフトウェアグループなど)を指定します。各ルールには、システムのインストール方法を示すプロファイルを指定します。プロファイルは、ルールごとに異なるものを作成しても、複数のルールに同じものを使用しても構いません。

プロファイルは、1つ以上のプロファイルキーワードとその値から成ります。各プロファイルキーワードは、JumpStart プログラムがどのようにしてシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするかを制御するコマンドです。たとえば、次のプロファイルキーワードと値は、JumpStart プログラムがシステムをサーバーとしてインクルードすることを指定しています。

```
system_type server
```

---

注- 次のいずれかの手順に従って JumpStart ディレクトリを作成した場合は、サンプルのプロファイルがすでに JumpStart ディレクトリに入っています。

- [21 ページの「ネットワーク上のシステム用のプロファイルサーバーの作成」](#)
- [26 ページの「スタンドアロンシステム用のプロファイルフロッピーディスクの作成」](#)

---

## プロファイルの構文

プロファイルには、次の要素を含めます。

- 最初のエントリが `install_type` プロファイルキーワードであること
- キーワードは1行に1つだけであること
- アップグレードされるシステムが、アップグレードできるルート (/) ファイルシステムを複数持っている場合は、`root_device` キーワード

プロファイルには次の要素を含めることができます。

- コメント  
行中の # 記号の後ろのテキストは、JumpStart プログラムによってコメントとして扱われます。行が # 記号で始まる場合は、行全体がコメントとして扱われます。
- 1行以上の空白行

## ▼ プロファイルを作成する方法

- 1 テキストエディタを使用してテキストファイルを作成するか、作成した **JumpStart** ディレクトリ内にあるサンプルのプロファイルを開きます。  
 プロファイルには、システムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする際の使用目的を表すような名前を付けてください。たとえば、`basic_install`、`eng_profile`、`user_profile` などのプロファイル名を付けます。
- 2 プロファイルにプロファイルキーワードと値を追加します。  
 プロファイルキーワードと値の一覧は、[110 ページの「プロファイルキーワードと値」](#)を参照してください。

---

注- プロファイルキーワードとプロファイル値には、大文字と小文字の区別がありません。

---

- 3 **JumpStart** ディレクトリにプロファイルを保存します。
- 4 プロファイルの所有者が **root** で、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。
- 5 (省略可能) プロファイル进行测试する  
 プロファイルのテスト方法については、[49 ページの「プロファイルのテスト」](#)を参照してください。

## プロファイルの例

次のプロファイル例は、さまざまなプロファイルキーワードとプロファイル値を使用して、Oracle Solaris ソフトウェアをシステムにどのようにインストールするかを指定する方法を示しています。[110 ページの「プロファイルキーワードと値」](#)では、プロファイルキーワードと値を説明しています。

---

注- Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、[第9章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」](#)の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

---

例 3-2 リモートファイルシステムのマウントとパッケージの追加および削除

```
profile keywords profile values

install_type initial_install
```

## 例 3-2 リモートファイルシステムのマウントとパッケージの追加および削除 (続き)

```

system_type standalone
partitioning default
filesystems any 512 swap # specify size of /swap
cluster SUNWCprog
package SUNWman delete
cluster SUNWCacc

```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                                                                                                      |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| install_type | install_type キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。                                                                                                 |
| system_type  | system_type キーワードは、システムをスタンドアロンシステムとしてインストールするように定義します。                                                                              |
| partitioning | ファイルシステムスライスは、インストールするソフトウェアごとに default 値を使用して決定されます。swap のサイズは 512M バイトに設定され、値 any に基づいてすべてのディスクにインストールされます。                        |
| cluster      | 開発者システムサポートソフトウェアグループ (SUNWCprog) がシステムにインストールされます。                                                                                  |
| パッケージ        | 標準のマニュアルページがネットワークのファイルサーバー (s_ref) からマウントされる場合は、マニュアルページパッケージはシステムにインストールされません。System Accounting ユーティリティーが入ったパッケージはシステムにインストールされます。 |

## 例 3-3 リモートファイルシステムのマウントと Sun 以外のパッケージの追加

```

profile keywords profile values

install_type initial_install
system_type standalone
partitioning default
filesystems any 512 swap # specify size of /swap
cluster SUNWCprog
cluster SUNWCacc
package apache_server \
 http://package.central/packages/apache timeout 5

```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                         |
|--------------|---------------------------------------------------------|
| install_type | install_type キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。                    |
| system_type  | system_type キーワードは、システムをスタンドアロンシステムとしてインストールするように定義します。 |

例 3-3 リモートファイルシステムのマウントと Sun 以外のパッケージの追加 (続き)

|              |                                                                                                               |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| partitioning | ファイルシステムスライスは、インストールするソフトウェアごとに default 値を使用して決定されます。swap のサイズは 512M バイトに設定され、値 any に基づいてすべてのディスクにインストールされます。 |
| cluster      | 開発者システムサポートソフトウェアグループ (SUNWCprog) がシステムにインストールされます。                                                           |
| パッケージ        | HTTP サーバー上に置かれた Sun 以外のパッケージがシステムにインストールされます。                                                                 |

例 3-4 ファイルシステムのインストール場所の指定

```
profile keywords profile values

install_type initial_install
system_type standalone
partitioning explicit
fileys c0t0d0s0 auto /
fileys c0t3d0s1 auto swap
fileys any auto usr
cluster SUNWCall
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| partitioning | 値が explicit であるため、ファイルシステムスライスは fileys キーワードによって指定します。ルート (/) のサイズは、値 auto により選択したソフトウェアに基づいて自動的に設定されて c0t0d0s0 にインストールされます。swap も同様に、必要なサイズに設定された上で c0t3d0s1 上にインストールされます。usr は、値 any により選択したソフトウェアに基づきインストールプログラムによってインストール先が決定されます。 |
| cluster      | 全体ディストリビューションソフトウェアグループ (SUNWCall) がシステムにインストールされます。                                                                                                                                                                                   |

例 3-5 パッチのアップグレードとインストール

```
profile keywords profile values

install_type upgrade
root_device c0t3d0s2
backup_media remote_filesystem timber:/export/scratch
package SUNWbcp delete
package SUNWxwman add
cluster SUNWCacc add
patch patch_list nfs://patch_master/Solaris_10/patches \
 retry 5
locale de
```

## 例 3-5 パッチのアップグレードとインストール (続き)

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                                                                                                             |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| install_type | このプロファイルは、ディスク容量を再配置することによってシステムをアップグレードします。この例では、システム上のファイルシステムのいくつかにアップグレード用の容量が十分でないため、ディスク領域を再配置する必要があります。                              |
| root_device  | c0t3d0s2 のルートファイルシステムがアップグレードされます。                                                                                                          |
| backup_media | リモートシステム timber が、ディスク容量の再配置中のデータのバックアップに使用されます。バックアップメディアのキーワード値については、118 ページの「 <a href="#">backup_media プロファイル キーワード</a> 」を参照してください。      |
| パッケージ        | バイナリ互換パッケージ (SUNWbcp) は、アップグレード後、システムにインストールされません。                                                                                          |
| パッケージ        | このコードは、X Window System のマニュアルページと、System Accounting ユーティリティがまだシステムにインストールされていない場合に、インストールされるようにするものです。すでにシステム上にあるすべてのパッケージが自動的にアップグレードされます。 |
| patch        | アップグレードでインストールされるパッチのリストです。パッチリストは、patch_master という名前の NFS サーバーの Solaris_10/patches ディレクトリに格納されています。マウントに失敗した場合、NFS マウントが 5 回試行されます。        |
| ロケール         | ドイツ語対応パッケージがシステムにインストールされます。                                                                                                                |

## 例 3-6 アップグレード用ディスク容量の再配置

```
profile keywords profile values

install_type upgrade
root_device c0t3d0s2
backup_media remote_filesystem timber:/export/scratch
layout_constraint c0t3d0s2 changeable 100
layout_constraint c0t3d0s4 changeable
layout_constraint c0t3d0s5 movable
package SUNWbcp delete
package SUNWxwman add
cluster SUNWCacc add
locale de
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                      |
|--------------|------------------------------------------------------|
| install_type | このプロファイルは、ディスク容量を再配置することによってシステムをアップグレードします。この例では、シス |
|--------------|------------------------------------------------------|

例 3-6 アップグレード用ディスク容量の再配置 (続き)

テム上のファイルシステムのいくつかにアップグレード用の容量が十分でないため、ディスク領域を再配置する必要があります。

|                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| root_device       | c0t3d0s2 のルートファイルシステムがアップグレードされま<br>す。                                                                                                                                                                                                                                              |
| backup_media      | リモートシステム timber が、ディスク容量の再配置中の<br>データのバックアップに使用されます。バックアップメ<br>ディアのキーワード値については、118 ページ<br>の「 <a href="#">backup_media</a> プロファイルキーワード」を参照してくだ<br>さい。                                                                                                                                |
| layout_constraint | layout_constraint キーワードは、アップグレードのために<br>ディスク領域の再配置を行う時に自動レイアウトが次のこと<br>を実施できることを示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ スライス 2 と 4 を変更します。これらのスライスはほかの<br/>場所へ移動が可能であり、サイズも変更できます。</li> <li>■ スライス 5 を移動します。スライスをほかの場所へ移動す<br/>ることはできますが、そのサイズを変更することはできま<br/>せん。</li> </ul> |
| パッケージ             | バイナリ互換パッケージ (SUNWbcp) は、アップグレード後、シ<br>ステムにインストールされません。                                                                                                                                                                                                                              |
| パッケージ             | このコードは、X Window System のマニュアルページ<br>と、System Accounting ユーティリティーがまだシステムにイ<br>ンストールされていない場合に、インストールされるよう<br>にするものです。すでにシステム上にあるすべてのパッケージ<br>が自動的にアップグレードされます。                                                                                                                        |
| ロケール              | ドイツ語対応パッケージがシステムにインストールされま<br>す。                                                                                                                                                                                                                                                    |

例 3-7 HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取得する

次の例のプロファイルは、JumpStart プログラムが HTTP サーバーからフ  
ラッシュアーカイブを取得するように指定しています。(フラッシュアーカイブは  
Oracle Solaris の機能です。)

```
profile keywords profile values

install_type flash_install
archive_location http://192.168.255.255/flasharchive/solarisarchive
partitioning explicit
filesystem c0t1d0s0 4000 /
```

## 例 3-7 HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取得する (続き)

```

filesys c0t1d0s1 512 swap
filesys c0t1d0s7 free /export/home

```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type</code>     | このプロファイルにより、フラッシュアーカイブがクローンシステムにインストールされます。すべてのファイルは、初期インストールにより上書きされます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| <code>archive_location</code> | フラッシュアーカイブは HTTP サーバーから取得されます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| <code>partitioning</code>     | 値が <code>explicit</code> であるため、ファイルシステムスライスは <code>filesys</code> キーワードによって指定します。ルート ( <code>/</code> ) のサイズは、フラッシュアーカイブのサイズに基づいて割り当てています。ルートファイルシステムは <code>c0t1d0s0</code> にインストールされます。swap は、必要なサイズを割り当てた上で、 <code>c0t1d0s1</code> 上にインストールされるように設定しています。 <code>/export/home</code> のサイズは残りのディスク容量に基づいて決定されます。 <code>/export/home</code> は <code>c0t1d0s7</code> 上にインストールされます。 |

## 例 3-8 セキュア HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取得する

次の例のプロファイルは、JumpStart プログラムがセキュア HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取得するように指定しています。

```

profile keywords profile values

install_type flash_install
archive_location https://192.168.255.255/solarisupdate.flar
partitioning explicit
filesys c0t1d0s0 4000 /
filesys c0t1d0s1 512 swap
filesys c0t1d0s7 free /export/home

```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|                               |                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type</code>     | このプロファイルにより、フラッシュアーカイブがクローンシステムにインストールされます。すべてのファイルは、初期インストールにより上書きされます。                                                                                                                                                                    |
| <code>archive_location</code> | 圧縮されたフラッシュアーカイブがセキュア HTTP サーバーから取得されます。                                                                                                                                                                                                     |
| <code>partitioning</code>     | 値が <code>explicit</code> であるため、ファイルシステムスライスは <code>filesys</code> キーワードによって指定します。ルート ( <code>/</code> ) のサイズは、フラッシュアーカイブのサイズに基づいて割り当てています。swap は、必要なサイズを割り当てた上で、 <code>c0t1d0s1</code> 上にインストールされるように設定しています。 <code>/export/home</code> のサイ |

例 3-8 セキュア HTTP サーバーからフラッシュアーカイブを取得する (続き)

ズは残りのディスク容量に基づいて決定されま  
す。/export/home は c0t1d0s7 上にインストールされます。

例 3-9 フラッシュアーカイブを取得してサードパーティーのパッケージをインストールする  
次の例のプロファイルは、JumpStart プログラムが HTTP サーバーからフ  
ラッシュアーカイブを取得するように指定しています。

```
profile keywords profile values

install_type flash_install
archive_location http://192.168.255.255/flasharchive/solarisarchive
partitioning explicit
filesys c0t1d0s0 4000 /
filesys c0t1d0s1 512 swap
filesys c0t1d0s7 free /export/home
package SUNWnew http://192.168.254.255/Solaris_10 timeout 5
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|                  |                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| install_type     | このプロファイルにより、フラッシュアーカイブがクローンシステムにインストールされます。すべてのファイルは、初期インストールにより上書きされます。                                                                                                                                                                                                     |
| archive_location | フラッシュアーカイブは HTTP サーバーから取得されます。                                                                                                                                                                                                                                               |
| partitioning     | 値が explicit であるため、ファイルシステムスライスは filesys キーワードによって指定します。ルート (/) のサイズは、フラッシュアーカイブのサイズに基づいて割り当てています。ルートファイルシステムは c0t1d0s0 にインストールされま<br>す。swap は、必要なサイズを割り当てた上で、c0t1d0s1 上にインストールされるように設定しています。/export/home のサイズは残りのディスク容量に基づいて決定されま<br>す。/export/home は c0t1d0s7 上にインストールされます。 |
| パッケージ            | SUNWnew パッケージは HTTP サーバー 192.168.254.255 の Solaris_10 ディレクトリから追加されます。                                                                                                                                                                                                        |

例 3-10 NFS サーバーからフラッシュアーカイブ差分アーカイブを取得する

次の例のプロファイルは、JumpStart プログラムが NFS サーバーからフ  
ラッシュアーカイブを取得するように指定しています。flash\_update キーワード  
は、これが差分アーカイブであることを示しています。差分アーカイブでは、2つの  
システムイメージの相違部分のみがインストールされます。

```
profile keywords profile values

install_type flash_update
```

## 例3-10 NFSサーバーからフラッシュアーカイブ差分アーカイブを取得する (続き)

```
archive_location nfs installserver:/export/solaris/flasharchive \
 /solarisdiffarchive
no_master_check
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|                  |                                                                              |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| install_type     | このプロファイルは、フラッシュアーカイブ差分アーカイブをクローンシステムにインストールします。アーカイブで指定されたファイルだけがインストールされます。 |
| archive_location | フラッシュアーカイブはNFSサーバーから取得されます。                                                  |
| no_master_check  | クローンシステムは、有効なシステムイメージであるかどうかチェックされません。有効なシステムイメージが、元のマスターシステムを使用して構築されているはずで |

## 例3-11 空のブート環境の作成

次の例のプロファイルは、JumpStart プログラムが空のブート環境を作成するように指定しています。空のブート環境には、ファイルシステムは含まれません。また、現在のブート環境からコピーされることもありません。あとでフラッシュアーカイブをこのブート環境に格納し、アクティブにすることができます。

```
profile keywords profile values

install_type initial_install
system_type standalone
partitioning explicit
fileys c0t0d0s0 auto /
fileys c0t3d0s1 auto swap
fileys any auto usr
cluster SUNWCall
bootenv createbe bename second_BE \
filesystem /:/dev/dsk/c0t1d0s0:ufs \
filesystem -:/dev/dsk/c0t1d0s0:swap \
filesystem /export:shared:ufs
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|              |                                                                                                                                                                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| partitioning | 値がexplicitであるため、ファイルシステムスライスはfileys キーワードによって指定します。ルート (/) のサイズは、値 auto により選択したソフトウェアに基づいて自動的に設定されて c0t0d0s0 にインストールされます。swap も同様に、必要なサイズに設定された上で c0t3d0s1 上にインストールされます。usr は、値 any により選択したソフトウェアに基づきインストールプログラムによってインストール先が決定されます。 |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

例 3-11 空のブート環境の作成 (続き)

|                  |                                                                                                                                                                                  |
|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| cluster          | 全体ディストリビューションソフトウェアグループ (SUNWCall) がシステムにインストールされます。                                                                                                                             |
| bootenv createbe | 空の非アクティブブート環境がディスク c0t1d0 上に設定されます。ルート (/)、スワップ、および /export のファイルシステムがそれぞれ作成されますが、空のままです。この 2 番目のブート環境には、あとでフラッシュアーカイブをインストールできます。その後、この新しいブート環境をアクティブにして、現在のブート環境と交代させることができます。 |

キーワード値とその基本的な使用方法については、次の関連情報を参照してください。

- キーワード値については、110 ページの「プロファイル キーワードと値」を参照してください。
- Live Upgrade を使用した非アクティブなブート環境の作成、アップグレード、およびアクティブ化に関する背景情報については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 2 章「Live Upgrade (概要)」を参照してください。
- フラッシュアーカイブの使用に関する背景情報については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: フラッシュアーカイブ (作成とインストール)』の第 1 章「フラッシュアーカイブの概要」を参照してください。

例 3-12 フラッシュアーカイブインストール時の RAID-1 ボリュームの作成

次の例のプロファイルには、JumpStart プログラムが Solaris Volume Manager テクノロジーを使用してルート (/)、swap、/usr、および /export/home ファイルシステムの RAID-1 ボリューム (ミラー) を作成することが示されています。フラッシュアーカイブはブート環境にインストールされます。

```
profile keywords profile values

install_type flash_install
archive_location nfs server:/export/home/export/flash.s10.SUNWCall
partitioning explicit
filesystem mirror:d10 c0t0d0s0 c0t1d0s0 4096 /
filesystem mirror c0t0d0s1 2048 swap
filesystem mirror:d30 c0t0d0s3 c0t1d0s3 4096 /usr
filesystem mirror:d40 c0t0d0s4 c0t1d0s4 4096 /usr
filesystem mirror:d50 c0t0d0s5 c0t1d0s5 free /export/home
metadb c0t1d0s7 size 8192 count 3
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

## 例 3-12 フラッシュアーカイブインストール時の RAID-1 ボリュームの作成 (続き)

|                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| install_type     | このプロファイルにより、フラッシュアーカイブがクローンシステムにインストールされます。すべてのファイルは、初期インストールにより上書きされます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| archive_location | フラッシュアーカイブは NFS サーバーから取得されます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| partitioning     | 値が explicit であるため、ファイルシステムスライスは filesys キーワードによって指定します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| filesys          | ルート (/) ファイルシステムが作成され、スライス c0t0d0s0 および c0t1d0s0 にミラー化されます。ルート (/) ファイルシステムのサイズは 4096M バイトに設定されます。c0t0d0s0 および c0t1d0s0 をミラー化する RAID-1 ボリュームに d10 という名前が付けられます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| filesys          | swap ファイルシステムが作成され、スライス c0t0d0s1 にミラー化されます。サイズは 2048M バイトです。JumpStart プログラムにより、ミラーに名前が割り当てられます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| filesys          | /usr ファイルシステムが作成され、スライス c0t1d0s3 および c0t0d0s3 にミラー化されます。/usr ファイルシステムのサイズは 4096M バイトに設定されます。RAID-1 ボリュームに d30 という名前が付けられます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| filesys          | /usr ファイルシステムが作成され、スライス c0t1d0s4 および c0t0d0s4 にミラー化されます。/usr ファイルシステムのサイズは 4096M バイトに設定されます。RAID-1 ボリュームに d40 という名前が付けられます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| metadb           | 3つの状態データベースの複製 (metadb) がスライス c0t1d0s7 にインストールされます。サイズは 8192 ブロック (4M バイト) です。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|                  | <ul style="list-style-type: none"><li>■ インストール中にミラー化されたファイルシステムを作成する方法の概要については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 8 章「インストール時の RAID-1 ボリューム (ミラー) の作成 (概要)」を参照してください。</li><li>■ ミラー化されたファイルシステムの作成のガイドラインと要件については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 9 章「インストール時の RAID-1 ボリューム (ミラー) の作成 (計画)」を参照してください。</li><li>■ キーワード値については、134 ページの「filesys プロファイルキーワード (RAID-1 ボリュームの作成)」と 142 ページの「metadb プロファイルキーワード (状態データベースの複製の作成)」を参照してください。</li></ul> |

例 3-13 ルートファイルシステムをミラー化するための RAID-1 ボリュームの作成

次の例のプロファイルには、JumpStart プログラムが Solaris Volume Manager テクノロジを使用してルート (/) ファイルシステムの RAID-1 ボリューム (ミラー) を作成することが示されています。

```
profile keywords profile values

install_type initial_install
cluster SUNWCXall
filesys mirror:d30 c0t1d0s0 c0t0d0s0 /
filesys c0t0d0s3 512 swap
metadb c0t0d0s4 size 8192 count 4
metadb c0t1d0s4 size 8192 count 4
```

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

**cluster** 全体ディストリビューションと OEM サポートソフトウェアグループ (SUNWCXall) がシステムにインストールされます。

**filesys** ルート (/) ファイルシステムが作成され、スライス **c0t1d0s0** および **c0t0d0s0** にミラー化されます。 **c0t1d0s0** および **c0t0d0s0** をミラー化する RAID-1 ボリュームに **d30** という名前が付けられます。 JumpStart プログラムにより、2つのサブミラーに名前が割り当てられます。

**filesys** swap ファイルシステムが作成され、スライス **c0t0d0s3** にミラー化されま  
す。サイズは 512M バイトです。

**metadb** 4つの状態データベースの複製 (**metadb**) がスライス **c0t0d0s4** にイン  
ストールされます。サイズは 8192 ブロック (4M バイト) です。

**metadb** 4つの状態データベースの複製 (**metadb**) がスライス **c0t1d0s4** にイン  
ストールされます。サイズは 8192 ブロック (4M バイト) です。

例 3-14 複数のファイルシステムをミラー化するための RAID-1 ボリュームの作成

次の例のプロファイルには、JumpStart プログラムが Solaris Volume Manager テクノロジを使用して、ルート (/)、swap、および /usr ファイルシステムの RAID-1 ボリューム (ミラー) を作成することが示されています。

```
profile keywords profile values

install_type initial_install
cluster SUNWCXall
filesys mirror:d100 c0t1d0s0 c0t0d0s0 200 /
filesys c0t1d0s5 500 /var
filesys c0t0d0s5 500
filesys mirror c0t0d0s1 512 swap
metadb c0t0d0s3 size 8192 count 5
filesys mirror c0t1d0s4 c0t0d0s4 2000 /usr
filesys c0t1d0s7 free /export/home
filesys c0t0d0s7 free
```

## 例 3-14 複数のファイルシステムをミラー化するための RAID-1 ボリュームの作成 (続き)

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|            |                                                                                                                                                                                                                         |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| cluster    | 全体ディストリビューションと OEM サポートソフトウェアグループ (SUNWCXall) がシステムにインストールされます。                                                                                                                                                         |
| filesystem | ルート (/) ファイルシステムが作成され、スライス c0t1d0s0 および c0t0d0s0 にミラー化されます。ルート (/) ファイルシステムのサイズは 200M バイトに設定されます。c0t1d0s0 および c0t0d0s0 をミラー化する RAID-1 ボリュームに d100 という名前が付けられます。                                                         |
| filesystem | /var ファイルシステムがスライス c0t1d0s5 にインストールされます。サイズは 500M バイトです。ルート (/) ファイルシステムが作成され、スライス c0t1d0s0 および c0t0d0s0 にミラー化されます。ルート (/) ファイルシステムのサイズは 200M バイトに設定されます。c0t1d0s0 および c0t0d0s0 をミラー化する RAID-1 ボリュームに d100 という名前が付けられます。 |
| filesystem | swap ファイルシステムが作成され、スライス c0t0d0s1 にミラー化されます。サイズは 512M バイトです。JumpStart プログラムにより、ミラーに名前が割り当てられます。                                                                                                                          |
| metadb     | 5 つの状態データベースの複製 (metadb) がスライス c0t0d0s3 にインストールされます。サイズは 8192 ブロック (4M バイト) です。                                                                                                                                         |
| filesystem | /usr ファイルシステムが作成され、スライス c0t1d0s4 および c0t0d0s4 にミラー化されます。/usr ファイルシステムのサイズは 2000M バイトに設定されます。JumpStart プログラムにより、ミラーに名前が割り当てられます。                                                                                         |

## 例 3-15 x86:fdisk キーワードの使用方法

| # profile keywords | profile values         |
|--------------------|------------------------|
| # -----            | -----                  |
| install_type       | initial_install        |
| system_type        | standalone             |
| fdisk              | c0t0d0 0x04 delete     |
| fdisk              | c0t0d0 solaris maxfree |
| cluster            | SUNWCAll               |
| cluster            | SUNWCacc delete        |

この例で使用されているキーワードと値の一部を次に示します。

|       |                                                                |
|-------|----------------------------------------------------------------|
| fdisk | タイプ DOSOS16 (04 16 進) の fdisk パーティションはすべて、c0t0d0 ディスクから削除されます。 |
| fdisk | Oracle Solaris fdisk パーティションが、c0t0d0 ディスク上の最大の連続空き領域に作成されます。   |

例 3-15 x86: fdisk キーワードの使用方法 (続き)

cluster 全体ディストリビューションソフトウェアグループ (SUNWCall) がシステムにインストールされます。

cluster システムアカウントユーティリティー (SUNWCacc) は、システムにインストールされません。

例 3-16 初期 iSCSI インストール用の JumpStart プロファイルを作成する

```
install_type initial_install
partitioning explicit
fileys rootdisk.s4 5000
fileys rootdisk.s1 2048
iscsi_target_name iqn.1986-03.com.sun:02:358ddb8-601a-e73a-df56-89
iscsi_target_ip 10.12.162.24
iscsi_target_lun 0
iscsi_target_port 3260
cluster SUNWCrnet
```

次の例は、アップグレードインストール用の JumpStart プロファイルの例を示しています。

例 3-17 iSCSI アップグレードインストール用の JumpStart プロファイル

```
install_type upgrade
iscsi_target_name iqn.1986-03.com.sun:02:358ddb8-601a-e73a-df56-89
iscsi_target_ip 10.12.162.24
iscsi_target_lun 0
iscsi_target_port 3260
iscsi_target_slice 4
```

iSCSI のアップグレードおよびインストール用の JumpStart プロファイルで使用されるキーワードの詳細は、144 ページの「iSCSI プロファイルキーワード」を参照してください。



注意 - JumpStart プロファイルでは、ディレクトリ (root ディレクトリ、スワップ空間、/usr ディレクトリなど) を作成する場所を指定するために次のキーワードが使用されます。

- fileys
- pool
- boot\_device

ディスク番号は iSCSI のインストール時に動的に生成されるため、ユーザーは iSCSI のインストール時に JumpStart プロファイル内の上記のキーワードでディスクの名称 (cXtXdXsX) を明示的に指定しないでください。

---



---

注意- プロファイルに iSCSI のキー/値情報が指定されている場合は、`boot_device` キー/値ペアと `root_device` キー/値ペアをプロファイルに含めないでください。 `root_device` キー/値ペアは、`pfinstall` コマンドによって iSCSI ターゲットに基づいて動的に割り当てられます。

---

## プロファイルのテスト

プロファイルの作成後、`pfinstall(1M)` コマンドを使ってプロファイルをテストします。プロファイルのテストは、実際にプロファイルを使用してシステムのインストールまたはアップグレードを行う前に行なってください。プロファイルのテストは、ディスク容量を再配置するアップグレードプロファイルを作成する場合、特に有用です。

`pfinstall` から生成されるインストール出力を調べることによって、意図どおりにプロファイルが動作するかどうかを簡単にチェックできます。たとえば、実際にシステムでアップグレードを行う前に、そのシステムが Oracle Solaris の新しいリリースにアップグレードするための十分なディスク容量を持っているかどうかをプロファイルで調べることができます。

`pfinstall` を利用すると、次の要素に対してプロファイルをテストできます。

- `pfinstall` を実行しているシステムのディスク構成。
- その他のディスク構成。ディスクの構造 (ディスクのバイト/セクタ、フラグ、スライスなど) を示すディスク構成ファイルを使用します。ディスク構成ファイルの作成方法については、66 ページの「ディスク構成ファイルの作成」および 71 ページの「x86: 複数ディスク構成ファイルを作成する方法」を参照してください。

---

注- ディスク構成ファイルを使用して、システムのアップグレードに使用するプロファイルをテストすることはできません。代わりに、システムの実際のディスク構成およびシステムに現在インストールされているソフトウェアに対して、プロファイルをテストする必要があります。

---

### ▼ プロファイルをテストするために一時的な Oracle Solaris 環境を作成する方法

特定の Oracle Solaris リリース用のプロファイルを正常かつ正確にテストするには、同じリリースの Oracle Solaris 環境内でテストする必要があります。たとえ

ば、Oracle Solaris 初期インストールプロファイル进行测试する場合は、Oracle Solaris OS を実行しているシステム上で `pfinstall` コマンドを実行します。

次のどちらかの状況でプロファイル进行测试する場合は、一時的なインストール環境を作成する必要があります。

- 以前のバージョンの Oracle Solaris ソフトウェアを使用しているシステム上で Oracle Solaris 10 8/11 のアップグレードプロファイル进行测试する場合。
- Oracle Solaris 10 8/11 の初期インストールプロファイル进行测试するための Oracle Solaris 10 8/11 システムをまだインストールしていない場合。

1 次に示すメディアのいずれか1つのイメージからシステムをブートします。

SPARC システムの場合:

- Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版)
- Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版)

x86 システムの場合:

- Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版)
- Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版)

---

注- アップグレードプロファイル进行测试する場合は、アップグレードするシステムをブートしてください。

---

2 システムを識別するための質問に答えます。

3 プロンプトで `!` を入力してインストールプログラムを終了します。

```
The Solaris installation program will assist you in installing software for Solaris.
<Press ENTER to continue> {"!" exits}
```

4 このシェルから `pfinstall` コマンドを実行します。

`pfinstall` コマンドの詳細な使用方法については、[51 ページの「プロファイル进行测试する方法」](#)の手順5を参照してください。

## ▼ プロファイルをテストする方法

---

x86のみ - locale キーワードを使用している場合は、`pfinstall -D` コマンドでプロファイルをテストすると失敗します。回避方法については、『[Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール](#)』の「[Oracle Solaris OS のアップグレード](#)」セクションのエラーメッセージ「`could not select locale`」を参照してください。

---

- 1 プロファイルをテストするためのシステムを決定します。プロファイルの作成時に意図したシステムと同じプラットフォームタイプ (SPARC または x86) のシステムを選んでください。  
アップグレードプロファイルをテストする場合は、実際にアップグレードするシステム上でテストしてください。
- 2 プロファイルをテストする
  - Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアが動作しているシステムがある場合に初期インストールプロファイルをテストするには、システムのスーパーユーザーになります。
  - アップグレードプロファイルをテストするには (または、初期インストールプロファイルをテストするための、Oracle Solaris 10 8/11 が動作しているシステムがない場合):
    - a. 一時的な Oracle Solaris 10 8/11 環境を作成し、プロファイルをテストします。詳細は、[49 ページの「プロファイルをテストするために一時的な Oracle Solaris 環境を作成する方法」](#)を参照してください。続いて、手順 3 に進みます。
    - b. 一時的なマウントポイントを作成します。

```
mkdir /tmp/mnt
```
    - c. テストするプロファイル (1 つ以上) が入ったディレクトリをマウントします。
      - ネットワーク上のシステム用にリモート NFS ファイルシステムをマウントする場合は、次を入力します。

```
mount -F nfs server-name:path /tmp/mnt
```
      - SPARC: UFS フォーマットのフロッピーディスクをマウントする場合は、次を入力します。

```
mount -F ufs /dev/diskette /tmp/mnt
```

- PCFS フォーマットのフロッピーディスクをマウントする場合は、次を入力します。

```
mount -F pcfs /dev/diskette /tmp/mnt
```

- 3 特定のシステムメモリーサイズでプロファイル进行测试するには、**SYS\_MEMSIZE** をその特定のメモリーサイズ(Mバイト単位)に設定します。

```
SYS_MEMSIZE=memory-size
export SYS_MEMSIZE
```

- 4 ディレクトリをマウントします。

- サブ手順 c でディレクトリをマウントした場合は、/tmp/mnt にディレクトリを変更します。

```
cd /tmp/mnt
```

- ディレクトリをマウントしなかった場合は、プロファイルのある場所(通常は JumpStart ディレクトリ)にディレクトリを変更します。

```
cd jumpstart-dir-path
```

- 5 **pfinstall(1M)** コマンドによってプロファイル进行测试します。

```
/usr/sbin/install.d/pfinstall -D:-d disk-config-file -c path profile
```



注意 - -d または -D オプションを指定してください。いずれかを指定しないと pfinstall は指定されたプロファイルを使用して Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。その結果、システム上のデータがすべて上書きされます。

-D pfinstall は、現在のシステムのディスク構成を使用してプロファイル进行测试します。アップグレードプロファイル进行测试する場合は、-D オプションを使用する必要があります。

-d *disk-config-file* pfinstall は、ディスク構成ファイルを使用してプロファイル进行测试します。pfinstall が動作しているディレクトリに *disk-config-file* が置かれていない場合は、パスを指定する必要があります。

ディスク構成ファイルの作成方法については、[66 ページ](#)の「ディスク構成ファイルの作成」を参照してください。

注 - アップグレードプロファイル `-install_type upgrade` には、`d disk-config-file` オプションを使用できません。常に、システムのディスク構成に対してアップグレードプロファイル进行测试し、-D オプションを使用する必要があります。

*-c path* Oracle Solaris ソフトウェアイメージのパス。このオプションは、たとえば、システムで Solaris Volume Manager を使用して Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD を各自のプラットフォームにマウントする場合に使用します。

---

注 - 使用しているプラットフォームの Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD イメージからブートした場合は、*-c* オプションは不要です。DVD または CD イメージは、ブート処理の一環として */cdrom* 上にマウントされます。

---

*profile* テストするプロファイル名。*profile* が *pfinstall* が実行されているディレクトリにない場合は、パスを指定する必要があります。

## プロファイルテストの例

次の例は、*pfinstall* を使用して *basic\_prof* というプロファイル进行测试する方法を示しています。プロファイルは、Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアがインストールされているシステム上のディスク構成に基づいてテストされます。*basic\_prof* プロファイルは、*/jumpstart* ディレクトリにあります。Solaris Volume Manager を使用しているため、Oracle Solaris Operating System DVD イメージへのパスが指定されています。

例 3-18 Oracle Solaris 10 8/11 システムを使用したプロファイルテスト

```
cd /jumpstart
/usr/sbin/install.d/pfinstall -D -c /cdrom/pathname basic_prof
```

次の例は、*pfinstall* を使用して Oracle Solaris 10 8/11 システム上で *basic\_prof* というプロファイル进行测试する方法を示しています。このテストは、*535\_test* ディスク構成ファイルに対して行われます。このテストでは、システムメモリーが 64M バイトあることを確認します。この例では、*/export/install* ディレクトリにある Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) のイメージを使用しています。

例 3-19 ディスク構成ファイルによるプロファイルテスト

```
SYS_MEMSIZE=64
export SYS_MEMSIZE
/usr/sbin/install.d/pfinstall -d 535_test -c /export/install basic_prof
```

## rules ファイルの妥当性を検査する

rules ファイルとプロファイルは、check スクリプトを実行して、これらのファイルが正しく設定されていることを確認してからでないと使用できません。すべてのルールとプロファイルが正しく設定されている場合は、rules.ok ファイルが作成されます。このファイルは、JumpStart インストールソフトウェアがシステムをプロファイルと照合するために必要です。

次の表に、check スクリプトの実行内容を示します。

表 3-2 check スクリプトの動作

| 段階 | 説明                                                                                                                                                                                                                         |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | rules ファイルの構文検査を行います。<br><br>check は、ルールキーワードが正当かどうか、および各ルールに対して <i>begin</i> フィールド、 <i>class</i> フィールド、および <i>finish</i> フィールドが指定されているかどうかを確認します。 <i>begin</i> フィールドおよび <i>finish</i> フィールドには、ファイル名でなくマイナス記号 (-) も指定可能です。 |
| 2  | rules ファイルにエラーがなければ、ルールに指定された各プロファイルの構文検査が行われます。                                                                                                                                                                           |
| 3  | エラーが見つからなければ、check は、rules ファイルから rules.ok ファイルを生成します。コメントと空行をすべて削除し、すべてのルールを保持し、さらに、末尾に次のコメント行を追加します。<br><br># version=2 checksum=num                                                                                     |

### ▼ rules ファイルを検証する方法

- 1 check スクリプトが JumpStart ディレクトリにあることを確認します。

---

注 - check スクリプトは、Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD の Solaris\_10/Misc/jumpstart\_sample ディレクトリにあります。

---

- 2 JumpStart ディレクトリに移動します。
- 3 check スクリプトを実行して、rules ファイルの妥当性検査を行います。

```
$./check -p path -r file-name
```

-p path            使用しているシステムの check スクリプトではなく Oracle Solaris ソフトウェアイメージの check スクリプトを使用して、rules を検証しま

す。 *path* は、ローカルディスク、マウントされた Oracle Solaris Operating System DVD、または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD 上のイメージです。

システムで以前のバージョンの Oracle Solaris を実行している場合は、このオプションを使って、`check` の最新バージョンを実行します。

`-r file-name` 名前が `rules` 以外の `rules` ファイル名を指定します。このオプションを使用すると、`rules` ファイルに組み込む前にルールの妥当性を検査できます。

`check` スクリプトを実行すると、`rules` ファイルと各プロファイルの妥当性検査の結果が報告されます。エラーが発生しなかった場合、次の情報が報告されます。

```
The JumpStart configuration is ok
```

- 4 `rules.ok` ファイルの所有者が `root` になっていて、アクセス権が `644` に設定されていることを確認します。

参照 `rules` ファイルを検証したあとの、JumpStart のオプション機能については、第4章「JumpStart のオプション機能の使用(タスク)」を参照してください。JumpStart インストールの詳しい実行方法については、第6章「JumpStart インストールの実行(タスク)」を参照してください。



## JumpStart のオプション機能の使用 (タスク)

---

この章では、追加の JumpStart インストールツールを作成するために使用できるオプション機能について説明します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、第 9 章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

---

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 57 ページの「開始スクリプトの作成」
- 60 ページの「終了スクリプトの作成」
- 65 ページの「圧縮された構成ファイルの作成」
- 66 ページの「ディスク構成ファイルの作成」
- 72 ページの「サイト固有のインストールプログラムの使用」

---

注 - この章の手順は、JumpStart ファイルの提供に使用される SPARC サーバーまたは x86 サーバー (プロファイルサーバーと呼ばれる) に対して有効です。プロファイルサーバーは、異なる種類のプラットフォームに JumpStart ファイルを提供できます。たとえば、SPARC サーバーは、SPARC ベースのシステムと x86 ベースのシステムの両方に、JumpStart ファイルを提供できます。

---

### 開始スクリプトの作成

開始スクリプトは、rules ファイル内に指定する、ユーザー定義の Bourne シェルスクリプトです。開始スクリプトは、Oracle Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされる前にタスクを実行します。開始スクリプトは、JumpStart インストールで Oracle Solaris をインストールするときのみ使用できます。

開始スクリプトは、次のタスクを実行するために使用します。

- 派生プロファイルを作成する
- アップグレード前にファイルのバックアップをとる
- インストールの継続期間を記録する

## 開始スクリプトについて

- スクリプト内には、初期インストール時やアップグレードインストール時に /a に対して行われるファイルシステムのマウントを妨げるような記述をしないでください。JumpStart プロファイルが /a にファイルシステムをマウントできない場合は、エラーが発生してインストールは失敗します。
- インストール中の開始スクリプトの出力は、/tmp/begin.log へ書き込まれます。インストール完了後に、このログファイルの出力先が /var/sadm/system/logs/begin.log へ変更されます。
- 開始スクリプトの所有者が root になっていて、アクセス権が 644 に設定されていることを確認します。
- 開始スクリプト内では、JumpStart 環境変数を使用できます。環境変数のリストについては、160 ページの「JumpStart の環境変数」を参照してください。
- 開始スクリプトは、JumpStart ディレクトリに保存してください。

---

注 - Oracle Solaris 10 リリースでは、JumpStart インストール時にプロンプトが表示されないようにするための、サンプルの JumpStart スクリプト `set_nfs4_domain` が、メディアで提供されていました。このスクリプトは、インストール時に NFSv4 プロンプトが表示されないようにしていました。このスクリプトはもう必要ありません。Solaris 10 5/09 リリース以降では、`sysidcfg` のキーワード `nfs4_domain` を使ってプロンプトが表示されないようにします。`set_nfs4_domain` スクリプトには、プロンプトを抑制する機能がなくなりました。

非大域ゾーンがインストールされている場合に新しい `nfs4_domain` キーワードが `sysidcfg` ファイルに含まれていると、非大域ゾーンを最初にブートしたときにドメインが設定されます。それ以外の場合は、Oracle Solaris 対話式インストールプログラムが起動して、ブートプロセスが完了する前にドメイン名を入力するように促すプロンプトが表示されます。

『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「`nfs4_domain` キーワード」を参照してください。

---

## 開始スクリプトによる派生プロファイルの作成

派生プロファイルは、JumpStart インストール時に開始スクリプトが動的に作成するプロファイルです。派生プロファイルは、特定のシステムを1つのプロファイルに対応させる `rules` ファイルを設定できない場合に必要となります。たとえば、異なる

ハードウェアコンポーネントを持つ同一のシステムモジュール (異なるフレームバッファを持つシステムなど) には、派生プロファイルを使用する必要があります。

派生プロファイルを使用するルールの設定タスクは次のとおりです。

- プロファイルフィールドに、プロファイルの代わりに等号 (=) を指定します。
- Oracle Solaris をインストールしようとしているシステムに依存する派生プロファイルを作成する開始スクリプトを `begin` フィールドに指定します。

システムが、プロファイルフィールドに等号 (=) があるルールと一致すると、開始スクリプトは、システムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするのに使用する派生プロファイルを作成します。

次の例は、毎回同じ派生プロファイルを作成する開始スクリプトを示しています。もちろん、ルールの評価に応じて異なる派生プロファイルを生成する開始スクリプトも作成できます。

例 4-1 派生プロファイルを作成する開始スクリプト

```
#!/bin/sh
echo "install_type initial_install" > ${SI_PROFILE}
echo "system_type standalone" >> ${SI_PROFILE}
echo "partitioning default" >> ${SI_PROFILE}
echo "cluster SUNWCprog" >> ${SI_PROFILE}
echo "package SUNWman delete" >> ${SI_PROFILE}
echo "package SUNWolman delete" >> ${SI_PROFILE}
echo "package SUNWxwman delete" >> ${SI_PROFILE}
```

この例の開始スクリプトは、派生プロファイル名に環境変数 `SI_PROFILE` を使用する必要があります。この派生プロファイル名は、デフォルトでは `/tmp/install.input` に設定されています。

---

注 - 開始スクリプトを使って派生プロファイルを作成する場合は、スクリプトにエラーがないことを確認してください。派生プロファイルは、開始スクリプトが実行されてから作成されます。このため、`check` スクリプトで派生プロファイルの妥当性は検査されません。

---

## 開始スクリプトと終了スクリプトを使ったインストール継続期間の追跡

次の例に示すように、開始スクリプトと終了スクリプトを含めることにより、インストールの開始時間と終了時間を追跡できます。

#### 例4-2 開始時間を追跡する開始スクリプト

```
more begin-with-date
#!/bin/sh
#

echo
echo "Noting time that installation began in /tmp/install-begin-time"
echo "Install begin time: `date`" > /tmp/install-begin-time
echo
cat /tmp/install-begin-time
echo
#
```

#### 例4-3 終了時間を追跡する終了スクリプト

```
more finish*with*date
#!/bin/sh
#

cp /tmp/install-begin-time /a/var/tmp
echo
echo "Noting time that installation finished in /a/var/tmp/install-finish-time"
echo "Install finish time: `date`" > /a/var/tmp/install-finish-time
echo
cat /a/var/tmp/install-finish-time
#
```

開始時間と終了時間は、finish.log ファイルに記録されます。

## 終了スクリプトの作成

終了スクリプトは、rules ファイル内に指定する、ユーザー定義の Bourne シェルスクリプトです。終了スクリプトは、Oracle Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされたあと、システムがリポートする前にタスクを実行します。終了スクリプトは、JumpStart インストールで Oracle Solaris をインストールするときのみ使用できます。

終了スクリプトは、次のようなタスクに利用できます。

- ファイルの追加
- パッケージまたはパッチの追加
- ルート環境のカスタマイズ
- 追加ソフトウェアのインストール

## 終了スクリプトについて

- Oracle Solaris インストールプログラムは、システムのファイルシステムを /a にマウントします。ファイルシステムは、システムがリブートするまで /a にマウントされています。終了スクリプトを使用して、新しくインストールされたファイルシステムの階層 (/a) を変更し、ファイルの追加、変更、または削除ができます。
- インストール中の終了スクリプトの出力は、/tmp/finish.log へ書き込まれます。インストール完了後に、このログファイルの出力先が /var/sadm/system/logs/finish.log へ変更されます。
- 終了スクリプトの所有者が root で、アクセス権が 644 に設定されていることを確認します。
- 終了スクリプト内では、JumpStart 環境変数を使用できます。環境変数のリストについては、160 ページの「JumpStart の環境変数」を参照してください。
- 終了スクリプトは、JumpStart ディレクトリに保存してください。
- 以前は終了スクリプト環境では、pkgadd コマンドや patchadd コマンドとともに **chroot(1M)** コマンドが使用されていました。まれに、一部のパッケージやパッチで -R オプションが正しく動作しないことがあります。chroot コマンドを実行する前には、/a ルートパスにダミーの /etc/mnttab ファイルを作成する必要があります。

ダミーの /etc/mnttab ファイルを作成するには、終了スクリプトに次の行を追加します。

```
cp /etc/mnttab /a/etc/mnttab
```

## 終了スクリプトでファイルを追加する

終了スクリプトにより、JumpStart ディレクトリにあるファイルをインストールされたシステムへ追加できます。ファイルを追加できるのは、SI\_CONFIG\_DIR 変数で指定されるディレクトリに JumpStart ディレクトリがマウントされるためです。このディレクトリは、デフォルトで /tmp/install\_config に設定されます。

---

注-インストールされたシステムにすでに存在するファイルに、JumpStart ディレクトリからファイルをコピーして、ファイルを置換することもできます。

---

インストール済みシステムに追加するすべてのファイルを JumpStart ディレクトリにコピーしたあと、新しくインストールされたファイルシステムの階層にコピーするファイルごとに、次の行を終了スクリプトに挿入します。

```
cp ${SI_CONFIG_DIR}/filename /a/path
```

**例 4-4** 終了スクリプトでファイルを追加する

自分のサイトのすべてのユーザーを対象に開発された特別なアプリケーション `site_prog` があると仮定します。 `site_prog` のコピーを `JumpStart` ディレクトリに置いた場合、終了スクリプト内の次の行は `JumpStart` ディレクトリからシステムの `/usr/bin` ディレクトリに `site_prog` をコピーします。

```
cp ${SI_CONFIG_DIR}/site_prog /a/usr/bin
```

## 終了スクリプトによるパッケージとパッチの追加

終了スクリプトを作成すると、Oracle Solaris ソフトウェアをシステムにインストールしたあとで、パッケージやパッチを自動的に追加できます。終了スクリプトを使用してパッケージを追加すると時間を節約できるだけでなく、サイトのさまざまなシステムにパッケージおよびパッチをインストールする上での整合性を維持できます。

終了スクリプト内で `pkgadd(1M)` コマンドや `patchadd(1M)` コマンドを使用するときは、`-R` オプションを使って、`/a` をルートパスとして指定します。

- 例 4-5 に、パッケージを追加する終了スクリプトの例を示します。
- 例 4-6 に、パッチを追加する終了スクリプトの例を示します。

**例 4-5** 終了スクリプトでパッケージを追加する

```
#!/bin/sh

BASE=/a
MNT=/a/mnt
ADMIN_FILE=/a/tmp/admin

mkdir ${MNT}
mount -f nfs sherlock:/export/package ${MNT}
cat >${ADMIN_FILE} <<DONT_ASK
mail=root
instance=overwrite
partial=nocheck
runlevel=nocheck
idepend=nocheck
rdepend=nocheck
space=ask
setuid=nocheck
conflict=nocheck
action=nocheck
basedir=default
DONT_ASK

/usr/sbin/pkgadd -a ${ADMIN_FILE} -d ${MNT} -R ${BASE} SUNWxyz
umount ${MNT}
rmdir ${MNT}
```

この例のコマンドは次のとおりです。

## 例4-5 終了スクリプトでパッケージを追加する (続き)

- 次のコマンドは、インストールするパッケージを含むサーバー上にディレクトリをマウントします。

```
mount -f nfs sherlock:/export/package ${MNT}
```

- 次のコマンドは、一時的なパッケージ管理ファイル `admin` を作成し、パッケージのインストール時に `pkgadd(1M)` コマンドがチェックも質問の表示も行わないようにします。この一時的なパッケージ管理ファイルは、パッケージの追加時に自動インストールを実施するために使用してください。

```
cat >${ADMIN_FILE} <<DONT_ASK
```

- 次の `pkgadd` コマンドは、`-a` オプション (パッケージ管理ファイルを指定) と `-R` オプション (ルートパスを指定) を使用してパッケージを追加します。

```
/usr/sbin/pkgadd -a ${ADMIN_FILE} -d ${MNT} -R ${BASE} SUNWxyz
```

## 例4-6 終了スクリプトでパッチを追加する

```
#!/bin/sh

#####
#
USER-CONFIGURABLE OPTIONS
#
#####

The location of the patches to add to the system after it's installed.
The OS rev (5.x) and the architecture ('mach') will be added to the
root. For example, /foo on a 8 SPARC would turn into /foo/5.8/sparc
LUPATCHHOST=ins3525-svr
LUPATCHPATHROOT=/export/solaris/patchdb
#####
#
NO USER-SERVICEABLE PARTS PAST THIS POINT
#
#####

BASEDIR=/a

Figure out the source and target OS versions
echo Determining OS revisions...
SRCREV='uname -r'
echo Source $SRCREV

LUPATCHPATH=$LUPATCHPATHROOT/$SRCREV/'mach'

#
Add the patches needed
#
echo Adding OS patches
mount $LUPATCHHOST:$LUPATCHPATH /mnt >/dev/null 2>&1
if [$? = 0] ; then
 for patch in `cat /mnt/*Recommended/patch_order` ; do
 (cd /mnt/*Recommended/$patch ; echo yes | patchadd -u -d -R $BASEDIR .)
```

## 例4-6 終了スクリプトでパッチを追加する (続き)

```
done
cd /tmp
umount /mnt
else
echo "No patches found"
if
```

## 終了スクリプトによるルート環境のカスタマイズ

終了スクリプトでは、すでにシステムにインストールされたファイルをカスタマイズすることもできます。たとえば、次の例の終了スクリプトは、ルート (/) ディレクトリの `.cshrc` ファイルに情報を追加することによってルート環境をカスタマイズします。

## 例4-7 終了スクリプトによるルート環境のカスタマイズ

```
#!/bin/sh
#
Customize root's environment
#
echo "***adding customizations in /.cshrc"
test -f a/.cshrc || {
cat >> a/.cshrc <<EOF
set history=100 savehist=200 filec ignoreeof prompt="\$user@'uname -n'> "
alias cp cp -i
alias mv mv -i
alias rm rm -i
alias ls ls -FC
alias h history
alias c clear
unset autologout
EOF
}
```

## 終了スクリプトによる非対話式インストール

終了スクリプトを使用して、Oracle Solaris OS のインストール後に追加のソフトウェアをインストールできます。Oracle Solaris インストールプログラムは、インストール中に情報を入力するプロンプトを表示します。自動インストールを行うには、`-nodisplay` オプションまたは `-noconsole` オプションを指定して Oracle Solaris インストールプログラムを実行します。

表 4-1 Oracle Solaris インストールオプション

| オプション                   | 説明                                                                                                  |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>-nodisplay</code> | GUIを使用せずにインストーラを実行します。 <code>-locales</code> オプションを用いてインストール条件を変更した場合を除き、デフォルトの設定に従って製品がインストールされます。 |
| <code>-noconsole</code> | 対話形式のテキストコンソールデバイスを介さずにインストールを実行します。UNIXスクリプトで <code>-nodisplay</code> と共に使用すると便利です。                |

詳細は、[installer\(1M\)](#) のマニュアルページを参照してください。

## 圧縮された構成ファイルの作成

`add_install_client` コマンドを使用して JumpStart 構成ファイルの場所を指定する代わりに、システムのブート時に構成ファイルの場所を指定できます。ただし、指定できるファイル名は1つだけです。したがって、すべての JumpStart 構成ファイルを1つのファイルに圧縮する必要があります。

- SPARC システムの場合、`boot` コマンドにファイルの場所を指定します
- x86 システムの場合、GRUB メニューの GRUB エントリを編集してファイルの場所を指定します

圧縮された構成ファイルの形式は、次のいずれかにしてください。

- `tar`
- `compress` で圧縮された `tar`
- `zip`
- `bzip` で圧縮された `tar`

### ▼ 圧縮された構成ファイルを作成する方法

- 1 プロファイルサーバー上の JumpStart ディレクトリに移動します。

```
cd jumpstart-dir-path
```

- 2 圧縮ツールを使って、JumpStart 構成ファイルを1つのファイルに圧縮します。圧縮構成ファイルに相対パスを含めないでください。JumpStart 構成ファイルは、圧縮されたファイルと同じディレクトリに置かれている必要があります。

圧縮された構成ファイルには、次のファイルが含まれている必要があります。

- プロファイル

- rules
- rules.ok

圧縮された構成ファイルに、さらに `sysidcfg` ファイルを入れることもできます。

- 3 圧縮された構成ファイルを **NFS** サーバー、**HTTP** サーバー、またはローカルハードディスク上に保存します。

次の例は、`tar` コマンドを使って、圧縮された構成ファイルを `config.tar` という名前で作成します。JumpStart 構成ファイルはすべて `/jumpstart` ディレクトリにあります。

#### 例 4-8 圧縮された構成ファイルの作成

```
cd /jumpstart
tar -cvf config.tar *
a profile 1K
a rules 1K
a rules.ok 1K
a sysidcfg 1K
```

## ディスク構成ファイルの作成

このセクションでは、`describes how to create` 単一ディスク構成ファイルおよび複数ディスク構成ファイルの作成方法を説明します。ディスク構成ファイルを作成すると、単一のシステムから `pfinstall(1M)` を使用して、異なるディスク構成に対してプロファイルをテストできます。

### ▼ SPARC: 単一ディスク構成ファイルを作成する方法

- 1 テストするディスクがある **SPARC** ベースのシステムを探します。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス』の「RBAC の構成 (タスクマップ)」を参照してください。
- 3 `prtvtoc(1M)` コマンドの出力をファイルにリダイレクトします。

```
prtvtoc /dev/rdisk/device-name >disk-config-file
```

`/dev/rdisk/device-name` システムのディスクのデバイス名。 `device-name` は、`cwtxdys2` または `cxdys2` の形式である必要があります。

`disk-config-file` ディスク構成ファイルの名前。

## 例 4-9 SPARC: ディスク構成ファイルの作成

次の例は、104M バイトのディスクを持つ SPARC ベースのシステムで、単一ディスク構成ファイル `104_test` を作成する方法を示しています。

`prtvtoc` コマンドの出力を `104_test` という単一ディスク構成ファイルにリダイレクトします。

```
prtvtoc /dev/rdisk/c0t3d0s2 >104_test
```

`104_test` ファイルの内容は、次の例のようになります。

```
* /dev/rdisk/c0t3d0s2 partition map
*
* Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 72 sectors/track
* 14 tracks/cylinder
* 1008 sectors/cylinder
* 2038 cylinders* 2036 accessible cylinders
* Flags:
* 1: unmountable
* 10: read-only
*
*
* Partition Tag Flags First Sector Sector Last
* Count Count Sector Count Sector Mount Directory
* 1 2 00 0 164304 164303 /
* 2 5 00 0 2052288 2052287
* 3 0 00 164304 823536 987839 /disk2/b298
* 5 0 00 987840 614880 1602719 /install/298/sparc/work
* 7 0 00 1602720 449568 2052287 /space
```

参照 ディスク構成ファイルを使ってプロファイル进行测试する方法については、[49 ページの「プロファイルのテスト」](#)を参照してください。

## ▼ SPARC: 複数ディスク構成ファイルを作成する方法

- 1 テストするディスクがある SPARC ベースのシステムを探します。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。

役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『[Solaris のシステム管理: セキュリティサービス](#)』の「[RBAC の構成 \(タスクマップ\)](#)」を参照してください。

- 3 `prtvtoc(1M)` コマンドの出力をファイルにリダイレクトします。

```
prtvtoc /dev/rdisk/device-name >disk-config-file
```

`/dev/rdisk/device-name` システムのディスクのデバイス名。`device-name` は、`cwtxdys2` または `cxdys2` の形式である必要があります。

`disk-config-file` ディスク構成ファイルの名前。

- 4 単一ディスク構成ファイルを結合し、その出力を新しいファイルに保存します。

```
cat disk-file1 disk-file2 >multi-disk-config-file
```

新しいファイルは、次に示すように複数ディスク構成ファイルになります。

```
cat 104_disk2 104_disk3 104_disk5 >multi_disk_test
```

- 5 複数ディスク構成ファイル内でディスクデバイス名のターゲット番号が固有でない場合は、ディスクデバイス名のターゲット番号を固有のものにします。

たとえば、次に示すように、異なるディスクデバイス名について同じターゲット番号 (t0) がファイルに含まれているとします。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

```
...
```

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

この場合は次のように、2番目のターゲット番号を t2 に設定します。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

```
...
```

```
* /dev/rdisk/c0t2d0s2 partition map
```

## ▼ x86: 単一ディスク構成ファイルを作成する方法

- 1 テストするディスクがある x86 ベースのシステムを探します。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス』の「RBAC の構成 (タスクマップ)」を参照してください。
- 3 **fdisk(1M)** コマンドの出力をファイルに保存して、単一ディスク構成ファイルを部分的に作成します。

```
fdisk -R -W disk-config-file -h /dev/rdisk/device-name
```

`disk-config-file` ディスク構成ファイルの名前。

`/dev/rdisk/device-name` ディスク全体の fdisk レイアウトのデバイス名。`device-name` は、`cwtxdys0` または `cxdys0` の形式である必要があります。

- 4 **prtvtoc(1M)** コマンドの出力をディスク構成ファイルの末尾に追加します。

```
prtvtoc /dev/rdisk/device-name >>disk-config
/dev/rdisk/device-name システムのディスクのデバイス名。device-name
 は、cwtxdys2 または cxdys2 の形式である必要があります。

disk-config ディスク構成ファイルの名前。
```

#### 例 4-10 x86: ディスク構成ファイルの作成

次の例は、500M バイトのディスクを含む x86 ベースのシステムで、単一ディスク構成ファイル `500_test` を作成する方法を示しています。

最初に、`fdisk` コマンドの出力を `500_test` という名前のファイルに保存します。

```
fdisk -R -W 500_test -h /dev/rdisk/c0t0d0p0
```

この `500_test` ファイルの内容は次のとおりです。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0p0 default fdisk table
* Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 94 sectors/track
* 15 tracks/cylinder
* 1455 cylinders
*
* HBA Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 94 sectors/track
* 15 tracks/cylinder
* 1455 cylinders
*
* systid:
* 1: DOSOS12
* 2: PCIXOS
* 4: DOSOS16
* 5: EXTDOS
* 6: DOSBIG
* 86: DOSDATA
* 98: OTHEROS
* 99: UNIXOS
* 130: SUNIXOS
*
* Id Act Bhead Bsect Bcyl Ehead Esect Ecyl Rsect Numsect
 130 128 44 3 0 46 30 1001 1410 2050140
```

`prtvtoc` コマンドの出力を `500_test` ファイルの末尾に追加します。

```
prtvtoc /dev/rdisk/c0t0d0s2 >>500_test
```

これで `500_test` ファイルは、完全なディスク構成ファイルになりました。

```

* /dev/rdisk/c0t0d0p0 default fdisk table
* Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 94 sectors/track
* 15 tracks/cylinder
* 1455 cylinders
*
* HBA Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 94 sectors/track
* 15 tracks/cylinder
* 1455 cylinders
*
* systid:
* 1: DOSOS12
* 2: PCIXOS
* 4: DOSOS16
* 5: EXTDOS
* 6: DOSBIG
* 86: DOSDATA
* 98: OTHEROS
* 99: UNIXOS
* 130: SUNIXOS
*
* Id Act Bhead Bsect Bcyl Ehead Esec Ectl Rsect Numsect
* 130 128 44 3 0 46 30 1001 1410 2050140
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
*
* Dimensions:
* 512 bytes/sector
* 94 sectors/track
* 15 tracks/cylinder
* 1110 sectors/cylinder
* 1454 cylinders
* 1452 accessible cylinders
*
* Flags:
* 1: unmountable
* 10: read-only
*
* Partition Tag Flags First Sector Last Sector Mount Directory
* 2 5 01 1410 2045910 2047319
* 7 6 00 4230 2043090 2047319 /space
* 8 1 01 0 1410 1409
* 9 9 01 1410 2820 422987

```

参照 ディスク構成ファイルを使ってプロファイルをテストする方法については、[49 ページの「プロファイルのテスト」](#)を参照してください。

## ▼ x86: 複数ディスク構成ファイルを作成する方法

- 1 テストするディスクがある x86 ベースのシステムを探します。
- 2 スーパーユーザーになるか、同等の役割を引き受けます。  
役割には、認証と特権コマンドが含まれます。役割の詳細については、『Solaris のシステム管理: セキュリティーサービス』の「RBAC の構成 (タスクマップ)」を参照してください。
- 3 **fdisk(1M)** コマンドの出力をファイルに保存して、単一ディスク構成ファイルを部分的に作成します。

```
fdisk -R -W disk-config-file -h /dev/rdisk/device-name
```

*disk-config-file*            ディスク構成ファイルの名前。

*/dev/rdisk/device-name*    ディスク全体の fdisk レイアウトのデバイス名。*device-name* は、*cwtxdys0* または *cxdys0* の形式である必要があります。

- 4 **prtvtoc(1M)** コマンドの出力をディスク構成ファイルの末尾に書き込みます。

```
prtvtoc /dev/rdisk/device-name >>disk-config
```

*/dev/rdisk/device-name*    システムのディスクのデバイス名。*device-name* は、*cwtxdys2* または *cxdys2* の形式である必要があります。

*disk-config*                ディスク構成ファイルの名前。

- 5 単一ディスク構成ファイルを結合し、その出力を新しいファイルに保存します。

```
cat disk-file1 disk-file2 >multi-disk-config-file
```

新しいファイルは、次に示すように複数ディスク構成ファイルになります。

```
cat 104_disk2 104_disk3 104_disk5 >multi_disk_test
```

- 6 複数ディスク構成ファイル内でディスクデバイス名のターゲット番号が固有でない場合は、ターゲット番号を固有のものにします。

たとえば、次に示すように、異なるディスクデバイス名について同じターゲット番号 (*t0*) がファイルに含まれているとします。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
...
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
```

この場合は次のように、2番目のターゲット番号を t2 に設定します。

```
* /dev/rdisk/c0t0d0s2 partition map
...
* /dev/rdisk/c0t2d0s2 partition map
```

## サイト固有のインストールプログラムの使用

開始スクリプトと終了スクリプトを使用すると、独自のインストールプログラムにより Oracle Solaris ソフトウェアをインストールできます。

プロファイルフィールドにマイナス記号 (-) を指定すると、プロファイルと Oracle Solaris インストールプログラムの代わりに、開始スクリプトと終了スクリプトがシステムへの Oracle Solaris ソフトウェアのインストール方法を制御するようになります。

たとえば次のルールに一致した場合は、開始スクリプト `x_install.beg` と終了スクリプト `x_install.fin` が、`clover` という名前のシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。

```
hostname clover x_install.beg - x_install.fin
```

## カスタムルールおよびプローブ キーワードの作成(タスク)

---

この章では、独自のカスタムルールとプローブキーワードを作成するための情報と手順を示します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、[第9章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」](#)の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

---

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 73 ページの「プローブキーワード」
- 74 ページの「`custom_probes` ファイルの作成」
- 76 ページの「`custom_probes` ファイルの妥当性検査」

### プローブキーワード

プローブキーワードはルールキーワードに関連しています。ルールキーワードは、ホスト名 (`hostname`) やメモリーサイズ (`memsize`) などの一般的なシステム属性を記述する事前定義された字句単位または語です。ルールキーワードとそれに関連する値を使用すると、同じ属性を持つシステムをプロファイルに対応付けることができます。システム属性を対応させるこの方法では、グループ内の各システムに Oracle Solaris ソフトウェアをどのようにインストールするかが定義されます。

JumpStart の環境変数は、開始スクリプトおよび終了スクリプトで使用しますが、必要に応じて設定します。たとえば、すでにシステムにインストールされているオペレーティングシステムに関する情報は、`installed` ルールキーワードを使用したあとにのみ、`SI_INSTALLED` から入手できます。

場合によっては、システムの照合とプロファイルの実行以外の目的で、この同じ情報を開始スクリプトまたは終了スクリプトで抽出する必要があります。プローブ

キーワードは、この解決方法となります。プローブキーワードは属性情報を抽出するので、照合条件を設定してプロファイルを実行する必要がなくなります。

プローブキーワードと値については、162 ページの「プローブキーワードと値」を参照してください。

## custom\_probes ファイルの作成

105 ページの「ルールキーワードと値の説明」と 162 ページの「プローブキーワードと値」で説明されているルールキーワードとプローブキーワードでは、ニーズに合わない場合もあります。custom\_probes ファイルを作成して、独自のカスタムルールまたはプローブキーワードを定義できます。

custom\_probes ファイルは、2 種類のタイプの関数を含む Bourne シェルスクリプトです。custom\_probes ファイルは、rules ファイルを保存したのと同じ JumpStart ディレクトリに保存する必要があります。次に、custom\_probes ファイルに定義できる 2 種類の関数を示します。

- **プローブ** - 必要な情報を収集するかあるいは実際の作業を実行し、定義された対応する SI\_環境変数を設定します。プローブ関数は、プローブキーワードになります。
- **比較** - 対応するプローブ関数を呼び出してプローブ関数の出力を比較し、キーワードが一致する場合は 0、キーワードが一致しない場合は 1 を返します。比較関数はルールキーワードになります。

## custom\_probes ファイルの構文

custom\_probes ファイルには、任意の有効な Bourne シェルコマンド、変数、またはアルゴリズムを含めることができます。

custom\_probes ファイルで単一の引数を必要とするプローブおよび比較関数を定義できます。rules ファイル内で対応するカスタムプローブキーワードを使用する場合、このキーワードの後に続く引数が (\$1 として) 解釈されます。

rules ファイル内で対応するカスタムルールキーワードを使用する場合、引数は順番に解釈されます。この順番は、キーワードの直後から開始し、次に && または開始スクリプトが現れる直前で終了します。

custom\_probes ファイルは、次の要件を満たしている必要があります。

- 名前が custom\_probes である
- 所有者が root である
- 実行可能であり、アクセス権が 755 に設定されている
- 少なくとも 1 つのプローブ関数と対応する比較関数を含む

より明確で効果的な構成にするために、最初にすべてのプローブ関数をファイルのいちばん上に定義してから、比較関数を続けて定義してください。

## custom\_probes ファイル内の関数名の構文

プローブ関数名は、probe\_ で始める必要があります。比較関数名は、cmp\_ で始める必要があります。

probe\_ で始まる関数は、新しいプローブキーワードを定義します。たとえば、関数 probe\_tcx は、新しいプローブキーワード tcx を定義します。cmp\_ で始まる関数は、新しいルールキーワードを定義します。たとえば、cmp\_tcx は、新しいルールキーワード tcx を定義します。

## ▼ custom\_probes ファイルを作成する方法

- 1 **Bourne** シェルスクリプトのテキストファイルを作成し、それに **custom\_probes** という名前を付けます。
- 2 **custom\_probes** テキストファイルで、プローブ関数と比較関数を定義します。  
rules ファイル内で対応するカスタムプローブキーワードを使用する場合、このキーワードのあとに続く引数は順番に (\$1、\$2 などとして) 解釈されます。  
rules ファイル内で対応するカスタムルールキーワードを使用する場合、引数は順番に解釈されます。この順番は、キーワードの直後から開始し、次に && または開始スクリプトが現れる直前で終了します。
- 3 **custom\_probes** ファイルを **JumpStart** ディレクトリに保存します (rules ファイルと同じ)。
- 4 **root** が **rules** ファイルを所有していて、そのアクセス権が **644** に設定されていることを確認します。

### 例 5-1 custom\_probes ファイル

```
#!/bin/sh
#
custom_probe script to test for the presence of a TCX graphics card.
#
#
PROBE FUNCTIONS
#
probe_tcx() {
 SI_TCX='modinfo | grep tcx | nawk '{print $6}''
```

```

 export SI_TCX
}

#
COMPARISON FUNCTIONS
#
cmp_tcx() {
 probe_tcx

 if ["X${SI_TCX}" = "X${1}"]; then
 return 0
 else
 return 1
 fi
}

```

### 例 5-2 rules ファイルで使用されるカスタムプローブキーワード

この例の rules ファイルは、前の例で定義されているプローブキーワード (tcx) の使用方法を示しています。TCX グラフィックスカードがシステムにインストールされていて検出されると、profile\_tcx が実行されます。そうでない場合は、profile が実行されます。

```

probe tcx
tcx tcx - profile_tcx -
any any - profile -

```

参照 プローブ関数と比較関数の例は次のディレクトリにも入っています。

- Oracle Solaris ソフトウェアがインストールされたシステムの /usr/sbin/install.d/chkprobe
- Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD 上の /Solaris\_10/Tools/Boot/usr/sbin/install.d/chkprobe

---

注- プローブキーワードは、rules ファイルの最初、またはその近くに指定してください。これは、そのプローブキーワードに依存する可能性のあるほかのルールキーワードよりも先に読み取られて実行されるようにするためです。

---

## custom\_probes ファイルの妥当性検査

プロファイル、rules ファイル、および custom\_probes ファイルを使用する前に、check スクリプトを実行して、ファイルが正常に設定されていることを検証する必要があります。すべてのプロファイル、ルール、およびプローブ関数と比較関数が正しく設定されている場合は、rules.ok ファイルと custom\_probes.ok ファイルが作成されます。

check スクリプトを使用すると、次の処理が行われます。

1. check は、custom\_probes ファイルを検索します。
2. ファイルが存在する場合、check は custom\_probes ファイルから custom\_probes.ok ファイルを作成し、すべてのコメントと空行を削除して Bourne シェルコマンド、変数、およびアルゴリズムだけを保持します。次に check は次のコメント行をファイルの最後に追加します。

```
version=2 checksum=num
```

## ▼ custom\_probes ファイルを検証する方法

- 1 check スクリプトが JumpStart ディレクトリにあることを確認します。

---

注 - check スクリプトは、Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD の Solaris\_10/Misc/jumpstart\_sample ディレクトリにあります。

---

- 2 JumpStart ディレクトリに移動します。
- 3 check スクリプトを実行して、rules ファイルと custom\_probes ファイルの妥当性を検査します。

```
$./check -p path -r file-name
```

**-p path**            使用しているシステムの check スクリプトではなく、プラットフォームに対応した Oracle Solaris ソフトウェアイメージの check スクリプトを使用して、custom\_probes ファイルを検証します。path は、ローカルディスク上のイメージか、マウントされた Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD 上のイメージです。

システムで以前のバージョンの Oracle Solaris が稼動している場合は、このオプションを指定することにより、check の最新バージョンを実行します。

**-r file-name**        custom\_probes 以外のファイル名を指定します。-r オプションを使用することで、一連の関数を custom\_probes ファイル内にまとめる前にそれらの妥当性検査を実施できます。

check スクリプトを実行すると、rules ファイル、custom\_probes ファイル、および各プロファイルの妥当性が報告されます。エラーが検出されなければ、スクリプトによって「The JumpStart configuration is ok」と表示され、JumpStart ディレクトリ内に rules.ok ファイルと custom\_probes.ok ファイルが作成されます。

- 4 **custom\_probes.ok** ファイルが実行可能でない場合は、次のコマンドを入力します。  
`# chmod +x custom_probes`
- 5 **root** が **custom\_probes.ok** ファイルを所有し、そのアクセス権が **755** に設定されていることを確認してください。

## JumpStart インストールの実行(タスク)

---

この章では、SPARC システムまたは x86 システムで JumpStart インストールを実行する方法について説明します。これらの手順は、Oracle Solaris ソフトウェアをインストールしようとするシステム上で実行する必要があります。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、[第 9 章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」](#)の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

---

---

注 - iSCSI ターゲットシステムで Oracle Solaris 10 OS のインストールまたはアップグレードを行う場合は、iSCSI のキーワードと例に関する次のセクションを参照してください。

- 144 ページの「iSCSI プロファイルキーワード」
- 例 3-16
- 例 3-17

iSCSI パラメータを構成する詳細な手順については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: 基本インストール』の第 4 章「iSCSI ターゲットディスクへの Oracle Solaris 10 OS のインストール」を参照してください。

---

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 80 ページの「JumpStart インストールに関する問題」
- 82 ページの「SPARC: JumpStart インストールのためのシステムの設定(タスクマップ)」
- 83 ページの「SPARC: JumpStart インストールの実行」
- 88 ページの「x86: JumpStart インストールのためのシステムの設定(タスクマップ)」
- 89 ページの「x86: JumpStart インストールの実行」

# JumpStart インストールに関する問題

JumpStart インストールを実行する前に、いくつかの問題に注意してください。具体的な情報については、次の表を確認してください。

表 6-1 JumpStart インストールの制限事項

| 問題                                                                     | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 詳細                                                                                                                                                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サンプルの JumpStart スクリプトを使って NFSv4 プロンプトを抑制する必要がなくなりました                   | Solaris 10 リリースでは、JumpStart インストール時にプロンプトが表示されないようにするための、サンプルの JumpStart スクリプト <code>set_nfs4_domain</code> が、メディアで提供されていました。このスクリプトは、インストール時に NFSv4 プロンプトが表示されないようにしていました。このスクリプトはもう必要ありません。Solaris 10 8/07 リリース以降では、 <code>sysidcfg</code> のキーワード <code>nfs4_domain</code> を使ってプロンプトを抑制します。 <code>set_nfs4_domain</code> スクリプトには、プロンプトを抑制する機能がなくなりました。 | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「 <code>nfs4_domain</code> キーワード」                                                                                                                    |
| <code>sysidcfg</code> ファイルに自動登録の情報を指定すると、JumpStart インストールは自動の状態に維持されます | Oracle Solaris の機能である自動登録は、Oracle Solaris 10 9/10 リリースで新規に追加された機能です。システムをインストールまたはアップグレードすると、システムの構成データは、既存のサービスタグ技術によってレポート時に自動的にオラクル製品登録システムに伝達されます。システムに関するこのサービスタグデータは、オラクルの顧客向けサポートとサービスの向上などに役立てられます。                                                                                                                                              | インストールまたはアップグレードの前に、 <code>auto_reg</code> キーワードを <code>sysidcfg</code> ファイルに含めた場合は、インストールを完全に自動のままにできます。ただし、 <code>auto_reg</code> キーワードを含まない場合は、インストール時またはアップグレード時に、自動登録のサポート資格情報とプロキシ情報を指定するように求められます。 |

表 6-1 JumpStart インストールの制限事項 (続き)

| 問題                                                                                                         | 説明                                                                                                                                                                                                                                           | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| sysidcfg ファイルでキーボード言語を選択すると、プロンプトが表示されなくなります                                                               | キーボードが自己識別型でない場合に、JumpStart インストール時にプロンプトが表示されないようにするには、sysidcfg ファイルでキーボードの言語を選択します。JumpStart インストールの場合、デフォルトは米国英語 (U.S. English) 用です。別の言語とそれに対応するキー配列を選択するには、sysidcfg ファイルでキーボードのキーワードを設定します。                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「sysidcfg ファイルキーワード」</li> <li>■ 次のマニュアルページを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ sysidtool(1M)</li> <li>■ sysidcfg(4)</li> </ul> </li> </ul> |
| 非大域ゾーンが含まれている場合は、Live Upgrade を使ってアップグレードを行います                                                             | JumpStart を使っても、非大域ゾーンがインストールされているシステムをアップグレードできますが、アップグレードには Live Upgrade が推奨されています。JumpStart では、膨大なアップグレード時間が必要となる場合があります。これは、アップグレードの実行に要する時間が、インストールされている非大域ゾーンの数に比例して増加するからです。                                                          | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』                                                                                                                                                                                            |
| フラッシュアーカイブには非大域ゾーンを含めることができません                                                                             | フラッシュアーカイブを使ってインストールを行う場合は、非大域ゾーンが含まれているアーカイブがシステムに正しくインストールされません。                                                                                                                                                                           | 非大域ゾーンの作成の概要については、『Oracle Solaris の管理: Oracle Solaris コンテナ - リソース管理と Oracle Solaris ゾーン』を参照してください。                                                                                                                                                      |
| 非大域ゾーンがインストールされていると、フラッシュアーカイブは正常に作成されません。                                                                 | フラッシュアーカイブ機能には Oracle Solaris ゾーン区分技術との互換性はありません。フラッシュアーカイブを作成した場合、アーカイブがこれらの条件で配置されると、作成されたアーカイブは正しくインストールされません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アーカイブが非大域ゾーンに作成された場合</li> <li>■ アーカイブが、非大域ゾーンがインストールされている大域ゾーンに作成された場合</li> </ul> |                                                                                                                                                                                                                                                         |
| archive_location キーワードを使用してフラッシュアーカイブをインストールする場合は、アーカイブおよびインストールメディアに同一のオペレーティングシステムのバージョンが格納されている必要があります。 | たとえば、アーカイブが Oracle Solaris 10 8/11 オペレーティングシステムで、DVD メディアを使用している場合は、Oracle Solaris 10 8/11 DVD メディアを使用してアーカイブをインストールする必要があります。オペレーティングシステムのバージョンが一致しないと、クローンシステムでのインストールに失敗します。                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                         |
| SPARC: その他のハードウェア要件                                                                                        | 使用中のプラットフォームで JumpStart インストールを実行するためのその他の要件については、ハードウェアのドキュメントを参照してください。                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                         |

# SPARC: JumpStart インストールのためのシステムの設定 (タスクマップ)

表 6-2 タスクマップ: JumpStart インストールのためのシステムの設定

| タスク                                                        | 説明                                                                                                                                                                       | 参照先                                                                                                                                                                                           |
|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| システムがサポートされているかを確認します。                                     | ハードウェアのドキュメントで、Oracle Solaris 環境でのシステムサポートを確認します。                                                                                                                        | 『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』( <a href="http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html">http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html</a> )       |
| Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするための十分なディスク容量がシステムにあるかを確認します。 | Oracle Solaris ソフトウェアのインストールに求められる十分な容量があるかを確認します。                                                                                                                       | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 3 章「システム要件、ガイドライン、およびアップグレード情報」                                                                                                       |
| (オプション) システムパラメータを設定します。                                   | インストールやアップグレードの際に情報を入力する手間を省くために、システム構成情報を事前に構成しておくことができます。                                                                                                              | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の第 2 章「システム構成情報の事前構成 (タスク)」                                                                                                               |
| JumpStart インストールを実行できるようにシステムを準備します。                       | rules ファイルとプロファイルファイルを作成して検証します。                                                                                                                                         | 第 3 章「JumpStart インストールの準備 (タスク)」                                                                                                                                                              |
| (オプション) JumpStart のオプション機能を準備します。                          | 開始スクリプト、終了スクリプトなどのオプション機能を使用する場合は、それらのスクリプトまたはファイルを用意します。                                                                                                                | 第 4 章「JumpStart のオプション機能の使用 (タスク)」 および第 5 章「カスタムルールおよびプロブキーワードの作成 (タスク)」                                                                                                                      |
| (オプション) Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする準備を行います。     | リモートの Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE (SPARC 版) イメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。 | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の第 5 章「DVD メディアを使用したネットワークインストール (タスク)」<br><br>『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の第 6 章「CD メディアを使用したネットワークインストール (タスク)」 |

表 6-2 タスクマップ: JumpStart インストールのためのシステムの設定 (続き)

| タスク                                 | 説明                                | 参照先                                                    |
|-------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------------------------|
| (オプション) フラッシュアーカイブをインストールする準備を行います。 | フラッシュアーカイブのインストールに固有の設定を行います。     | 83 ページの「JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする」      |
| インストールまたはアップグレードを行います。              | システムをブートしてインストールまたはアップグレードを開始します。 | 85 ページの「SPARC: JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする」 |

## SPARC: JumpStart インストールの実行

JumpStart インストールの際、JumpStart プログラムは、インストール対象のシステムと `rules.ok` ファイル内のルールを照合します。JumpStart プログラムは、最初から順にルールが読み取ります。インストール中のシステムがルールに定義されたすべてのシステム属性に一致するかどうか検査されます。システムがルールと一致すると、JumpStart プログラムによる `rules.ok` ファイルの読み取りが停止して、一致したルールのプロファイルに基づいてシステムのインストールが開始されます。

初期インストールの場合は完全アーカイブを、アップグレードの場合 (過去にアーカイブをインストールしたことがある場合) は差分アーカイブを、それぞれインストールできます。JumpStart インストールまたは Live Upgrade を使用すると、非アクティブブート環境にアーカイブをインストールできます。完全アーカイブと差分アーカイブの概要については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: フラッシュアーカイブ (作成とインストール)』の第 1 章「フラッシュアーカイブの概要」を参照してください。

### ▼ JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする

ここでは、JumpStart を使ってアーカイブをインストールする手順を紹介します。Live Upgrade を使って非アクティブブート環境にアーカイブをインストールする手順については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の「プロファイルを使用してフラッシュアーカイブをインストールする方法」を参照してください。

始める前に 表 6-1 で、フラッシュアーカイブのインストールに関する制限事項を確認してください。

- 1 インストールサーバーで、JumpStart の `rules` ファイルを作成します。  
JumpStart ファイルを作成する詳細な手順については、第3章「JumpStart インストールの準備(タスク)」を参照してください。
- 2 インストールサーバーで、JumpStart プロファイルファイルを作成します。  
フラッシュアーカイブプロファイルの例については、36 ページの「プロファイルの例」を参照してください。  
フラッシュアーカイブのインストール時にのみ有効なキーワードについては、表 8-2 を参照してください。
  - a. キーワード `install_type` の値を設定します。
    - 完全アーカイブインストールの場合、値を `flash_install` に設定します。
    - 差分アーカイブインストールの場合、値を `flash_update` に設定します。
  - b. `archive_location` キーワードを使用して、フラッシュアーカイブへのパスを追加します。  
`archive_location` キーワードの詳細については、112 ページの「`archive_location` キーワード」を参照してください。
  - c. ファイルシステム構成を指定します。  
フラッシュアーカイブの抽出プロセスでは、パーティションの自動配置はサポートされません。
  - d. (オプション)アーカイブのインストール時に追加パッケージもインストールする場合は、`package` キーワードを使用してください。  
詳細については、145 ページの「`package` プロファイルキーワード (UFS と ZFS)」を参照してください。
  - e. (オプション)クローンシステムにフラッシュアーカイブを追加インストールする場合は、インストールするアーカイブごとに `archive_location` 行を指定してください。
- 3 インストールサーバーで、フラッシュアーカイブを使ってインストールするクライアントを追加します。  
詳細については、次を参照してください。
  - 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「DVD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムの追加」
  - 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の「CD イメージを使用してネットワークからインストールするシステムの追加」

- 4 クローンシステムへの JumpStart インストールを実行します。

詳細な手順は、85 ページの「SPARC: JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする」を参照してください。

## ▼ SPARC: JumpStart プログラムを使用してインストールまたはアップグレードする

- 始める前に
- システムがネットワークに接続されている場合は、Ethernet コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
  - **tip(1)** ラインで接続されているシステムをインストールする場合は、ウィンドウ表示が横 80 桁、縦 24 行以上あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、**stty(1)** コマンドを使用します。
- 1 システムの DVD-ROM または CD-ROM ドライブを使用して Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする場合は、ドライブに Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) を挿入します。
  - 2 プロファイルフロッピーディスクを使用する場合は、システムのコピーディスクドライブにそのフロッピーディスクを挿入します。
  - 3 システムをブートします。
    - 新しい未変更のシステムの場合は、システムの電源を入れます。
    - 既存システムのインストールまたはアップグレードを行う場合は、システムをシャットダウンします。ok プロンプトで、boot コマンドに適切なオプションを入力します。boot コマンドの構文は次のとおりです。

```
ok boot [cd-dvd|net] - install [url|ask] options
```

たとえば、次のコマンドを入力すると、JumpStart プロファイルを使用してネットワーク経由で OS がインストールされます。

```
ok boot net - install http://131.141.2.32/jumpstart/config.tar
```

boot コマンドのオプションの詳細は、次の表を参照してください。

---

SPARC のみ - ハードウェアおよびシステムコンポーネントがシステムによって検査されて、SPARC システムがブートします。ブートには数分間かかります。

---

- 4 **sysidcfg** でシステム情報の事前構成を行わなかった場合は、プロンプトが表示された時点でシステム構成についての質問に答えます。

---

注 - Oracle Solaris 10 9/10 リリース以降では、`auto_reg` キーワードを `sysidcfg` ファイルに含めない場合は、自動登録のサポート資格情報とプロキシ情報を指定するように求められます。

---

5 画面の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

JumpStart プログラムが Oracle Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムが自動的にリブートします。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- `/var/sadm/system/logs`
- `/var/sadm/install/logs`

## SPARC: boot コマンドのコマンドリファレンス

`boot` コマンドの構文は次のとおりです。

```
ok boot [cd-dvd|net] - install [url|ask] options
```

次の表に、JumpStart インストールに適した `boot` コマンドのコマンド行オプションを示します。

| オプション                                   | 説明                                                                                                                                                                                                                                             |
|-----------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>[<i>cd-dvd</i> <i>net</i>]</code> | CD または DVD からブートするか、ネットワーク上のインストールサーバーからブートするかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ <code>cd-dvd</code> - <code>cdrom</code> を使用して CD または DVD からブートします。</li> <li>▪ <code>net</code> - ネットワーク上のインストールサーバーからブートすることを指定します。</li> </ul> |

| オプション     | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| [url ask] | <p>JumpStart ファイルの場所を指定するか、場所の入力を求めるプロンプトを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>url</b> – ファイルのパスを指定します。HTTP または HTTPS サーバーに存在するファイルの URL を指定できます。<br/>HTTP サーバー<br/><br/> <pre>http://server-name:IP-address/jumpstart-dir/ compressed-config-file&amp;proxy-info</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>sysidcfg</b> ファイルを圧縮構成ファイルに含めた場合は、次の例に示すようにそのファイルを含むサーバーの IP アドレスを指定する必要があります。<br/><br/> <pre>http://131.141.2.32/jumpstart/config.tar</pre> </li> <li>■ 圧縮構成ファイルをファイアウォールで防御された HTTP サーバー上の圧縮構成ファイルに保存した場合は、ブート時に <b>proxy</b> 指示子を使用する必要があります(ファイルが配置されたサーバーの IP アドレスを指定する必要はない)。プロキシサーバーの IP アドレスは次のように指定します。<br/><br/> <pre>http://www.shadow.com/jumpstart/ config.tar&amp;proxy=131.141.6.151</pre> </li> </ul> </li> <li>■ <b>ask</b> – 圧縮構成ファイルの場所の入力を求めるプロンプトを表示するように、インストールプログラムを指定します。プロンプトは、システムがブートしてネットワークに接続すると表示されます。このオプションを使用すると、完全に自動化された JumpStart インストールを行うことはできません。<br/>Return キーを押してこのプロンプトへの入力を省略すると、Oracle Solaris インストールプログラムはネットワークパラメータを対話的に構成します。インストールプログラムは次に、圧縮構成ファイルの場所を尋ねるプロンプトを表示します。</li> </ul> |

## x86:JumpStart インストールのためのシステムの設定(タスクマップ)

表 6-3 x86:タスクマップ:JumpStart インストールのためのシステムの設定

| タスク                                                        | 説明                                                                                                                                                                                | 参照先                                                                                     |
|------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 既存のオペレーティングシステムとユーザーデータを保存する必要があるかを決定します。                  | システム上の既存のオペレーティングシステムがディスク全体を使用している場合、その既存のオペレーティングシステムを保存して、Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアと共存できるようにする必要があります。この決定により、システムのプロファイル内の <code>fdisk(1M)</code> キーワードをどのように指定するかが決まります。 | 127 ページの「x86: fdisk プロファイルキーワード (UFS と ZFS)」                                            |
| システムがサポートされているかを確認します。                                     | ハードウェアのドキュメントで、Oracle Solaris 環境でのシステムサポートを確認します。                                                                                                                                 | ハードウェアのドキュメント                                                                           |
| Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするための十分なディスク容量がシステムにあるかを確認します。 | Oracle Solaris ソフトウェアのインストールに求められる十分な容量があるかを確認します。                                                                                                                                | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 3 章「システム要件、ガイドライン、およびアップグレード情報」 |
| (オプション) システムパラメータを設定します。                                   | インストールやアップグレードの際に情報を入力する手間を省くために、システム構成情報を事前に構成しておくことができます。                                                                                                                       | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の第 2 章「システム構成情報の事前構成(タスク)」          |
| JumpStart インストールを実行できるようにシステムを準備します。                       | <code>rules</code> ファイルとプロファイルファイルを作成して検証します。                                                                                                                                     | 第 3 章「JumpStart インストールの準備(タスク)」                                                         |
| (オプション) JumpStart のオプション機能を準備します。                          | 開始スクリプト、終了スクリプトなどのオプション機能を使用する場合は、それらのスクリプトまたはファイルを用意します。                                                                                                                         | 第 4 章「JumpStart のオプション機能の使用(タスク)」および第 5 章「カスタムルールおよびプロンプトキーワードの作成(タスク)」                 |

表 6-3 x86: タスクマップ: JumpStart インストールのためのシステムの設定 (続き)

| タスク                                                    | 説明                                                                                                                                                                   | 参照先                                                                                        |
|--------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| (オプション) Oracle Solaris ソフトウェアをネットワークからインストールする準備を行います。 | リモートの Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE (x86 版) イメージをインストールする場合は、インストールサーバーまたはブートサーバーからシステムをブートしてインストールするように、システムを設定する必要があります。 | 『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: ネットワークベースのインストール』の第 6 章「CD メディアを使用したネットワークインストール (タスク)」 |
| (オプション) フラッシュアーカイブをインストールする準備を行います。                    | フラッシュアーカイブのインストールに固有の設定を行います。                                                                                                                                        | 83 ページの「JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする」                                          |
| インストールまたはアップグレードを行います。                                 | システムをブートしてインストールまたはアップグレードを開始します。                                                                                                                                    | 90 ページの「x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグレードを実行する方法」                         |

## x86: JumpStart インストールの実行

JumpStart インストールの際、JumpStart プログラムは、インストール対象のシステムと `rules.ok` ファイル内のルールを照合します。JumpStart プログラムは、最初から順にルールを読み取ります。インストール中のシステムがルールに定義されたすべてのシステム属性に一致するかどうか検査されます。システムがルールと一致すると同時に、JumpStart プログラムによる `rules.ok` ファイルの読み取りが停止して、一致したルールのプロファイルに基づいてシステムのインストールが開始されます。

JumpStart を使ってフラッシュアーカイブをインストールできます。手順については、83 ページの「JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする」を参照してください。

JumpStart プログラムおよび GRUB を使ってインストールまたはアップグレードを実行するには、次の手順を選択します。

- 標準的な JumpStart の手順については、90 ページの「x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグレードを実行する方法」を参照してください。
- GRUB コマンドを編集して JumpStart を実行する方法については、90 ページの「x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグレードを実行する方法」を参照してください。

## ▼ x86: JumpStart プログラムおよび GRUB を使用してインストールまたはアップグレードを実行する方法

GRUB を使用して x86 ベースのシステムに Oracle Solaris OS をインストールするには、この手順を使用します。

- 始める前に
- システムがネットワークに接続されている場合は、Ethernet コネクタまたはそれに類似したネットワークアダプタがシステムに装着されていることを確認します。
  - **tip(1)** ラインで接続されているシステムをインストールする場合は、ウィンドウ表示が横 80 桁、縦 24 行以上あることを確認します。  
tip ウィンドウの現在の大きさを調べるには、**stty(1)** コマンドを使用します。

- 1 プロファイルフロッピーディスクを使用する場合は、システムのフロッピーディスクドライブにプロファイルフロッピーディスクを挿入します。  
システムのブートにプロファイルフロッピーディスクは使用されなくなりましたが、JumpStart ディレクトリのみを収録したフロッピーディスクを用意することはできます。このフロッピーディスクは、JumpStart インストールを実行するときや CD-ROM をブートオフするときなどに使用できます。

- 2 システムをブートします。

- **Oracle Solaris Operating System DVD** または **Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD** からブートする場合は、そのディスクを挿入します。  
この場合、システムの BIOS が DVD または CD からのブートをサポートしている必要があります。DVD または CD からブートする場合は、システムの BIOS のブート設定を変更し、DVD または CD メディアからブートするように設定します。詳細は、ハードウェアのドキュメントを参照してください。
- ネットワークからブートする場合は、**PXE (Preboot Execution Environment)** ネットワークブートを使用してください。  
システムは PXE をサポートするものでなければなりません。システムの BIOS 設定ツールまたはネットワークアダプタの構成設定ツールを使用して、PXE を使用するようにシステムを設定します。

- 3 システムの電源が入っていない場合は、電源を入れます。システムの電源が入っている場合は、システムをリブートします。

GRUB メニューが表示されます。このメニューにはブートエントリの一覧が表示されます。

```
GNU GRUB version 0.95 (631K lower / 2095488K upper memory)
```

```
+-----+
```

```
|Oracle Solaris 10 8/11 image_directory |
|Solaris Serial Console ttya |
|Solaris Serial Console ttyb (for lx50, v60x and v65x) |
+-----+
Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted. Press
enter to boot the selected OS, 'e' to edit the commands before
booting, or 'c' for a command-line.
```

*image-directory* は、インストールイメージが置かれているディレクトリの名前です。JumpStart ファイルのパスは、`add_install_client` コマンドと `-c` オプションによって定義されています。

4 OSの標準のブートを実行するか、またはデバッグなどのためにGRUBブートコマンドを変更してからJumpStartインストールを実行するかを決定します。

- 標準のブートプロセスを実行するには、「Oracle Solaris 10 8/11」を強調表示してEnterキーを押します。

- GRUBブートコマンドを変更してカスタムブートプロセスを実行するには:

- a. eを入力してブートプロセスを停止します。

GRUB編集メニューが表示されます。

```
kernel /I86PC.Solaris_11-8/multiboot kernel/unix -B console=ttyb,\
install_media=131.141.2.32:/export/mary/v11 \
module /I86PC.Solaris_11-8/x86.new
```

- b. 矢印キーを使用してブートエントリを選択します。

- c. エディタにアクセスするには、eを入力します。

次の例のようなコマンドが表示されます。

```
grub edit>kernel /I86PC.Solaris_11-8/multiboot kernel/unix -B \
console=ttyb,install_media=131.141.2.32:/export/mary/\
module /I86PC.Solaris_11-8/x86.new
```

- d. 必要なオプションを入力してコマンドを編集します。

JumpStartインストールの構文は次のとおりです。

```
grub edit>kernel /I86PC.Solaris_11-image_directory/multiboot kernel/unix/ \
- install [url|ask] options -B install_media=media-type
```

JumpStart オプションの説明については、92 ページの「x86: システムのブートのためのコマンドリファレンス」を参照してください。

次の例では、JumpStart プロファイルを使用して、ネットワーク経由でOSをインストールします。

```
kernel /I86PC.Solaris_11-8/multiboot kernel/unix/ - install \
-B install_media=131.141.2.32:/export/mary/v11 \
module /I86PC.Solaris_11-8/x86.new
```

- e. 編集内容を適用するには、**Enter** キーを押します。

---

注 - 変更を保存せずに GRUB メインメニューに戻るには、**Escape** キーを押します。

---

変更が保存され、GRUB メインメニューが表示されます。

- f. ブートプロセスを開始するには、**b** を入力します。  
インストールメニューが表示されます。

- 5 **JumpStart** 方式を選択するには、**2** を入力し、**Enter** キーを押します。  
JumpStart インストールが開始されます。

---

注 - 30 秒以内に選択しないと、Oracle Solaris の対話式インストールプログラムが起動します。コマンド行に任意のキーを入力することによって、このタイマーを止めることができます。

---

- 6 **sysidcfg** でシステム情報の事前構成を行わなかった場合は、プロンプトが表示された時点でシステム構成についての質問に答えます。

---

注 - Oracle Solaris 10 9/10 リリース以降では、**auto\_reg** キーワードを **sysidcfg** ファイルに含めない場合は、自動登録のサポート資格情報とプロキシ情報を指定するように求められます。

---

- 7 画面の指示に従って、ソフトウェアをインストールします。

JumpStart プログラムが Oracle Solaris ソフトウェアのインストールを終了すると、システムが自動的にリブートします。また、**GRUB menu.lst** ファイルも自動的に更新されます。インストールした Oracle Solaris のインスタンスは、GRUB メニューを次に使用するときに表示されます。

インストールが終了すると、インストールログがファイルに保存されます。インストールログは、次のディレクトリに作成されます。

- `/var/sadm/system/logs`
- `/var/sadm/install/logs`

## x86: システムのブートのためのコマンドリファレンス

次の表では、GRUB メニューのブートコマンドに使用するコマンド行オプションについて説明します。この表に示されているオプションは、JumpStart インストールに適したオプションです。

ブートコマンドの構文は次のとおりです。

```
kernel /I86PC.Solaris_11-image-directory/multiboot kernel/unix/ - install \
[url|ask] options -B install_media=media-type
```

表 6-4 GRUB メニューのブートコマンドリファレンス

| オプション     | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| - install | <p>JumpStart インストールを実行します。</p> <p>次の例では、システムは DVD メディアからブートして、次のようなオプションが使用されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ - install は JumpStart を実行します</li> <li>■ file:///jumpstart/config.tar は、ローカルディスクで JumpStart プロファイルを検出する</li> </ul> <pre>kernel /I86pc.Solaris_11.8/multiboot - install file:///jumpstart/config.tar \ -B install_media=dvdrom module /I86Solaris_11.8/x86.new</pre> |

表 6-4 GRUB メニューのブートコマンドリファレンス (続き)

| オプション                  | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>[url ask]</code> | <p>JumpStart ファイルの場所を指定するか、場所の入力を求めるプロンプトを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>url</code> - ファイルのパスを指定します。HTTP または HTTPS サーバーに存在するファイルの URL を指定できます。<br/>HTTP サーバーの場合、構文は次のとおりです。<br/><br/> <pre>http://server-name:IP-address/jumpstart-dir/ compressed-config-file&amp;proxy-info</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <code>sysidcfg</code> ファイルを圧縮構成ファイルに含めた場合は、次の例に示すようにそのファイルを含むサーバーの IP アドレスを指定する必要があります。<br/><br/> <pre>kernel /I86pc.Solaris_11.8/multiboot install \ http://192.168.2.1/jumpstart/config.tar \ -B install_media=192.168.2.1/export/Solaris_11.8/boot \ module /I86PC.Solaris_11.8/x86.new</pre> </li> <li>■ 圧縮構成ファイルをファイアウォールで防御された HTTP サーバー上の圧縮構成ファイルに保存した場合は、ブート時に <code>proxy</code> 指示子を使用する必要があります(ファイルが配置されたサーバーの IP アドレスを指定する必要はない)。プロキシサーバーの IP アドレスは次のように指定します。<br/><br/> <pre>kernel /I86pc.Solaris_11.8/multiboot install \ http://www.shadow.com/jumpstart/config.tar&amp;proxy=131.141.6.151 \ -B install_media=192.168.2.1/export/Solaris_11.8/boot \ module /I86PC.Solaris_11.8/x86.new</pre> </li> </ul> </li> <li>■ <code>ask</code> - 圧縮構成ファイルの場所の入力を求めるプロンプトを表示するように、インストールプログラムを指定します。システムがブートしてネットワークに接続されると、入力を求めるプロンプトが表示されます。このオプションを使用すると、完全に自動化された JumpStart インストールを行うことはできません。<br/>Return キーを押してこのプロンプトへの入力を省略すると、Oracle Solaris インストールプログラムはネットワークパラメータを対話的に構成します。インストールプログラムは次に、圧縮構成ファイルの場所を尋ねるプロンプトを表示します。<br/>次の例では、JumpStart を実行し、DVD メディアからブートします。システムがネットワークに接続されると、構成ファイルの場所の入力を求めるプロンプトが表示されます。<br/><br/> <pre>kernel /boot/multiboot kernel/unix install ask -B \ install_media=192.168.2.1:export/sol_11_x86/boot module \ /I86PC.Solaris_11.8_</pre> </li> </ul> |

## JumpStart によるインストール (例)

---

この章では、JumpStart インストールを使用して SPARC システムと x86 システムに Oracle Solaris ソフトウェアを設定してインストールする例を示します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、第 9 章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」の制限事項とプロファイルの例を参照してください。

---

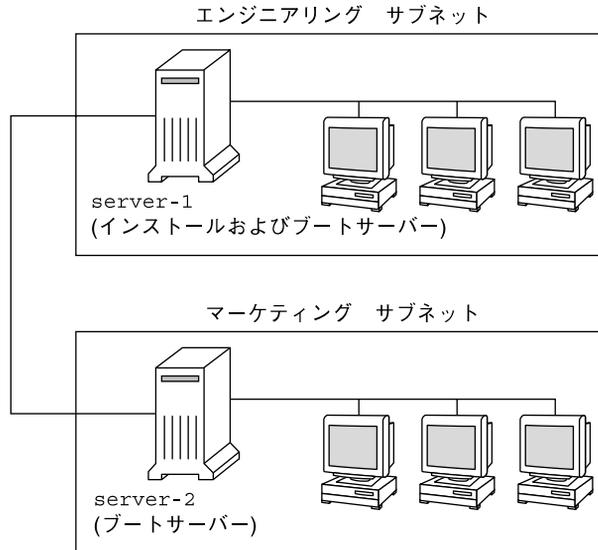
この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 96 ページの「サイトの設定例」
- 97 ページの「インストールサーバーの作成」
- 98 ページの「x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成」
- 99 ページの「JumpStart ディレクトリの作成」
- 99 ページの「JumpStart ディレクトリの共有」
- 99 ページの「SPARC: エンジニアリング部のプロファイルの作成」
- 100 ページの「x86: マーケティング部のプロファイルの作成」
- 101 ページの「rules ファイルの更新」
- 101 ページの「rules ファイルの妥当性を検査する」
- 102 ページの「SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設定」
- 102 ページの「x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定」
- 104 ページの「SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインストール」
- 104 ページの「x86: マーケティングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインストール」

## サイトの設定例

次の図は、この例で使用するサイトの設定を示しています。

図7-1 サイトの設定例



この例におけるサイトの状況は次のとおりです。

- SPARC: エンジニアリング部は、グループ固有のサブネット上にあります。このグループでは、ソフトウェアを開発するために SPARCstation システムを使用しています。
- x86: マーケティング部も、グループ固有のサブネット上にあります。このグループでは、文書処理、表計算、およびその他のオフィスツールを実行するために x86 システムを使用しています。
- このサイトでは NIS を使用しています。システムの Ethernet アドレス、IP アドレス、およびホスト名は NIS マップに事前構成されています。サイトのサブネットマスク、日付と時間、および地域の情報も NIS マップに事前構成されています。

---

注- マーケティングシステムの周辺装置は、`sysidcfg` ファイルに事前構成されています。

---

- エンジニアリングシステムとマーケティングシステムの両方とも、Oracle Solaris 10/11 ソフトウェアをネットワーク経由でインストールします。

# インストールサーバーの作成

両方のグループとも Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアをネットワーク経由でインストールする必要があるため、`server-1` を両方のグループのインストールサーバーにします。`server-1` ローカルディスク (`/export/install` ディレクトリ内) にイメージをコピーするには、`setup_install_server(1M)` コマンドを使用します。次のいずれかのメディアからイメージをコピーします。

- Oracle Solaris SOFTWARE CD と Oracle Solaris LANGUAGES CD

---

注 - **Oracle Solaris 10 9/10** リリース以降では、DVD のみが提供されます。Oracle Solaris SOFTWARE CD は提供されません。

---

- Oracle Solaris Operating System DVD

イメージは、ディスクから空のディレクトリ (これらの例では `sparc_10` と `x86_10`) にコピーする必要があります。

例 7-1 SPARC: Oracle Solaris 10 8/11 CD のコピー

1. `server-1` の CD-ROM ドライブに Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/sparc_10
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/sparc_10
```

2. `server-1` の CD-ROM ドライブに Oracle Solaris SOFTWARE - 2 CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/sparc_10
```

3. インストールする Oracle Solaris ソフトウェアのバージョンごとに、前記のコマンドを実行します。

4. `server-1` の CD-ROM ドライブに最初の SPARC: Oracle Solaris LANGUAGES CD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/sparc_10
```

5. SPARC: Oracle Solaris LANGUAGES CD (SPARC 版) ごとに、前記のコマンドを実行します。

例 7-2 SPARC: Oracle Solaris 10 8/11 DVD のコピー

`server-1` の DVD-ROM ドライブに Oracle Solaris Operating System DVD (SPARC 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

## 例 7-2 SPARC: Oracle Solaris 10 8/11 DVD のコピー (続き)

```
server-1# mkdir -p /export/install/sparc_10
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/sparc_10
```

## 例 7-3 x86: Oracle Solaris 10 8/11 CD のコピー

1. server-1 の CD-ROM ドライブに Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/x86_10
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/x86_10
```

2. server-1 の CD-ROM ドライブに Oracle Solaris SOFTWARE - 2 CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/x86_10
```

3. インストールする Oracle Solaris ソフトウェアのバージョンごとに、前記のコマンドを実行します。

4. server-1 の CD-ROM ドライブに最初の Oracle Solaris LANGUAGES CD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./add_to_install_server /export/install/x86_10
```

5. Oracle Solaris LANGUAGES CD (x86 版) ごとに、前記のコマンドを実行します。

## 例 7-4 x86: Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) のコピー

server-1 の DVD-ROM ドライブに Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) を挿入し、次のコマンドを入力します。

```
server-1# mkdir -p /export/install/x86_10
server-1# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-1# ./setup_install_server /export/install/x86_10
```

## x86: マーケティングシステム用のブートサーバーの作成

異なるサブネット上のインストールサーバーからシステムをブートすることはできないため、server-2 をマーケティング部のサブネット上のブートサーバーにする必要があります。setup\_install\_server(1M) コマンドを使って、Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版) または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版) からブートソフトウェアをコピーします。ブートソフトウェアは、server-2 ローカルディスクの /export/boot ディレクトリにコピーされます。

メディアを選択し、ローカルディスクにブートソフトウェアをインストールします。server-2 に接続されているドライブに CD または DVD を挿入して、次のコマンドを実行します。

```
server-2# cd /mymountpoint/Solaris_10/Tools
server-2# ./setup_install_server -b /export/boot
```

-b オプションは、setup\_install\_server が /export/boot ディレクトリにブート情報をコピーするように指定します。

## JumpStart ディレクトリの作成

インストールサーバーとブートサーバーの設定が完了したら、ネットワーク上の任意のシステムを使って server-1 上に JumpStart ディレクトリを作成します。このディレクトリには、Oracle Solaris ソフトウェアの JumpStart インストールに必要なファイルが入っています。このディレクトリを設定するには、/export/install にコピーされている Oracle Solaris Operating System DVD イメージまたは Oracle Solaris SOFTWARE-1 CD イメージからサンプルディレクトリをコピーします。

```
server-1# mkdir /jumpstart
server-1# cp -r /export/install/sparc_10/Solaris_10/Misc/jumpstart_sample /jumpstart
```

## JumpStart ディレクトリの共有

ネットワーク上のシステムから rules ファイルとプロファイルにアクセスできるようにするには、/jumpstart ディレクトリを共有にします。ディレクトリを共有するには、/etc/dfs/dfstab ファイルに次の行を追加します。

```
share -F nfs -o ro,anon=0 /jumpstart
```

次に、コマンド行で shareall コマンドを実行します。

```
server-1# shareall
```

## SPARC: エンジニアリング部のプロファイルの作成

エンジニアリングシステム用として、/jumpstart ディレクトリに eng\_prof という名前のファイルを作成します。eng\_prof ファイルには次のエントリが含まれており、エンジニアリング部のシステムにインストールされる Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアを定義しています。

```
install_type initial_install
system_type standalone
partitioning default
cluster SUNWCprog
filesystems any 512 swap
```

この例のプロファイルは、次のインストール情報を指定しています。

|                           |                                                                                         |
|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type</code> | アップグレードではなく、初期インストールを行います。                                                              |
| <code>system_type</code>  | エンジニアリングシステムはスタンドアロンシステムです。                                                             |
| <code>partitioning</code> | JumpStart ソフトウェアは、デフォルトのディスクパーティションを使用して、エンジニアリングシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールします。 |
| <code>cluster</code>      | 開発者システムサポートソフトウェアグループをインストールします。                                                        |
| <code>filesys</code>      | エンジニアリング部の各システムには、512M バイトのスワップ空間が用意されます。                                               |

## x86: マーケティング部のプロファイルの作成

マーケティングシステム用として、`/jumpstart` ディレクトリに `marketing_prof` という名前のファイルを作成します。`marketing_prof` ファイルには次のエントリが含まれており、マーケティング部のシステムにインストールされる Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアを定義しています。

```
install_type initial_install
system_type standalone
partitioning default
cluster SUNWCuser
package SUNWaudio
```

この例のプロファイルは、次のインストール情報を指定しています。

|                           |                                                                                  |
|---------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type</code> | アップグレードではなく、初期インストールを行います。                                                       |
| <code>system_type</code>  | マーケティングシステムはスタンドアロンシステムです。                                                       |
| <code>partitioning</code> | JumpStart ソフトウェアが、デフォルトのディスクパーティションを使用して、マーケティングシステムに Oracle Solaris をインストールします。 |
| <code>cluster</code>      | エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループをインストールします。                                             |
| パッケージ                     | オーディオツールのデモソフトウェアパッケージを各システムに追加します。                                              |

## rules ファイルの更新

Oracle Solaris インストールプログラムは、JumpStart インストール中に rules ファイルのルールを使用して、各システムに正しいインストール(プロファイル)を選択します。

このサイトでは、各部署は独自のサブネットとネットワークアドレスを持っています。エンジニアリング部はサブネット 255.222.43.0 にあります。マーケティング部はサブネット 255.222.44.0 にあります。この情報を使用して、エンジニアリングシステムとマーケティングシステムに Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアがインストールされる方法を制御します。/jumpstart ディレクトリ内の rules ファイルを編集して、サンプルのルールをすべて削除し、次の行をファイルに追加します。

```
network 255.222.43.0 - eng_prof -
network 255.222.44.0 - marketing_prof -
```

基本的に、これらのルールは 255.222.43.0 ネットワーク上のシステムに Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアが eng\_prof プロファイルを使用してインストールされることを示しています。255.222.44.0 ネットワーク上のシステムには、Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアが marketing\_prof プロファイルを使用してインストールされます。

---

注- この例のルールを使用すると、eng\_prof と marketing\_prof を使って Oracle Solaris 10 8/11 ソフトウェアをインストールするシステムを、ネットワークアドレスで識別できます。このほかにも、ホスト名、メモリーサイズ、またはモデルタイプをルールのキーワードとして使用できます。rules ファイルで使用できるキーワードの完全な一覧については、[表 8-1](#) を参照してください。

---

## rules ファイルの妥当性を検査する

rules ファイルとプロファイルの設定が完了したら、check スクリプトを実行して、これらのファイルが正常に設定されていることを確認します。

```
server-1# cd /jumpstart
server-1# ./check
```

check スクリプトによってエラーが検出されない場合は、rules.ok ファイルが作成されます。

## SPARC: ネットワーク上でインストールするためのエンジニアリングシステムの設定

/jumpstart ディレクトリとファイルの設定が完了したら、インストールサーバー server-1 上で `add_install_client` コマンドを実行して、インストールサーバーから Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするように、エンジニアリングシステムを設定します。server-1 は、エンジニアリング部のサブネットではブートサーバーにも相当します。

```
server-1# cd /export/install/sparc_10/Solaris_10/Tools
server-1# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-eng1 sun4u
server-1# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-eng2 sun4u
```

この例の `add_install_client` コマンドで使用しているオプションの意味は次のとおりです。

- c           サーバー (server-1) と JumpStart ディレクトリへのパス (/jumpstart) を指定します。NFS を使用している場合はこのオプションを使用しません。

---

注 - NFS を使用していない場合は、次のコマンドを使用して JumpStart ディレクトリへのパスを指定します。

- **SPARC** システムの場合は、`boot` コマンドにパスを指定します
- **x86** システムの場合は、GRUB メニューエントリを編集することによってパスを指定します

---

host-eng1    エンジニアリング部のシステム名です。

host-eng2    エンジニアリング部の別のシステム名です。

sun4u        server-1 をインストールサーバーとして使用するシステムのプラットフォームグループを指定します。これは、Ultra 5 システム用のプラットフォームグループです。

## x86: ネットワーク上でインストールするためのマーケティングシステムの設定

次に、ブートサーバー (server-2) で `add_install_client` コマンドを使用します。このコマンドはマーケティングシステムに対して、ブートサーバーからブートし、インストールサーバー (server-1) から Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするように設定します。

```

server-2# cd /marketing/boot-dir/Solaris_10/Tools
server-2# ./add_install_client -s server-1:/export/install/x86_10 \
-c server-1:/jumpstart host-mkt1 i86pc
server-2# ./add_install_client -s server-1:/export/install/x86_10 \
-c server-1:/jumpstart host-mkt2 i86pc
server-2# ./add_install_client -d -s server-1:/export/install/x86_10 \
-c server-1:/jumpstart SUNW.i86pc i86pc
server-2# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-mkt1 sun4u
server-2# ./add_install_client -c server-1:/jumpstart host-mkt2 sun4u

```

add\_install\_client コマンドで使用されるオプションの意味は次のとおりです。

- d クライアントが DHCP を使ってネットワークインストールパラメータを取得するように指定します。このオプションは PXE ネットワークブートを使用してネットワークからブートするクライアントには必ず指定します。PXE ネットワークブートを使用しないネットワークブートクライアントには、-d は省略できます。
- s インストールサーバー (server-1) と Oracle Solaris ソフトウェアへのパス (/export/install/x86\_10) を指定します。
- c サーバー (server-1) と JumpStart ディレクトリへのパス (/jumpstart) を指定します。NFS を使用している場合はこのオプションを使用します。

---

注-NFS を使用していない場合は、次のコマンドを使用して JumpStart ディレクトリへのパスを指定します。

- SPARC システムの場合は、boot コマンドにパスを指定します
  - x86 システムの場合は、GRUB メニューエントリを編集することによってパスを指定します
- 

- host-mkt1 マーケティング部のシステム名です。
- host-mkt2 マーケティング部の別のシステム名です。
- sun4u server-1 をインストールサーバーとして使用するシステムのプラットフォームグループを指定します。これは、Ultra 5 システム用のプラットフォームグループです。
- SUNW.i86pc すべての Oracle Solaris x86 クライアントの DHCP クラス名です。1 回のコマンド実行ですべての Oracle Solaris x86 DHCP クライアントを構成する場合は、このクラス名を使用してください。
- i86pc このブートサーバーを使用するシステムのプラットフォームグループを指定します。このプラットフォーム名は x86 システムを意味します。

## SPARC: エンジニアリングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインストール

サーバーとファイルの設定が完了したら、各システムの `ok (PROM)` プロンプトに次の `boot` コマンドを入力してエンジニアリングシステムをブートします。

```
ok boot net - install
```

Oracle Solaris OS がエンジニアリング部のシステムに自動的にインストールされます。

## x86: マーケティングシステムのブートと Oracle Solaris ソフトウェアのインストール

次のいずれかを使って、システムをブートできます。

- Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD (x86 版)
- Oracle Solaris Operating System DVD (x86 版)
- ネットワーク (PXE ネットワークブートを使用)

Oracle Solaris ソフトウェアがマーケティング部のシステムに自動的にインストールされます。

# JumpStart キーワードリファレンス

---

この章では、rules ファイル、プロファイル、および開始/終了スクリプトで使用できるキーワードと値のリストを示します。

---

注 - Oracle Solaris ZFS ルートプールをインストールする場合は、第9章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」の制限事項とプロファイルの例を参照してください。また、ZFS 固有のキーワード、およびプロファイル内で使用できるキーワードの一覧については、表 8-2 を参照してください。

---

この章で扱う内容は、次のとおりです。

- 105 ページの「ルールキーワードと値の説明」
- 110 ページの「プロファイルキーワードと値」
- 160 ページの「JumpStart の環境変数」
- 162 ページの「プローブキーワードと値」

## ルールキーワードと値の説明

次の表に、rules ファイルで使用できるキーワードと値を記載します。rules ファイルの詳しい作成方法については、31 ページの「rules ファイルの作成」を参照してください。

表 8-1 ルールキーワードとルール値の説明

| キーワード | 値          | 次と一致します                   |
|-------|------------|---------------------------|
| any   | マイナス記号 (-) | あらゆるもの。any キーワードは常に成功します。 |

表 8-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

| キーワード       | 値                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 次と一致します                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| arch        | <p><i>processor-type</i></p> <p><i>processor-type</i> に有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SPARC: sparc</li> <li>■ x86: i386</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | <p>システムのプロセッサタイプ。</p> <p>システムのプロセッサタイプは、<code>uname -p</code> コマンドで調べることができます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| disksize    | <p><i>disk-name size-range</i></p> <p><i>disk-name</i> - <i>cxydz</i> の形式のディスク名 (<code>c0t3d0</code>、<code>c0d0</code> など)、または特別なワード <code>rootdisk</code>。<code>rootdisk</code> を使用する場合、照合するディスクは次の順番で決定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SPARC: 事前にインストールされているブートイメージ (つまり、ファクトリ JumpStart がインストールされた新しい SPARC システム) を持つディスク</li> <li>■ <code>c0t3d0s0</code> ディスク (存在する場合)</li> <li>■ 最初に利用可能なディスク (カーネルのプロープ順で検索される)</li> </ul> <p><i>size-range</i> - ディスクのサイズ。M バイト単位の範囲 (<i>x-x</i>) で指定する必要があります。</p> <p>注 - <i>size-range</i> を計算するときは、1M バイトが 1,048,576 バイトであることに注意してください。535M バイトのディスクと明記されているディスクでも、ディスク容量が 510,000,000 バイトしかない場合があります。535,000,000/1,048,576=510 であるため、JumpStart プログラムは 535M バイトのディスクを 510M バイトのディスクとみなします。535M バイトのディスクは、530-550 の <i>size-range</i> には一致しません。</p> | <p>システムのディスクの名前とサイズ (M バイト単位)。</p> <p>例:</p> <pre>disksize c0t3d0 250-300</pre> <p>この例では、JumpStart プログラムは <code>c0t3d0</code> というシステムディスクの照合を試みません。このディスクには 250M から 300M バイトの情報を格納できます。</p> <p>例:</p> <pre>disksize rootdisk 750-1000</pre> <p>この例では、JumpStart プログラムは次の順でディスクを照合します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 事前にインストールされているブートイメージが格納されたシステムディスク</li> <li>2. <code>c0t3d0s0</code> ディスク (存在する場合)</li> <li>3. 750M から 1G バイトの情報を格納できる、最初に利用可能なディスク</li> </ol> |
| domainname  | <p><i>domain-name</i></p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | <p>システムのドメイン名 - ネームサービスが情報を判別する方法を制御します。</p> <p>システムがインストール済みの場合、<code>domainname</code> コマンドによりシステムのドメイン名を表示できます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| hostaddress | <p><i>IP-address</i></p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | <p>システムの IP アドレス。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| hostname    | <p><i>host-name</i></p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | <p>システムのホスト名。</p> <p>システムがインストール済みの場合、<code>uname -n</code> コマンドによりシステムのホスト名を表示できます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

表 8-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

| キーワード     | 値                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 次と一致します                                                                                                                                                                                        |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| installed | <p><i>slice version</i></p> <p><i>slice - cwtx dysz</i> の形式のディスクスライス名 (c0t3d0s5 など)、あるいは特別なワード any または rootdisk。any を使用すると、システムに接続されたどのディスクも照合します (カーネルのプロープ順)。rootdisk を使用する場合、照合するディスクは次の順番で決定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ SPARC: 事前にインストールされているブートイメージ (つまり、ファクトリ JumpStart がインストールされた新しい SPARC システム) を持つディスク</li> <li>■ c0t3d0s0 ディスク (存在する場合)</li> <li>■ 最初に利用可能なディスク (カーネルのプロープ順で検索される)</li> </ul> <p><i>version</i> - バージョン名、あるいは特別なワード any または upgrade。any を使用すると、どの Oracle Solaris リリースにも一致します。upgrade を使用すると、サポートされていてアップグレード可能なすべての Oracle Solaris リリースと一致します。</p> <p>Oracle Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンは SystemV になります。</p> | <p>Oracle Solaris ソフトウェアの特定バージョンに対応するルート (/) ファイルシステムが存在するディスク。</p> <p>例:</p> <p>installed c0t3d0s1 Solaris 10</p> <p>この例では、c0t3d0s1 に Oracle Solaris のルート (/) ファイルシステムを持つシステムを照合しています。</p>    |
| karch     | <p><i>platform-group</i></p> <p>有効な値は、sun4u、i86pc、および prep。システムとそれに対応するプラットフォームグループのリストについては、『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』 (<a href="http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html">http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html</a>) を参照してください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | <p>システムのプラットフォームグループを照合します。</p> <p>システムがインストール済みの場合は、arch -k コマンドまたは uname -m コマンドにより、システムのプラットフォームグループを表示できます。</p>                                                                            |
| memsize   | <p><i>physical-mem</i></p> <p>値は M バイト単位の範囲 (x-x) または 1 つの M バイト値で指定します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | <p>システムの物理メモリーサイズ (M バイト単位)。</p> <p>例:</p> <p>memsize 64-128</p> <p>この例では、物理メモリーサイズが 64M から 128M バイトのシステムとの照合を試みます。</p> <p>システムがインストール済みの場合は、prtconf コマンド (2 行目) によりシステムの物理メモリーサイズを表示できます。</p> |

表 8-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

| キーワード   | 値                    | 次と一致します                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|---------|----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| model   | <i>platform-name</i> | <p>システムのプラットフォーム名。有効なプラットフォーム名のリストについては、『Solaris Sun ハードウェアマニュアル』(<a href="http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html">http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html</a>)を参照してください。</p> <p>インストール済みのシステムのプラットフォーム名を見つけるには、<code>uname -i</code> コマンドか <code>prtconf</code> コマンド (5 行目) の出力を使用します。</p> <p>注 - <i>platform-name</i> にスペースが含まれている場合は、スペースを下線 (<code>_</code>) で置き換える必要があります。</p> <p>例:</p> <p>SUNW、Sun_4_50</p> |
| network | <i>network-num</i>   | <p>システムのネットワーク番号 - これは、JumpStart プログラムが、システムの IP アドレスとサブネットマスクの論理積をとって決定します。</p> <p>例:</p> <p>network 192.168.2.0</p> <p>この例では、IP アドレスが 192.168.2.8 のシステムを照合します (サブネットマスクが 255.255.255.0 の場合)。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| osname  | Solaris_x            | <p>システムにすでにインストールされている Oracle Solaris のバージョン。</p> <p>例:</p> <p>osname Solaris 10</p> <p>この例では、JumpStart プログラムは Oracle Solaris 10 8/11 OS がすでにインストールされているシステムとの照合を試みます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

表 8-1 ルールキーワードとルール値の説明 (続き)

| キーワード     | 値                    | 次と一致します                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-----------|----------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| probe     | <i>probe-keyword</i> | <p>有効なプローブキーワードまたは有効なカスタムプローブキーワード。</p> <p>例:</p> <p><code>probe disks</code></p> <p>この例では、システムのディスクサイズ (M バイト) をカーネルプローブ順に返します (例: SPARC ベースのシステムでは <code>c0t3d0s1</code>、<code>c0t4d0s0</code>)。JumpStart プログラムは環境変数 <code>SI_DISKLIST</code>、<code>SI_DISKSIZE</code>、<code>SI_NUMDISKS</code>、および <code>SI_TOTALDISK</code> を設定します。</p> <p>注 - <code>probe</code> キーワードには、属性を照合せず、プロファイルを実行しないという特徴があります。<code>probe</code> キーワードは、値を返すだけです。したがって、<code>probe</code> ルールキーワードで、開始スクリプト、プロファイル、および終了スクリプトは指定できません。</p> <p>プローブキーワードについては、<a href="#">第 5 章「カスタムルールおよびプローブキーワードの作成(タスク)」</a>を参照してください。</p> |
| totaldisk | <i>size-range</i>    | <p>システムのディスク容量の合計 (M バイト)。ディスク容量の全体量には、システムに接続されている使用可能なディスクがすべて含まれます。</p> <p>例:</p> <p><code>totaldisk 300-500</code></p> <p>この例では、JumpStart プログラムは合計 300M から 500M バイトのディスク容量を持つシステムの照合を試みます。</p> <p>注 - <i>size-range</i> を計算するときは、1M バイトが 1,048,576 バイトであることに注意してください。535M バイトのディスクと明記されているディスクでも、ディスク容量が 510,000,000 バイトしかない場合があります。535,000,000/1,048,576=510 であるため、JumpStart プログラムは 535M バイトのディスクを 510M バイトのディスクとみなします。535M バイトのディスクは、530-550 の <i>size-range</i> には一致しません。</p>                                                                                                                         |

## プロファイルキーワードと値

次のセクションでは、プロファイルで使用できるプロファイルキーワードとプロファイル値を説明します。プロファイルの詳細な作成方法については、[35 ページ](#)の「[プロファイルの作成](#)」を参照してください。これらのキーワードは、UFS および ZFS ファイルシステムのインストールで使用します。ZFS プロファイルで使用できるキーワードには、「ZFS」と示されています。

## プロファイルキーワードのクイックリファレンス

次の表では、使用するインストール方法に基づいて、どのキーワードを使用できるかをすばやく確認できます。プロファイルキーワードの説明で特に注記されていないかぎり、プロファイルキーワードは初期インストールオプションだけで使用できます。また、ZFS ルートプールプロファイルで使用できることが示されていないかぎり、そのキーワードは UFS ファイルシステム用です。

表 8-2 プロファイルキーワードの概要

| プロファイルキーワード                 | インストール方法                         |                                                |         |         |            |                           |                        |               |
|-----------------------------|----------------------------------|------------------------------------------------|---------|---------|------------|---------------------------|------------------------|---------------|
|                             | スタンドアロンシステム<br>(ネットワークに接続されていない) | スタンドアロンシステム<br>(ネットワークに接続されている)<br>または<br>サーバー | OS サーバー | アップグレード | フラッシュアーカイブ | フラッシュアーカイブ<br>差分<br>アーカイブ | ディスク容量の再配置を使用するアップグレード | UFS と ZFS の両方 |
| archive_location            | X                                | X                                              |         |         | X          |                           |                        | X             |
| backup_media                |                                  |                                                |         |         |            |                           | X                      |               |
| boot_device (UFS と ZFS)     | X                                | X                                              | X       |         |            |                           |                        | X             |
| bootenv (UFS と ZFS)         | X                                | X                                              | X       |         |            |                           |                        | X             |
| client_arch                 |                                  |                                                | X       |         |            |                           |                        |               |
| client_root                 |                                  |                                                | X       |         |            |                           |                        |               |
| client_swap                 |                                  |                                                | X       |         |            |                           |                        |               |
| cluster (ソフトウェアグループを追加する場合) | X                                | X                                              | X       |         |            |                           |                        | X             |
| cluster (クラスタを追加または削除する場合)  | X                                | X                                              | X       | X       |            |                           | X                      | X             |
| dontuse                     | X                                | X                                              | X       |         |            |                           |                        | X             |

表 8-2 プロファイルキーワードの概要 (続き)

| プロファイルキーワード                         | インストール方法                         |                                                |         |         |            |                       |                        |                  |
|-------------------------------------|----------------------------------|------------------------------------------------|---------|---------|------------|-----------------------|------------------------|------------------|
|                                     | スタンドアロンシステム<br>(ネットワークに接続されていない) | スタンドアロンシステム<br>(ネットワークに接続されている)<br>または<br>サーバー | OS サーバー | アップグレード | フラッシュアーカイブ | フラッシュアーカイブ<br>差分アーカイブ | ディスク容量の再配置を使用するアップグレード | UFS と ZFS の両方    |
| fdisk (x86 のみ)                      | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        | X                |
| filesystem (リモートファイルシステムをマウントする場合)  |                                  | X                                              | X       |         |            |                       |                        | X                |
| filesystem (ローカルファイルシステムを作成する場合)    | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        |                  |
| filesystem (ミラー化されたファイルシステムを作成する場合) | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        |                  |
| forced_deployment                   | X                                | X                                              |         |         |            | X                     |                        |                  |
| geo                                 | X                                | X                                              | X       | X       |            |                       | X                      | X                |
| install_type                        | X                                | X                                              | X       | X       | X          |                       | X                      | X                |
| layout_constraint                   |                                  |                                                |         |         |            |                       | X                      |                  |
| local_customization                 | X                                | X                                              |         |         | X          |                       |                        |                  |
| locale                              | X                                | X                                              | X       | X       |            |                       | X                      | X                |
| metadb (状態データベースの複製を作成する場合)         | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        |                  |
| no_master_check                     | X                                | X                                              |         |         |            | X                     |                        |                  |
| no_content_check                    | X                                | X                                              |         |         |            | X                     |                        |                  |
| num_clients                         |                                  |                                                | X       |         |            |                       |                        |                  |
| パッケージ                               | X                                | X                                              | X       | X       | X          |                       | X                      | X                |
| partitioning                        | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        |                  |
| patch                               | X                                | X                                              | X       | X       |            |                       | X                      |                  |
| pool                                | X                                | X                                              | X       |         |            |                       |                        | X (ZFS ルートプールのみ) |

表 8-2 プロファイルキーワードの概要 (続き)

| プロファイルキーワード        | インストール方法                      |                                       |         |         |            |                   |                        |               |
|--------------------|-------------------------------|---------------------------------------|---------|---------|------------|-------------------|------------------------|---------------|
|                    | スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されていない) | スタンドアロンシステム (ネットワークに接続されている) または サーバー | OS サーバー | アップグレード | フラッシュアーカイブ | フラッシュアーカイブ差分アーカイブ | ディスク容量の再配置を使用するアップグレード | UFS と ZFS の両方 |
| root_device        | X                             | X                                     | X       | X       | X          |                   | X                      | X             |
| system_type        | X                             | X                                     | X       |         |            |                   |                        |               |
| usedisk            | X                             | X                                     | X       |         |            |                   |                        | X             |
| iscsi_target_name  |                               | X                                     |         | X       |            |                   |                        |               |
| iscsi_target_ip    |                               | X                                     |         | X       |            |                   |                        |               |
| iscsi_target_lun   |                               | X                                     |         | X       |            |                   |                        |               |
| iscsi_target_port  |                               | X                                     |         | X       |            |                   |                        |               |
| iscsi_target_slice |                               |                                       |         | X       |            |                   |                        |               |

## プロファイルキーワードの説明と例

### archive\_location キーワード

archive\_location *retrieval-type location*

*retrieval-type* *retrieval-type* と *location* の値は、フラッシュアーカイブの格納場所によって異なります。*retrieval-type* と *location* に使用できる値や、archive\_location キーワードの使用例については、次のセクションを参照してください。

- 113 ページの「NFS サーバーに格納されたアーカイブ」
- 113 ページの「HTTP または HTTPS サーバーに格納されたアーカイブ」
- 115 ページの「FTP サーバーに格納されたアーカイブ」
- 116 ページの「ローカルテープに格納されたアーカイブ」
- 117 ページの「ローカルデバイスに格納されたアーカイブ」
- 118 ページの「ローカルファイルに格納されたアーカイブ」

*location* 場所の詳細については、次のセクションを参照してください。



注意-非大域ゾーンがインストールされていると、フラッシュアーカイブは正常に作成されません。フラッシュアーカイブ機能には Oracle Solaris ゾーン区分技術との互換性はありません。フラッシュアーカイブを作成した場合、アーカイブがこれらの条件で配置されると、作成されたアーカイブは正しくインストールされません。

- アーカイブが非大域ゾーンに作成された場合
- アーカイブが、非大域ゾーンがインストールされている大域ゾーンに作成された場合

## NFS サーバーに格納されたアーカイブ

アーカイブがネットワークファイルシステム (NFS) サーバーに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location nfs server-name:/path/filename retry n
```

`server-name` アーカイブを格納するサーバーの名前です。

`path` 指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに `$HOST` を含めると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは `$HOST` をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。

`filename` フラッシュアーカイブファイルの名前です。

`retry n` オプションのキーワードです。`n` は、フラッシュアーカイブユーティリティーがアーカイブのマウントを試みる最大回数です。

### 例 8-1 NFS サーバーに格納されたアーカイブ

```
archive_location nfs golden:/archives/usrarchive
```

```
archive_location nfs://golden/archives/usrarchive
```

## HTTP または HTTPS サーバーに格納されたアーカイブ

アーカイブが HTTP サーバーに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location http://server-name:port/path/filename optional-keywords
```

アーカイブが HTTPS サーバーに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location https://server-name:port/path/filename optional-keywords
```

`server-name` アーカイブを格納するサーバーの名前です。

|                          |                                                                                                                                                          |
|--------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>port</i>              | <p>オプションのポートです。<i>port</i> は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。</p> <p>ポートを指定しない場合、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはデフォルトの HTTP ポート番号、80 を使用します。</p> |
| <i>path</i>              | <p>指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに \$HOST を含めると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは \$HOST をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。</p>                                         |
| <i>filename</i>          | <p>フラッシュアーカイブファイルの名前です。</p>                                                                                                                              |
| <i>optional-keywords</i> | <p>フラッシュアーカイブを HTTP サーバーから取得するときに指定できるオプションのキーワードです。</p>                                                                                                 |

表 8-3 archive\_location HTTP で使用可能なオプションのキーワード

| キーワード                                | 値の定義                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|--------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>auth basic user-name password</i> | <p>アーカイブがパスワード保護された HTTP サーバーに格納されている場合は、その HTTP サーバーへのアクセスに必要なユーザー名とパスワードをプロファイルに含める必要があります。</p> <p>注-JumpStart で使用しようとするプロファイルでこの認証方法を使用することは、リスクを伴います。これは、承認されていないユーザーが、パスワードが入ったプロファイルにアクセスできる可能性があるためです。</p>                                                                                                                                                                                                                                                |
| <i>timeout min</i>                   | <p><i>timeout</i> キーワードには、HTTP サーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断され、再接続のあと、再開されます。<i>timeout</i> 値として 0 (ゼロ) を指定すると、再接続は行われません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ タイムアウトによる再接続が発生すると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはアーカイブを取得した最後の位置からインストールの再開を試みます。この位置でのフラッシュアーカイブインストールの再開が不可能な場合、アーカイブの初めから再度データの取得が行われ、タイムアウト前に取得されたデータは破棄されます。</li> <li>■ パッケージのインストール中にタイムアウトによる再接続が発生すると、パッケージの先頭からインストールし直されます。タイムアウト以前に取得されたデータは破棄されます。</li> </ul> |
| <i>proxy host:port</i>               | <p><i>proxy</i> キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しにフラッシュアーカイブを取得できます。<i>proxy</i> キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |

例 8-2 HTTP または HTTPS サーバーに格納されたアーカイブ

```
archive_location http://silver/archives/usrarchive.flar timeout 5
```

`auth basic username password` キーワードの例:

```
archive_location http://silver/archives/usrarchive.flar timeout 5 user1 secret
```

## FTP サーバーに格納されたアーカイブ

アーカイブが FTP サーバーに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location ftp://username:password@server-name:port/path/filename optional-keywords
```

`username:password` プロファイルファイルにおいて、FTP サーバーにアクセスするために必要なユーザー名とパスワードです。

`server-name` アーカイブを格納するサーバーの名前です。

`port` オプションのポートです。`port` は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。

ポートを指定しない場合、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはデフォルトの FTP ポート番号 21 を使用します。

`path` 指定したサーバーから取得するアーカイブの場所です。このパスに `$HOST` を含めると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは `$HOST` をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。

`filename` フラッシュアーカイブファイルの名前です。

`optional-keywords` フラッシュアーカイブを FTP サーバーから取得するときに指定できるオプションのキーワードです。

表 8-4 archive\_location FTP で使用可能なオプションのキーワード

| キーワード                        | 値の定義                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>timeout min</code>     | <p><code>timeout</code> キーワードには、HTTP サーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断され、再接続のあと、再開されます。<code>timeout</code> 値として0(ゼロ)を指定すると、再接続は行われません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ タイムアウトによる再接続が発生すると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはアーカイブを取得した最後の位置からインストールの再開を試みます。この位置でのフラッシュアーカイブインストールの再開が不可能な場合、アーカイブの初めから再度データの取得が行われ、タイムアウト前に取得されたデータは破棄されます。</li> <li>■ パッケージのインストール中にタイムアウトによる再接続が発生すると、パッケージの先頭からインストールし直されます。タイムアウト以前に取得されたデータは破棄されます。</li> </ul> |
| <code>proxy host:port</code> | <p><code>proxy</code> キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しにフラッシュアーカイブを取得できます。<code>proxy</code> キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

例 8-3 FTP サーバーに格納されたアーカイブ

```
archive_location ftp://user1:secret@silver/archives/usrarchive.flar timeout 5
```

## ローカルテープに格納されたアーカイブ

アーカイブがテープに格納されている場合は、`archive_location` プロファイルキーワードに次の構文を使用します。

```
archive_location local_tape device position
```

**device** フラッシュアーカイブを格納したテープドライブの名前です。デバイス名が正規のパスである場合は、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはデバイスノードへのパスからアーカイブを取得します。正規のパスでないデバイス名を指定した場合は、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはパスに `/dev/rmt/` を加えます。

**position** アーカイブを保存したテープドライブ上の位置を示します。位置が指定されないと、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはテープドライブの現在の位置からアーカイブを取得します。`position` を指定することにより、テープドライブ上でアーカイブの前に開始スクリプトまたは `sysidcfg` ファイルを配置できます。

**例 8-4** ローカルテープに格納されたアーカイブ

```
archive_location local_tape /dev/rmt/0n 5
archive_location local_tape 0n 5
```

**ローカルデバイスに格納されたアーカイブ**

ファイルシステム指向のランダムアクセスデバイス (フロッピーディスクや DVD など) にフラッシュアーカイブを格納した場合は、ローカルデバイスからフラッシュアーカイブを取得できます。archive\_location キーワードには次の構文を使用します。

---

注 - ローカルテープ用の構文を使用すると、ストリーム指向のデバイス (テープなど) からアーカイブを取得できます。

---

```
archive_location local_device device path/filename file-system-type
```

|                         |                                                                                                                                                                   |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>device</i>           | フラッシュアーカイブを格納したドライブの名前です。デバイス名が正規のパスである場合は、デバイスは直接マウントされます。正規のパスでないデバイス名を指定すると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーはパスに /dev/dsk/ を加えます。                                      |
| <i>path</i>             | フラッシュアーカイブへのパスです (指定したデバイス上のファイルシステムのルートからの相対的なパス)。このパスに \$HOST を含めると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは \$HOST をインストール先のクローンシステムの名前に置き換えます。                               |
| <i>filename</i>         | フラッシュアーカイブファイルの名前です。                                                                                                                                              |
| <i>file-system-type</i> | デバイス上のファイルシステムのタイプを指定します。ファイルシステムのタイプを指定しない場合、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは、UFS ファイルシステムのマウントを試みます。UFS のマウントに失敗すると、フラッシュアーカイブインストールユーティリティーは HSFS ファイルシステムのマウントを試みます。 |

**例 8-5** ローカルデバイスに格納されたアーカイブ

UFS ファイルシステムとしてフォーマットされているローカルハードディスクからアーカイブを取得するには:

```
archive_location local_device c0t0d0s0 /archives/$HOST
```

HSFS ファイルシステムを持つローカル CD-ROM からアーカイブを取得するには:

例 8-5 ローカルデバイスに格納されたアーカイブ (続き)

```
archive_location local_device c0t0d0s0 /archives/usrchive
```

## ローカルファイルに格納されたアーカイブ

クローンシステムをブートしたミニルートに格納したローカルファイルのアーカイブを取得できます。JumpStart インストールを実行するときに、DVD、CD、または NFS ベースのミニルートからシステムをブートします。このミニルートからインストールソフトウェアがロードされ、実行されます。したがって、DVD、CD または NFS ベースのミニルートに格納したフラッシュアーカイブは、ローカルファイルとしてアクセスできます。archive\_location キーワードには次の構文を使用します。

```
archive_location local_file path/filename
```

*path* アーカイブの位置です。このパスは、システムを Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間、システムにローカルファイルとしてアクセスできるものでなければなりません。Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間、システムは、/net などの自動マウントされたディレクトリへアクセスできません。

*filename* フラッシュアーカイブファイルの名前です。

例 8-6 ローカルファイルに格納されたアーカイブ

```
archive_location local_file /archives/usrchive
```

## backup\_media プロファイルキーワード

```
backup_media type path
```

backup\_media は、ディスク容量の再配置が必要なアップグレードオプションだけで使用できます。

backup\_media は、ディスク容量不足のためにアップグレード中にディスク容量の再配置が必要なファイルシステムのバックアップをとるために使用するメディアを定義します。バックアップ用に複数のテープまたはフロッピーディスクが必要な場合は、アップグレード中にテープまたはフロッピーディスクの挿入を求めるプロンプトが表示されます。

| 有効な <i>type</i> 値 | 有効な <i>path</i> 値                        | 仕様                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-------------------|------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| local_tape        | /dev/rmt/ <i>n</i>                       | アップグレードされるシステムのローカルテープドライブを指定します。 <i>path</i> は、テープドライブのキャラクタ型 (raw) デバイスパスである必要があります。 <i>n</i> はテープドライブの番号です。                                                                                                                                                       |
| local_diskette    | /dev/rdisketten                          | アップグレードされるシステムのローカルフロッピーディスクドライブを指定します。 <i>path</i> は、フロッピーディスクドライブのキャラクタ型 (raw) デバイスパスである必要があります。 <i>n</i> はフロッピーディスクドライブの番号です。<br><br>バックアップに使用するフロッピーディスクはフォーマットされていない必要があります。                                                                                    |
| local_filesystem  | /dev/dsk/cwtxdysz<br><i>/file-system</i> | アップグレードされるシステムのローカルファイルシステムを指定します。アップグレードで変更されるローカルファイルシステムは指定できません。 <i>path</i> は、ディスクスライスのブロックデバイスパスでもかまいません。たとえば、/dev/dsk/cwtxdysz 内の tx は必須ではありません。あるいは、 <i>path</i> は /etc/vfstab ファイルによってマウントされたファイルシステムへの絶対パスでもかまいません。                                        |
| remote_filesystem | host:/file-system                        | リモートシステムの NFS ファイルシステムを指定します。 <i>path</i> は、リモートシステム ( <i>host</i> ) の名前または IP アドレスと、NFS ファイルシステム ( <i>file-system</i> ) への絶対パスを含まなければなりません。NFS ファイルシステムは、読み取り権と書き込み権を持っている必要があります。                                                                                  |
| remote_system     | user@host :/directory                    | リモートシェル (rsh) で到達できるリモートシステム上のディレクトリを指定します。アップグレードされるシステムは、リモートシステムの .rhosts ファイル経由で、リモートシステムにアクセスできなければなりません。 <i>path</i> は、リモートシステム ( <i>host</i> ) の名前と、そのディレクトリ ( <i>directory</i> ) への絶対パスを含まなければなりません。ユーザーログイン ID ( <i>user</i> ) を指定しないと、デフォルトで root が使用されます。 |

## 例 8-7 backup\_media プロファイルキーワード

```
backup_media local_tape /dev/rmt/0
backup_media local_diskette /dev/rdiskette1
backup_media local_filesystem /dev/dsk/c0t3d0s4
backup_media local_filesystem /export
```

例 8-7 backup\_media プロファイルキーワード (続き)

```
backup_media remote_filesystem system1:/export/temp
backup_media remote_system user1@system1:/export/temp
```

## boot\_device プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注 - boot\_device キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールと同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、[表 8-2](#) を参照してください。

```
boot_device device eeprom
```

boot\_device には、JumpStart がルート (/) ファイルシステムをインストールするデバイスと、システムのブートデバイスを指定します。boot\_device は、ルート (/) ファイルシステムを指定する filesys キーワードと root\_device キーワードに一致する必要があります。

プロファイルに boot\_device キーワードを指定しなかった場合、インストール時にデフォルトで次の boot\_device キーワードが指定されます。

```
boot_device any update
```

*device* 次のいずれかの値を使用します。

SPARC: cw txdy sz または cx dysz      JumpStart プログラムによってルート (/) ファイルシステムが配置されるディスクスライス (たとえば c0t0d0s0) です。

x86: cw txdy または cxdy      JumpStart プログラムによってルート (/) ファイルシステムが配置されるディスク (たとえば c0d0) です。

existing      JumpStart プログラムは、システムの既存のブートデバイスにルート (/) ファイルシステムを格納します。

any      JumpStart プログラムは、ルート (/) ファイルシステムを配置する場所を選択します。システムの既存のブートデバイスを使用する場合もありますが、必要であれば異なるブートデバイスを選択します。

*eeprom* システムの EEPROM を変更または保存する場合に選択します。

システムの現在のブートデバイスを変更する場合、*eeprom* の値でもシステムの EEPROM を変更できます。これにより、システムは新しいブートデバイスから自動的にブートできます。

---

注-x86:preserve 値を指定する必要があります。

---

*update* JumpStart プログラムは、インストールされるシステムが指定のブートデバイスから自動的にブートするように、システムの EEPROM をそのブートデバイスに変更します。

*preserve* システムの EEPROM 中のブートデバイス値は変更されません。システムの EEPROM を変更しないで新しいブートデバイスを指定した場合は、システムが新しいブートデバイスから自動的にブートするように、システムの EEPROM を手作業で変更する必要があります。

例 8-8 boot\_device プロファイルキーワード

```
boot_device c0t0d0s2 update
```

## bootenv プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注-bootenv キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。ZFS インストールでの使用方法は異なります。

- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。
- ZFS ルートプールのインストールでの bootenv キーワードの使用方法については、168 ページの「ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart キーワード (リファレンス)」を参照してください。

```
bootenv createbe bename new-BE-name filesystem mountpoint:device:fs-options
[filesystem...]
```

bootenv createbe キーワードを使用すると、Oracle Solaris OS のインストール時に、空の非アクティブブート環境をすばやく作成できます。少なくとも、ルート (/) ファイルシステムを作成する必要があります。スライスは、指定のファイルシステム用に予約されていますが、ファイルシステムはコピーされません。このブート環境は、名前が付けられてはいますが、実際には、フラッシュアーカイブがインストールされるときにはじめて作成されることとなります。空のブート環境にアーカイブ

イブがインストールされると、ファイルシステムは予約されたスライスにインストールされます。bename および filesystem の値を次に示します。

**bename** *new-BE-name*

bename は、新しく作成するブート環境の名前を指定します。*new-BE-name* は、30 文字以内の英数字で指定してください。複数バイト文字は使用できません。名前は、システム上で一意となるように指定する必要があります。

**filesystem** *mountpoint: device:fs-options*

filesystem は、新しいブート環境に作成するファイルシステムの種類と数を決定します。少なくとも、ルート (/) ファイルシステムを置くスライスを指定する必要があります。複数のファイルシステムを同一のディスクに置くことも、複数のディスクに分散することもできます。

- *mountpoint* には、任意の有効なマウントポイント、またはスワップスライスを示す - (ハイフン) を指定できます。
- *device* には、インストール対象であるオペレーティングシステムが最初にブートしたときに利用可能なデバイスを指定してください。このデバイスは、「free」などの JumpStart の特殊な記憶装置とは無関係です。デバイスとして Solaris ボリュームマネージャーのボリュームや Veritas Volume Manager のボリュームを指定することはできません。*device* はディスクデバイスの名前です。/dev/dsk/cwtxdysz の形式で表されます。
- *fs-options* には、次のいずれかを指定できます。
  - *ufs*: UFS ファイルシステムを示します。
  - *swap*: スワップファイルシステムを示します。スワップマウントポイントはハイフン (-) で表します。

プロファイルの例とこのキーワードの基本的な使用方法については、次の関連情報を参照してください。

- プロファイルの例については、[例 3-11](#) を参照してください。
- Live Upgrade を使用した非アクティブブート環境の作成、アップグレード、およびアクティブ化に関する背景情報については、『[Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画](#)』の第 2 章「Live Upgrade (概要)」を参照してください。
- フラッシュアーカイブの使用に関する背景情報については、『[Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: フラッシュアーカイブ \(作成とインストール\)](#)』の第 1 章「フラッシュアーカイブの概要」を参照してください。

## client\_arch プロファイルキーワード

`client_arch` *karch-value* ...

`client_arch` は、OS サーバーが、それ自体が使用するものとは異なるプラットフォームグループをサポートすることを定義します。プロファイルに `client_arch` を指定しない場合、OS サーバーを使用するどのディスクレスクライアント

も、サーバーと同じプラットフォームグループでなくてはなりません。OSサーバーにサポートさせたいプラットフォームグループをすべて指定する必要があります。

*karch-value* の有効な値は、*sun4u* と *i86pc* です。プラットフォーム名と各種システムの詳細なリストについては、『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』(<http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html>) を参照してください。

---

注 - *client\_arch* は、*system\_type* に *server* を指定したときだけ使用できます。

---

## client\_root プロファイルキーワード

*client\_root* *root-size*

*client\_root* は、各クライアントに割り当てるルート領域の大きさ (*root-size*) を M バイト単位で定義します。サーバーのプロファイルに *client\_root* を指定しない場合、インストールソフトウェアは1つのクライアント当たり 15M バイトのルート領域を割り当てます。このクライアント用のルート領域の大きさは、*num\_clients* キーワードを組み合わせて、*/export/root* ファイルシステム用に確保する領域の大きさを決定するときに使用されます。

---

注 - *client\_root* は、*system\_type* に *server* を指定したときだけ使用できます。

---

## client\_swap プロファイルキーワード

*client\_swap* *swap-size*

*client\_swap* は、各ディスクレスクライアントに割り当てるスワップ空間の大きさ (*swap-size*) を M バイト単位で定義します。プロファイルに *client\_swap* を指定しない場合、32M バイトのスワップ空間がデフォルトで割り当てられます。

---

注 - *client\_swap* は、*system\_type* に *server* を指定したときだけ使用できます。

---

### 例 8-9 client\_swap プロファイルキーワード

次の例は、各ディスクレスクライアントに 64M バイトのスワップ空間が割り当てられることを指定しています。

```
client_swap 64
```

## スワップサイズを決定する方法

プロファイルが `swap` のサイズを指定していない場合、JumpStart プログラムはシステムの物理メモリーに基づいてスワップ空間のサイズを決定します。次の表に、JumpStart インストール中に `swap` のサイズがどのように決定されるかを示します。

表 8-5 `swap` のサイズの決定

| 物理メモリー (M バイト単位) | スワップ空間 (M バイト単位) |
|------------------|------------------|
| 16–64            | 32               |
| 64–128           | 64               |
| 128–512          | 128              |
| 512 を超える場合       | 256              |

JumpStart プログラムは `swap` のサイズが `swap` が作成されるディスクの 20% を超えないようにします。ただし、ほかのファイルシステムを配置したあとにディスクに空き領域が残っている場合を除きます。空き領域が残っている場合、JumpStart プログラムは空き領域を `swap` に割り当てて、可能であれば、表に示されている量を割り当てます。

注 - 物理メモリーとスワップ空間は合計で 32M バイト以上必要です。

## cluster プロファイルキーワード (ソフトウェアグループの追加) (UFS と ZFS)

`cluster` キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。

- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。
- ZFS ルートプールのインストール時にプロファイルで `cluster` キーワードを使用する方法については、171 ページの「ZFS ルートプール用の JumpStart プロファイルの例」を参照してください。

`cluster group-name`

`cluster` は、どのソフトウェアグループをシステムに追加するかを指定します。

ソフトウェアグループは、クラスタおよびパッケージの集まりを含むメタクラスタです。ソフトウェアグループは、`cluster` キーワードおよび `group-name` 変数を使って

インストールされます。この `cluster` キーワードは、初期インストールのときにのみインストールできます。この `cluster` キーワードは、`clustertoc(4)` ファイル内のメタクラスタを表します。

クラスタは `SUNWname` という名前のパッケージの集まりです。クラスタは、`cluster` キーワードおよび `cluster-name` 変数を使ってインストールされます。クラスタは初期インストールまたはアップグレードのときに、ソフトウェアグループ(メタクラスタ)から追加または削除できます。

各ソフトウェアグループの `group-name` は次の表のとおりです。

| ソフトウェアグループ              | 値         |
|-------------------------|-----------|
| 限定ネットワークシステムサポート        | SUNWCrnet |
| コアシステムサポート              | SUNWCreq  |
| エンドユーザーシステムサポート         | SUNWCuser |
| 開発者システムサポート             | SUNWCprog |
| 全体ディストリビューション           | SUNWCall  |
| 全体ディストリビューションと OEM サポート | SUNWCxall |

次の制限が適用されます。

- 1つのプロファイルに指定できるソフトウェアグループの数は1つだけです。
- ソフトウェアグループは、ほかの `cluster` エントリおよび `package` エントリよりも前に指定する必要があります。
- プロファイル内の `cluster` でソフトウェアグループを指定しない場合、デフォルトによりエンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループ (`SUNWCuser`) がシステムにインストールされます。

ソフトウェアグループの詳細は、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の「ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量」を参照してください。

## **cluster** プロファイルキーワード (クラスタの追加または削除) (UFS と ZFS)

```
cluster cluster-name [add | delete]
```

---

注-c`cluster` キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。

- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。
  - ZFS ルートプールのインストール時にプロファイルで `cluster` キーワードを使用する方法については、171 ページの「ZFS ルートプール用の JumpStart プロファイルの例」を参照してください。
- 

`cluster` は、システムにインストールされるソフトウェアグループにクラスタを追加するか、削除するかを指定します。

`cluster-name` クラスタ名は `SUNWCname` の形式で指定します。

`[add|delete]` 指定のクラスタを追加するか削除するかを表すオプションのキーワードです。値 `add` または `delete` を使用します。値 `add` も `delete` も指定しなかった場合、デフォルトで `add` が適用されます。

アップグレード時に `cluster` を使用すると、次の条件が適用されます。

- すでにシステムにあるすべてのクラスタが自動的にアップグレードされます。
  - `cluster-name add` を指定したが、`cluster-name` がシステムにインストールされていない場合、そのクラスタがインストールされます。
  - `cluster-name delete` を指定したが、`cluster-name` がシステムにインストールされていた場合、アップグレードが開始される前にそのパッケージは削除されます。
- 

注-ソフトウェアグループは、クラスタおよびパッケージの集まりを含むメタクラスタです。ソフトウェアグループは、`cluster` キーワードおよび `group-name` 変数を使ってインストールされます。この `cluster` キーワードは、初期インストールのときにのみインストールできます。この `cluster` キーワードは、`clustertoc(4)` ファイル内のメタクラスタを表します。

クラスタはパッケージの集まりです。クラスタはグループ化され、ソフトウェアグループ(メタクラスタ)を形成できます。クラスタ名は常に `SUNWname` の形式となります。クラスタは、`cluster` キーワードおよび `cluster-name` 変数を使ってインストールされます。クラスタは初期インストールまたはアップグレードのときに、ソフトウェアグループ(メタクラスタ)から追加または削除できます。

---

---

## dontuse プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

---

注-dontuse キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。

UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

---

dontuse *disk-name* ...

partitioning default が指定されると、デフォルトではシステム上のすべての使用可能ディスクが使用されます。dontuse は、JumpStart プログラムに使用させないディスク (1 つ以上) を指定するために使用します。*disk-name* は、*cxydz* または *cydz* の形式 (たとえば、*c0t0d0*) で指定する必要があります。

---

注-1 つのプロファイルで、dontuse キーワードと usedisk キーワードを同時に指定することはできません。

---

## x86: fdisk プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

---

注-fdisk キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

---

fdisk *disk-name type size*

fdisk は、x86 システムで fdisk パーティションを設定する方法を定義します。fdisk は 2 回以上指定できます。次に、fdisk によって x86 システムのパーティション設定を行う際の動作を示します。

- fdisk キーワードを使って (*size* に delete か 0 を指定して) 削除しないかぎり、ディスク上のすべての fdisk パーティションが保存されます。また、*size* に all を指定した場合は、既存のすべての fdisk パーティションが削除されます。
- ルート (/) ファイルシステムを含む Oracle Solaris fdisk パーティションは、そのディスク上でアクティブパーティションとして常に指定されます。

---

注-システムは、デフォルトでアクティブパーティションからブートします。

---

- プロファイルで `fdisk` キーワードを指定しないと、インストール時にデフォルトで次の `fdisk` キーワードが指定されます。

`fdisk all solaris maxfree`

- `fdisk` エントリは、プロファイルに指定されている順序で処理されます。

*disk-name* 次の値を使用して、`fdisk` パーティションを作成または削除する場所を指定します。

- `cxydz` または `cydz` - 特定のディスク。たとえば、`c0t3d0`。
- `rootdisk` - システムのルートディスク (インストールが行われる場所) の値を含む変数。ルートディスクは、158 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」に説明されているように、JumpStart プログラムによって決定されます。
- `all` - 選択されたすべてのディスク。

*type* 次の値を使用し、指定したディスク上で作成または削除する `fdisk` パーティションのタイプを指定します。

- `solaris` - Oracle Solaris `fdisk` パーティション (SUNIXOS `fdisk` タイプ)。
- `dosprimary` - プライマリ DOS の `fdisk` パーティション (データ DOS 用に拡張または予約された `fdisk` パーティションではない) の別名。 `size` に値 `delete` を指定して `fdisk` パーティションを削除する場合、`dosprimary` は `DOSHUGE`、`DOS0512`、および `DOS0516` `fdisk` タイプの別名になります。 `fdisk` パーティションを作成する場合、`dosprimary` は `DOSHUGE` `fdisk` パーティションの別名になります。
- `DDD` - 整数で表す `fdisk` パーティション。 `DDD` は 1 から 255 までの整数です。

---

注 - この値は `size` に `delete` を指定した場合のみ指定できます。

---

- `0xHH` - 16 進数で表す `fdisk` パーティション。 `HH` は 01 から FF までの 16 進数です。

---

注 - この値は `size` に `delete` を指定した場合のみ指定できます。

---

いくつかの `fdisk` タイプの整数と 16 進数での表し方を次の表に示します。

| <i>fdisk</i> タイプ | DDD | HH |
|------------------|-----|----|
| DOSOS12          | 1   | 01 |
| PCIXOS           | 2   | 02 |
| DOSOS16          | 4   | 04 |
| EXTDOS           | 5   | 05 |
| DOSHUGE          | 6   | 06 |
| DOSDATA          | 86  | 56 |
| OTHEROS          | 98  | 62 |
| UNIXOS           | 99  | 63 |

*size*

次のいずれかの値を使用します。

- *DDD* - サイズが *DDD* (M バイト単位) の *fdisk* パーティションを、指定したディスク上に作成します。*DDD* は整数で指定する必要があります。JumpStart プログラムは、この数値を一番近いシリンダの境界に自動的に繰り上げます。値 0 を指定すると、*delete* を指定するのと同じになります。
- *all* - *fdisk* ディスク全体に 1 つのパーティションを作成します(既存の *fdisk* パーティションはすべて削除される)。

---

**x86 のみ** - 値 *all* を指定できるのは、*type* が *solaris* の場合だけです。

---

- *maxfree* - 指定したディスク上の最も大きい連続する空き領域に *fdisk* パーティションを作成します。指定したタイプの *fdisk* パーティションがディスク上にすでに存在する場合、その既存の *fdisk* パーティションが使用されます。新しい *fdisk* パーティションはディスク上に作成されません。

---

**x86 のみ** - ディスクには、空き領域と未使用の *fdisk* パーティションが 1 つ以上存在しなければなりません。領域が確保されない場合、インストールは失敗します。値 *maxfree* を指定できるのは、*type* が *solaris* または *dosprimary* の場合だけです。

---

- *delete* - 指定したタイプのすべての *fdisk* パーティションを指定したディスク上で削除します。

## filesystem プロファイルキーワード (リモートファイルシステムのマウント)(UFS と ZFS)

注 - filesystem キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

```
filesystem server:path server-address mount-point mount-options
```

これらの値を指定して filesystem を使用すると、JumpStart プログラムはインストールされているシステムがそのブート時に自動的にリモートファイルシステムをマウントするように設定します。filesystem は 2 回以上指定できます。

|                       |                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>server</i>         | リモートファイルシステムが存在するサーバー名(後ろにコロンを付ける)。                                                                                                                                                                                                                      |
| <i>path</i>           | リモートファイルシステムのマウントポイント名(例: /usr、/export/home など)。                                                                                                                                                                                                         |
| <i>server-address</i> | サーバーの IP アドレス。 <i>server:path</i> で指定します。ネームサービスがネットワーク上で実行されていない場合、この値 <i>server-address</i> を使用すると、サーバーのホスト名と IP アドレスを /etc/hosts ファイルに反映できます。サーバーの IP アドレスを指定しない場合は、マイナス記号 (-) を指定する必要があります。たとえば、ネットワーク上で実行中のネームサービスがある場合、サーバーの IP アドレスを指定する必要はありません。 |
| <i>mount-point</i>    | リモートファイルシステムをマウントするマウントポイント名。                                                                                                                                                                                                                            |
| <i>mount-options</i>  | 1 つ以上のマウントオプション。 <code>mount(1M)</code> コマンドの <code>-o</code> オプションと同じです。これらのマウントオプションは、指定された <i>mount-point</i> の /etc/vfstab エントリに追加されます。                                                                                                              |

注 - 複数のマウントオプションを指定する場合は、マウントオプションはスペースではなくコンマで区切ってください。例: ro,quota

例 8-10 filesystem プロファイルキーワード

```
filesystem sherlock:/export/home/user2 - /home
```

## filesystem プロファイルキーワード (ローカルファイルシステムの作成)

```
filesystem slice size file-system optional-parameters
```

これらの値を指定して `filesys` を使用すると、JumpStart プログラムによりインストール時にローカルファイルシステムが作成されます。`filesys` は2回以上指定できません。

`slice` 次のいずれかの値を使用します。

`any` JumpStart プロファイルは、ファイルシステムを任意のディスクに配置します。

---

注 - `size` が `existing`、`all`、`free`、`start:size`、または `ignore` の場合は、`any` は指定できません。

---

`cwtxdysz` または `cxdysz` JumpStart プログラムがファイルシステムを配置するディスクスライス。たとえば、`c0t0d0s0` または `c0d0s0`。

`rootdisk.sn` システムのルートディスクの値を含む変数。ルートディスクは、[158 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」](#)に説明されているように、JumpStart プログラムによって決定されます。拡張子 `sn` は、ディスク上の特定のスライスを示します。

---

注-ルートディスクは、JumpStart プログラムによって決定され、OS がインストールされる場所を指定します。rules ファイルでは、プローブキーワード `rootdisk` を使用しますが、このキーワードは JumpStart プロファイルで使用される「`rootdisk`」キーワードとは使い方が異なります。rules ファイルのプローブキーワード `rootdisk` を使って、インストールの場所を設定することはできません。プローブキーワード `rootdisk` は、インストール時のブート元を決定します。表 8-10 を参照してください。

---

*size*

次のいずれかの値を使用します。

- |                 |                                            |
|-----------------|--------------------------------------------|
| <i>num</i>      | ファイルシステムのサイズを <i>num</i> (M バイト単位) に設定します。 |
| <i>existing</i> | 既存のファイルシステムの現在のサイズを使用します。                  |

---

注-*existing* の値を使用すると、別の *mount-point* として *file-system* を指定することによって、既存のスライス名を変更できます。

---

- |             |                                                                                       |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>auto</i> | 選択したソフトウェアに応じて、ファイルシステムのサイズを自動的に決定します。                                                |
| <i>all</i>  | 指定した <i>slice</i> は、そのファイルシステム用にディスク全体を使用します。この値を指定すると、指定したディスク上にほかのファイルシステムは存在できません。 |
| <i>free</i> | ディスク上の残りの未使用領域をファイルシステム用に使用します。                                                       |

---

注 - `file-sys` の値として `free` を使用する場合は、`file-sys` はプロファイルの最後のエントリにする必要があります。

---

|                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>start:size</i>                                                                                                                   | ファイルシステムを明示的にパーティションに分割します。 <i>start</i> はスライスが始まるシリンダであり、 <i>size</i> はそのスライスのシリンダ数です。                                                                                                                                                                      |
| <i>file-system</i>                                                                                                                  | <i>file-system</i> 値はオプションで、 <i>slice</i> に <code>any</code> または <code>cwtxdysz</code> を指定しているときに使用できます。 <i>file-system</i> を指定しないと <code>unnamed</code> がデフォルトで設定されます。 <code>unnamed</code> が設定された場合は、 <i>optional-parameters</i> 値を指定できません。次のいずれかの値を使用します。 |
| <i>mount-point</i>                                                                                                                  | ファイルシステムのマウントポイント名です (たとえば、 <code>/var</code> )。                                                                                                                                                                                                             |
| <i>swap</i>                                                                                                                         | 指定したスライスが <code>swap</code> として使用されません。                                                                                                                                                                                                                      |
| <i>overlap</i>                                                                                                                      | 指定した <i>slice</i> が、ディスク領域を表すものとして定義されます。VTOC 値は <code>V_BACKUP</code> です。デフォルトでは、スライス 2 はディスク全体を表すオーバーラップスライスです。                                                                                                                                            |
| <hr/> <p>注 - <i>size</i> に <code>existing</code>、<code>all</code>、または <i>start:size</i> を指定した場合だけ <i>overlap</i> を指定できます。</p> <hr/> |                                                                                                                                                                                                                                                              |
| <i>unnamed</i>                                                                                                                      | 指定した <i>slice</i> が <code>raw</code> スライスとして定義されるので、スライスにマウントポイント名がありません。 <i>file-system</i> を指定しないと、デフォルトで <code>unnamed</code> が設定されます。                                                                                                                    |
| <i>ignore</i>                                                                                                                       | 指定した <i>slice</i> を使用しないか、JumpStart プログラムで認識しません。このオプションは、インストール時にディスク上の特定のファイルシステムを無視させるために使用できません。JumpStart プログラムは、同じディスク上に同じ名前での新しいファイルシステムを作成します。 <i>ignore</i> は、 <code>partitioning existing</code> を指定したときだけ使用できます。                                   |
| <i>optional-parameters</i>                                                                                                          | 次のいずれかの値を使用します。                                                                                                                                                                                                                                              |

`preserve` 指定したslice上のファイルシステムを保存します。

---

注 - `size` に `existing`、`slice` に `cwtxdysz` を指定した場合だけ `preserve` を指定できます。

---

`mount-options` 1つ以上のマウントオプション。 `mount(1M)` コマンドの `-o` オプションと同じです。これらのマウントオプションは、指定された `mount-point` の `/etc/vfstab` エントリに追加されます。

---

注 - 複数のマウントオプションを指定する場合は、マウントオプションはスペースではなくコンマで区切ってください。例: `ro,quota`

---

## filesys プロファイルキーワード (RAID-1 ボリュームの作成)

`filesys mirror[:name]slice [slice] size file-system optional-parameters`

JumpStart プログラムでは、`filesys mirror` キーワードと一覧にある値を使用して、ミラー化されたファイルシステムの作成に必要な RAID-1 および RAID-0 ボリュームを作成できます。複数のファイルシステムの RAID-1 ボリューム(ミラー)を作成する場合は、`filesys mirror` を繰り返し指定できます。

---

注 - `filesys mirror` キーワードは、初期インストールでのみサポートされます。

---

`name` オプションのキーワードです。RAID-1 ボリューム(ミラー)に名前を付けることができます。ミラー名の先頭の文字は必ず「d」で、その後ろに 0 - 127 の数字が続きます (例: `d100`)。ミラー名を指定しない場合は、JumpStart プログラムによって名前が割り当てられます。ミラー名の指定方法についてのガイドラインは、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の「RAID ボリューム名の要件とガイドライン」を参照してください。

`slice` ディスクスライスを指定します。JumpStart プログラムは、このディスクスライスに、複製するファイルシステムを配置します。スライスの値は、`cwtxdysz` の形式になります (例: `c0t0d0s0`、`c0t0d0s5` など)。JumpStart プログラムは、スライス上に RAID-0 ボリューム(単一スライス連結)を作成し、この連

結をミラー化するための RAID-1 ボリュームを作成します。2 つの RAID-0 ボリュームに、最大 2 つのスライスを指定できます。

*size*

ファイルシステムのサイズを M バイト単位で指定します。

*file-system*

複製するファイルシステムを指定します。JumpStart プログラムは、指定されたスライスから RAID-1 ボリュームを作成し、この RAID-1 ボリュームを指定されたファイルシステムにマウントします。ルート (/)、/usr、/var などのクリティカルファイルシステムに加えて、swap もファイルシステムとして指定できます。

- *file-system* を指定しないと *unnamed* がデフォルトで設定されます。
- *unnamed* が設定された場合は、*optional-parameters* 値を指定できません。次のいずれかの値を使用します。

*mount-point*      ファイルシステムのマウントポイント名を指定します (たとえば、/var)。

*swap*              スワップとして使用するスライスを定義します。

*overlap*           このスライスをディスク領域の表現として定義します。VTOC 値は *V\_BACKUP* です。デフォルトでは、スライス 2 はディスク全体を表すオーバーラップスライスです。*overlap* は、*size* が次のいずれかの値である場合にのみ指定できます。

- *existing*
- *all*
- *start:size*.

*unnamed*          このスライスを raw スライスとして定義します。そのため、このスライスにマウントポイント名はありません。*file-system* を指定しないと、デフォルトで *unnamed* が設定されます。

*ignore*            このスライスが JumpStart プログラムによって使用または認識されないように指定します。このオプションは、インストール時にディスク上の特定のファイルシステムを無視させるために使用できます。JumpStart プログラムは、同じディスク上に同じ名前新しいファイルシステムを

作成します。ignoreは、partitioning  
キーワードと existing 値が指定されている  
場合にのみ使用できます。

*optional-parameters* 1つ以上のマウントオプション。mount(1M) コマンドの -o オプションと同じです。これらのマウントオプションは、指定されたファイルシステムの /etc/vfstab エントリに追加されます。複数のマウントオプションを指定する場合は、マウントオプションはスペースを入れずにコンマで区切ってください (例: ro,quota)。

---

注 - *file-system* 値に unnamed を設定した場合、*optional-parameters* 値は指定できません。設定可能な値については、*file-system* を参照してください。

---

インストール中にミラー化されたファイルシステムを作成する方法の詳細は、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第8章「インストール時の RAID-1 ボリューム (ミラー) の作成 (概要)」を参照してください。

## **forced\_deployment** プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブ差分アーカイブのインストール)

*forced\_deployment*

*forced\_deployment* は、ソフトウェアで想定されているものとは異なるクローンシステムに、フラッシュアーカイブ差分アーカイブを強制的にインストールします。



注意 - *forced\_deployment* を使用すると、クローンシステムを期待される状態にするために、新規ファイルがすべて削除されます。ファイルを削除して良いかどうか判断できない場合には、デフォルトを使用してください。デフォルトでは、新規ファイルが削除されそうになると、インストールが停止します。

## **geo** プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注 - *geo* キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

*geo region*

geo は、システムにインストールする地域ロケールか、あるいはシステムのアップグレード時に追加する地域ロケールを指定します。region は、インストールするロケールを含んだ地理的地域を指定します。region に指定できる値を、次の表に一覧表示します。

| 値         | 説明                                                                                  |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| N_Africa  | 北アフリカ。エジプトを含みます                                                                     |
| C_America | 中央アメリカ。コスタリカ、エルサルバドル、グアテマラ、メキシコ、ニカラグア、パナマを含みます                                      |
| N_America | 北アメリカ。カナダ、アメリカ合衆国を含みます                                                              |
| S_America | 南アメリカ。アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、エクアドル、パラグアイ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラを含みます                    |
| Asia      | アジア。日本、韓国、中華人民共和国、台湾、タイを含みます                                                        |
| Ausi      | オーストラリア。オーストラリア、ニュージーランドを含みます                                                       |
| C_Europe  | 中央ヨーロッパ。オーストリア、チェコ、ドイツ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキア、スイスを含みます                                  |
| E_Europe  | 東ヨーロッパ。アルバニア、ボスニア、ブルガリア、クロアチア、エストニア、ラトビア、リトアニア、マケドニア、ルーマニア、ロシア、セルビア、スロヴェニア、トルコを含みます |
| N_Europe  | 北ヨーロッパ。デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデンを含みます                                        |
| S_Europe  | 南ヨーロッパ。ギリシャ、イタリア、ポルトガル、スペインを含みます                                                    |
| W_Europe  | 西ヨーロッパ。ベルギー、フランス、イギリス、アイルランド、オランダを含みます                                              |
| M_East    | 中近東。イスラエルを含みます                                                                      |

各地域ロケールを構成するコンポーネントロケール値の完全なリストについては、『[国際化対応言語環境の利用ガイド](#)』を参照してください。

注 - システムに追加する必要がある各ロケールごとに、geo キーワードを指定します。

## install\_type プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注- install\_type キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。ZFS インストールでの使用には制限がありません。ZFS インストールでは、initial\_install オプションしか使用できません。

- 使用している UFS ファイルシステムを ZFS ルートプールに移行する、または ZFS ルートプールをアップグレードする場合は、Live Upgrade を使用します。『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 10 章「Live Upgrade と ZFS (概要)」を参照してください。
- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。
- ZFS ルートプールのインストールでの install\_type キーワードの使用方法については、168 ページの「ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart キーワード (リファレンス)」を参照してください。

install\_type type

install\_type は、システムに対し、新しい Oracle Solaris OS を上書きインストールするか、既存の Oracle Solaris OS をアップグレードするか、あるいはフラッシュアーカイブをインストールするかを定義します。

注- install\_type は必須であり、各プロファイル内で最初のプロファイルキーワードとして指定する必要があります。

type には、次のいずれかのオプションを使用する必要があります。

|                 |                                                     |
|-----------------|-----------------------------------------------------|
| initial_install | Oracle Solaris OS の初期インストールの実行を指定します。               |
| upgrade         | Oracle Solaris OS のアップグレードの実行を指定します。                |
| flash_install   | すべてのファイルを上書きするフラッシュアーカイブをインストールすることを指定します。          |
| flash_update    | 指定したファイルだけを上書きするフラッシュアーカイブ差分アーカイブをインストールすることを指定します。 |

注- これらのオプションには、それぞれ固有の関連するプロファイルキーワードのセットがあります。

## layout\_constraint プロファイルキーワード

layout\_constraint slice constraint minimum-size

`layout_constraint` は、アップグレード中に容量の問題があつて容量を再配置する必要がある場合に、ファイルシステムに対して自動配置の制約があることを示します。

| 制約                                                | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|---------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| このキーワードは <code>upgrade</code> オプションとの併用でのみ使用されます。 | <code>layout_constraint</code> は、 <code>upgrade</code> オプションでディスク容量の再配置が必要な場合にのみ使用できます。                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <code>layout_constraint</code> キーワードを指定しない場合      | JumpStart プログラムはディスクを次のように配置します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムは、<code>changeable</code> とマークされます。</li> <li>■ より多くの容量を必要とするファイルシステムと同じディスク上にあるファイルシステム (<code>/etc/vfstab</code> ファイルでマウントされる) も <code>changeable</code> とマークされます。</li> <li>■ 残りのファイルシステムは <code>fixed</code> とマークされます。これは、自動配置がこれらのファイルシステムを変更できないためです。</li> </ul> |
| 1つ以上の <code>layout_constraint</code> キーワードを指定する場合 | JumpStart プログラムはディスクを次のように配置します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムは、<code>changeable</code> とマークされます。</li> <li>■ <code>layout_constraint</code> キーワードを指定したファイルシステムは、指定した制約がマークされます。</li> <li>■ 残りのファイルシステムは、<code>fixed</code> とマークされます。</li> </ul>                                                                                    |
| ファイルシステムが <code>changeable</code> とマークされていない場合    | アップグレードにより多くの容量を必要とするファイルシステムの制約は変更できません (ファイルシステムを <code>changeable</code> とマークする必要があるため)。アップグレードにより多くの容量を必要とするファイルシステムに <code>layout_constraint</code> キーワードを使用すれば、その <code>minimum-size</code> 値を変更できます。                                                                                                                                                                  |
| ファイルシステムがアップグレード用により多くの容量を必要とする場合                 | 自動配置機能がディスク容量の再配置を行う際には、より多くのファイルシステム、特にアップグレード用により多くの容量を必要とするファイルシステムと同じディスク上にあるファイルシステムを、 <code>changeable</code> または <code>movable</code> であると選択します。                                                                                                                                                                                                                      |
| <code>slice</code>                                | 制約を指定するファイルシステムのディスクスライスを指定します。システムのディスクスライスは、 <code>cwtxdysz</code> または <code>cxdysz</code> の形式で指定する必要があります。                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <code>constraint</code>                           | 指定したファイルシステムに対して、次のいずれか1つの制約を選択します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |

|            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| changeable | <p>自動配置機能はファイルシステムをほかの場所に移動して、そのサイズを変更できます。changeable 制約は、<code>/etc/vfstab</code> ファイルによってマウントされたファイルシステムにしか指定できません。 <i>minimum-size</i> 値を指定すれば、ファイルシステムのサイズを変更できます。</p> <p>ファイルシステムを <code>changeable</code> とマークして、 <i>minimum-size</i> 値を指定しないと、そのファイルシステムの最小サイズは、必要な最小サイズより 10% 大きな値に設定されます。たとえば、ファイルシステムの最小サイズが 100M バイトの場合、変更されるサイズは 110M バイトになります。 <i>minimum-size</i> を指定した場合、残りの空き領域 (元のサイズから最小サイズを引いたもの) はほかのファイルシステム用に使用されます。</p> |
| movable    | <p>自動配置機能はファイルシステムを (同じディスクまたは異なるディスク上の) ほかのスライスに移動できますが、サイズは変更しません。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| available  | <p>自動配置機能は、ファイルシステムのすべての領域を使用して領域を割り当て直します。ファイルシステムのすべてのデータは失われます。 <code>available</code> 制約は、<code>/etc/vfstab</code> ファイルでマウントされないファイルシステムだけに指定できます。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| collapse   | <p>自動配置機能は、指定したファイルシステムをその親ファイルシステムに移動して閉じこめます。このオプションは、アップグレードの一部としてシステム上のファイルシステム数を減らすために使用できます。たとえば、システムにファイルシステム <code>/usr</code> と <code>/usr/share</code> が存在する場合、<code>/usr/share</code> ファイルシステムを閉じ込めると、このファイルシステムは <code>/usr</code> (その親) に移動します。 <code>collapse</code> 制約は、<code>/etc/vfstab</code> ファイルでマウントされるファイルシステムにしか指定できません。</p>                                                                                            |

*minimum-size* この値は、自動配置機能がディスク容量を再配置するとき、ファイルシステムに割り当てる最小サイズを指定します *minimum-size* オプションを使用すると、ファイルシステムのサイズを変更できます。まだ割り当てられていない領域が追加される場合、ファイルシステムのサイズは最終的にこの指定した値より大きくなる可能性があります。しかし、指定される値よりサイズが小さくなることはありません。 *minimum-size* 値はオプションです。このオプション値を使用できるのは、ファイルシステムを `changeable` と

マークした場合だけです。最小サイズは、ファイルシステムの既存の内容に必要なサイズより小さい値には設定できません。

例 8-11 layout\_constraint プロファイルキーワード

```
layout_constraint c0t3d0s1 changeable 200
```

```
layout_constraint c0t3d0s4 movable
```

```
layout_constraint c0t3d1s3 available
```

```
layout_constraint c0t2d0s1 collapse
```

## local\_customization プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

local\_customization *local-directory*

クローンシステムにフラッシュアーカイブをインストールする前に、カスタムスクリプトを作成して、クローンシステム上のローカル構成を保存できます。local\_customization キーワードは、これらのスクリプトの格納先ディレクトリを示します。local-directory は、クローンシステム上のスクリプトのパスです。

配備前および配備後スクリプトについては、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: フラッシュアーカイブ (作成とインストール)』の「カスタマイズスクリプトの作成」を参照してください。

## locale プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注 - locale キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

locale *locale-name*

注 - locale は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。

locale は、指定した *locale-name* に対して、どのロケールパッケージをインストール (アップグレードの場合は追加) するかを指定します。ロケール名の値は、\$LANG 環境変数で使用されるのと同じです。使用できるロケール値のリストについては、『国際化対応言語環境の利用ガイド』を参照してください。

locale キーワードを使用する場合は、次の点を考慮してください。

- デフォルトロケールを事前構成している場合は、そのロケールは自動的にインストールされます。English 言語パッケージはデフォルトでインストールされます。
- locale キーワードは、システムに追加するロケールごとに指定できます。

## metadb プロファイルキーワード (状態データベースの複製の作成)

metadb *slice* [*size size-in-blocks*] [*count number-of-replicas*]

metadb キーワードでは、JumpStart インストール時に、Solaris Volume Manager の状態データベースの複製 (mediates) を作成できます。metadb キーワードをプロファイルファイル内で複数回使用して、複数のディスクスライス上に状態データベースの複製を作成することができます。

*slice* JumpStart プログラムが状態データベースの複製を配置するディスクスライスを指定する必要があります。*slice* の値の形式は、*cwtxdysz* です。

*size size-in-blocks* *size* オプションキーワードでは、作成する状態データベースの複製のサイズをブロック単位で指定できます。*size* を指定しないと、JumpStart プログラムは、状態データベースの複製のデフォルトのサイズ、8192 ブロックを使用します。

*count number-of-replicas* プロファイル内にオプションの *count* キーワードを設定することにより、作成する状態データベースの複製の数を指定できます。*count* を指定しないと、JumpStart プログラムは、デフォルトで、状態データベースの複製を3つ作成します。

インストール中に Solaris ボリュームマネージャーの状態データベースの複製を作成する方法の詳細は、『[Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画](#)』の「[状態データベースの複製のガイドラインと要件](#)」を参照してください。

## no\_content\_check プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

no\_content\_check

フラッシュアーカイブ差分アーカイブを使用してクローンシステムをインストールする場合、no\_content\_check キーワードを使用してファイルごとの検証を省略できます。ファイルごとの検証により、クローンシステムがマスターシステムの複製で

あることが保証されます。クローンシステムが元のマスターシステムの複製であることが確実である場合を除き、このキーワードの使用は避けてください。



注意 `-no_content_check` を使用すると、クローンシステムを期待される状態にするために、新規ファイルがすべて削除されます。ファイルを削除して良いかどうか判断できない場合には、デフォルトを使用してください。デフォルトでは、新規ファイルが削除されそうになると、インストールが停止します。

フラッシュアーカイブ差分アーカイブのインストール方法については、83 ページの「[JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする](#)」を参照してください。

## **no\_master\_check** プロファイルキーワード (フラッシュアーカイブのインストール)

`no_master_check`

フラッシュアーカイブ差分アーカイブを使用してクローンシステムをインストールする場合、`no_master_check` キーワードを使用して、クローンシステムが元のマスターシステムから構築されたものかどうかのチェックを省略できます。クローンシステムが元のマスターシステムの複製であることが確実である場合を除き、このキーワードの使用は避けてください。

フラッシュアーカイブ差分アーカイブのインストール方法については、83 ページの「[JumpStart インストールを使用してフラッシュアーカイブをインストールする](#)」を参照してください。

## **num\_clients** プロファイルキーワード

`num_clients client-num`

サーバーがインストールされているときには、各ディスクレスクライアントのルート (/) と `swap` ファイルシステムに領域が割り当てられます。`num_clients` は、サーバーがサポートするディスクレスクライアント数 (`client-num`) を定義します。プロファイルで `num_clients` を指定しないと、デフォルトで5つのディスクレスクライアントが割り当てられます。

注 `-num_clients` は、`system_type` が `server` として指定されているときだけ使用できます。

## iSCSI プロファイルキーワード

iSCSI システムに Oracle Solaris OS をインストールする場合は、iSCSI キーワードを使用します。例 3-16 および例 3-17 を参照してください。

iSCSI の JumpStart インストールに関しては、次の用語が定義されています。

**iSCSI Target IP**      これは、TCP/IP 上で iSCSI を構成するときに必要なです。個々のターゲット IP は、ディスクやテープなどの物理デバイス、または仮想化ターゲットを表します。

**iSCSI Target Port**    iSCSI ターゲットサーバーがイニシエータからのリクエストを待機するポート。デフォルト値は 3260 です。

**iSCSI Target LUN**    LUN (論理ユニット番号) は、物理的な SCSI デバイス (ターゲット) の一部であり、個別にアドレス指定できる (論理的な) SCSI デバイスを表します。iSCSI 環境では、LUN は基本的に番号が付けられたディスクドライブです。イニシエータは、LUN との接続を確立するためにターゲットとネゴシエーションを行います。その結果、SCSI ハードディスクとの接続をエミュレートする iSCSI 接続が確立します。イニシエータは、生の SCSI または IDE ハードドライブの場合と同じ方法で iSCSI LUN を処理します。たとえば、iSCSI システムは NFS または CIFS 環境のようにリモートディレクトリをマウントするのではなく、iSCSI LUN 上のファイルシステムをフォーマットして直接管理します。エンタープライズ配備では通常、LUN は大容量の RAID ディスクアレイのスライスを表し、それらは多くの場合クライアントごとに 1 つずつ割り当てられます。iSCSI では、複数のコンピュータが個々の LUN を共有する際に適用される規則や制限はありません。背後にある単一のファイルシステムへの共有アクセスは、オペレーティングシステムに任されています。

LUN は、静的発見方式を使用してターゲットを発見する場合に必要です。

**iSCSI Target Name**    iSCSI ターゲット名には、RFC 3720 に記載されている iSCSI 修飾名 (IQN) が含まれています。RFC 3721 には名前が数多く記載されています。詳細は、[IETF](#) のサイトを参照してください。たとえば、一般的な iSCSI ターゲット名として `iqn.1986-03.com.sun:02:358ddbfb8-601a-e73a-df56-89` などがあります。名前は次のフィールドで構成されます。

- リテラル IQN
- 命名機関がドメインの所有権を取得した日付 (yyyy-mm)
- 機関のリバースドメイン名

- オプションで、コロン (:) と命名機関が指定したストレージターゲット名。

## package プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注 - package キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。

```
package package-name [add [retrieval-type location]]| delete]
```

package は、初期インストールとアップグレードオプションの両方で使用できます。package キーワードを指定すると、次の処理が可能になります。

- インストールする Oracle Solaris ディストリビューションからソフトウェアグループにパッケージを追加します。
- インストールするディストリビューション以外からソフトウェアグループにパッケージを追加します。
- インストールまたはアップグレードするソフトウェアグループからパッケージを除外 (削除) します。
- フラッシュアーカイブのインストール時に、インストールするディストリビューション以外からパッケージを追加します。

*package-name*                      パッケージ名は *SUNWname* の形式で指定します。パッケージの詳細とその名前を表示するには、インストール済みシステムで `pkginfo -l` コマンドを使用します。

add | delete                      指定されたパッケージを追加または削除します。値 `add` も `delete` も指定しなかった場合、デフォルトで `add` が適用されます。

---

注 - プロファイルに別のパッケージエントリを追加し、場所を省略することで、複数のパッケージを追加できます。場所を指定しない場合、直前のパッケージの場所が、後続のすべてのパッケージに適用されます。

---

[*retrieval-type* *location*]                      インストールする Oracle Solaris ディストリビューションに含まれないパッケージ (複数可) を追加します。 *retrieval-type* と *location* の値は、パッケージの格納場所によって異なります。

以降のセクションでは、*retrieval-type* と *location* に指定可能な値と、*package\_name* キーワードの使用例を示します。

## NFS サーバーに格納されたパッケージ

パッケージが NFS サーバーに格納されている場合、次のいずれかの構文で *package* キーワードを使用します。

```
package package-name add nfs server-name:/path [retry n]
package package-name add nfs://server-name:/path [retry n]
```

|                     |                                                                                                                    |
|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>package-name</i> | パッケージ名は <i>SUNWname</i> の形式で指定します。パッケージの詳細とその名前を表示するには、インストール済みシステムで <code>pkginfo -l</code> コマンドを使用します。           |
| <i>server-name</i>  | パッケージを格納したサーバーの名前を指定します。                                                                                           |
| <i>path</i>         | 指定されたサーバー上のパッケージディレクトリの場所を指定します。パスに <code>\$HOST</code> が含まれる場合、 <code>\$HOST</code> はインストールするホストシステムの名前で置き換えられます。 |
| <i>retry n</i>      | オプションのキーワードです。 <i>n</i> は、インストールプロセスがディレクトリのマウントを試みる回数の最大値です。                                                      |

### 例 8-12 NFS によるパッケージの追加

この例の *package* プロファイルキーワードは、NFS の場所 `nfs://golden/packages/Solaris_10/` から *SUNWnew* パッケージを追加します。マウントに失敗した場合、NFS マウントが 5 回試行されます。

```
package SUNWnew add nfs golden:/packages/Solaris_10 retry 5
```

## HTTP サーバーに格納されたパッケージ

パッケージが HTTP サーバーに格納されている場合、次のいずれかの構文で *package* キーワードを使用します。

```
package package-name add http://server-name[:port] path optional-keywords
package package-name add http server-name[:port] path optional-keywords
```

|                     |                                                                                                          |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>package-name</i> | パッケージ名は <i>SUNWname</i> の形式で指定します。パッケージの詳細とその名前を表示するには、インストール済みシステムで <code>pkginfo -l</code> コマンドを使用します。 |
| <i>server-name</i>  | パッケージを格納したサーバーの名前を指定します。                                                                                 |
| <i>port</i>         | オプションポートを指定します。 <i>port</i> は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。                             |

|                          |                                                                             |
|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
|                          | ポートを指定しなかった場合、デフォルトのHTTPポート番号80が使用されます。                                     |
| <i>path</i>              | 指定されたサーバーから取得するパッケージの場所を指定します。HTTPサーバーを使用する場合、データストリーム形式のパッケージを使用する必要があります。 |
| <i>optional-keywords</i> | HTTPサーバーからパッケージを取得するとき使用するオプションのキーワードを指定します。                                |

表 8-6 HTTP で使用するオプションの package キーワード

| キーワード                  | 値の定義                                                                                                                                                                                                        |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>timeout min</i>     | <p>timeout キーワードには、HTTPサーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断され、再接続のあと、再開されます。timeout 値として0(ゼロ)を指定すると、再接続は行われません。</p> <p>タイムアウトによる再接続が発生すると、パッケージの先頭からインストールし直されます。タイムアウト以前に取得されたデータは破棄されます。</p> |
| <i>proxy host:port</i> | <p>proxy キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しに Oracle Solaris パッケージを取得できます。proxy キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。</p>                                                               |

## 例 8-13 HTTP によるパッケージの追加

この例の package プロファイルキーワードは、HTTP の場所 `http://package.central/10` から、Solaris 10 ディレクトリ内のすべてのパッケージを追加します。データが取得されないまま5分以上経過すると、パッケージデータが再度取得されます。以前のパッケージデータは破棄されます。次のいずれかの形式を使用できます。

```
package SUNWnew add http package.central/Solaris_10 timeout 5
```

```
package SUNWnew add http://package.central/Solaris_10 timeout 5
```

## 例 8-14 プロキシポートを使った HTTP によるパッケージの追加

この例の package プロファイルキーワードは、HTTP の場所 `http://package.central/10` から、Solaris\_10 ディレクトリ内のすべてのパッケージを追加します。proxy キーワードを使用すると、ファイアウォール越しにパッケージを取得できます。

```
package SUNWnew add http://package.central/Solaris_10 proxy webcache.east:8080
```

## ローカルデバイスに格納されたパッケージ

パッケージをファイルシステム指向のランダムアクセスデバイス (フロッピーディスク、DVD-ROM など) に格納している場合は、ローカルデバイスから Oracle Solaris パッケージを取得できます。package キーワードでは次の構文を使用します。

```
package package-name add local_device device path file-system-type
```

|                         |                                                                                                                                                  |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>package-name</i>     | パッケージ名は <code>SUNWname</code> の形式で指定します。パッケージの詳細とその名前を表示するには、インストール済みシステムで <code>pkginfo -l</code> コマンドを使用します。                                   |
| <i>device</i>           | Oracle Solaris パッケージが格納されているドライブの名前を指定します。デバイス名が正規のパスである場合は、デバイスは直接マウントされます。正規のパスでないデバイス名を指定すると、インストールユーティリティーはパスに <code>/dev/dsk/</code> を加えます。 |
| <i>path</i>             | Oracle Solaris パッケージのパスを指定します。指定したデバイス上のルート ( <code>/</code> ) ファイルシステムからの相対パスで指定する必要があります。                                                      |
| <i>file-system-type</i> | デバイス上のファイルシステムのタイプを指定します。ファイルシステムのタイプを指定しない場合、インストールユーティリティーは、UFS ファイルシステムのマウントを試みます。UFS のマウントに失敗すると、インストールユーティリティーは HSFS ファイルシステムのマウントを試みます。    |

### 例 8-15 UFS ファイルシステムのローカルデバイスによるパッケージの追加

この例の package プロファイルキーワードは、ローカルデバイス `c0t6d0s0` の `/Solaris_10/Product` ディレクトリから `SUNWnew` パッケージを追加します。これは UFS ファイルシステムです。

```
package SUNWnew add local_device c0t6d0s0 /Solaris_10/Product ufs
```

### 例 8-16 HSFS ファイルシステムのローカルデバイスによるパッケージの追加

この例の package プロファイルキーワードは、ローカルデバイス `c0t6d0s0` の `/Solaris_10/Product` ディレクトリから `SUNWnew` パッケージを追加します。これは HSFS ファイルシステムです。

```
package SUNWnew add local_device c0t6d0s0 /Solaris_10/Product hsfs
```

## ローカルファイルに格納されたパッケージ

システムをブートしたミニルートからパッケージをインストールできます。JumpStart インストールを実行するときに、DVD、CD、または NFS ベースのミニルートからシステムをブートします。このミニルートからインストールソフト

ウェアがロードされ、実行されます。したがって、DVD、CDまたはNFSベースのミニルートに格納したパッケージは、ローカルファイルとしてアクセスできません。package キーワードでは次の構文を使用します。

```
package package-name add local_file path
```

**package-name** パッケージ名は *SUNWname* の形式で指定します。パッケージの詳細とその名前を表示するには、インストール済みシステムで `pkginfo -l` コマンドを使用します。

**path** パッケージの位置を指定します。このパスは、システムを Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間、システムにローカルファイルとしてアクセスできるものでなければなりません。Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間は、システムは `/net` にアクセスできません。

例 8-17 ローカルファイルによるパッケージの追加

この例の package プロファイルキーワードは、`/Solaris_10/Product` ディレクトリから `SUNWnew` パッケージを追加します。

```
package SUNWnew add local_file /Solaris_10/Product
```

## package キーワードを使用する際の制約

package キーワードを使用する際には、次の制約があります。

- いくつかのパッケージは必須であり、削除できないものもあります。
- 各国語対応パッケージを個々に追加または削除するとき、package プロファイルキーワードは使用できません。各国語対応パッケージを追加するには、locale プロファイルキーワードを使用します。
- FTP サーバーやローカルバックアップ (テープなど) からパッケージを取得することはできません。
- インストールする Oracle Solaris ディストリビューション内のパッケージを、別の場所から追加することはできません。Oracle Solaris ディストリビューション内のパッケージを指定した場合、これに続けて別の場所を指定することはできません。これは、インストール後のシステムとの整合性を確保するためです。
- ユーザーの介入なしでインストールするには、`pkgadd` コマンドを使ってインストール可能なパッケージでなければなりません。ソフトウェアグループのパッケージと、別の場所にあるパッケージとは、同じ `admin` ファイルを使ってインストールする必要があります。
  - *retrieval-type* が HTTP の場合、パッケージはストリーム形式でなければなりません。

- *retrieval-type* が NFS サーバー、ローカルデバイス、またはローカルファイルの場合、パッケージは標準パッケージフォーマットに従い、インストールするパッケージと同じ名前のディレクトリ名を指定する必要があります。
- 別の場所からパッケージを追加する場合で、パッケージが現在インストールされていない別のパッケージに依存している場合、このパッケージはインストールされません。インストールログファイルまたはアップグレードログファイルにエラーメッセージが記録されます。
- フラッシュアーカイブを使ってパッケージをインストールする場合は、次のガイドラインに従います。
  - インストールされたすべてのパッケージとアーカイブに互換性がなければなりません。
  - パッケージがアーカイブ内にある場合、JumpStart は既存のパッケージを上書きします。

## package キーワードを使用したアップグレード処理

アップグレードに *package* を使用すると、JumpStart プログラムが次の処理を行います。

- すでにシステム上にあるすべてのパッケージが自動的にアップグレードされます。
- *package-name add* を指定したが、*package-name* がシステムにインストールされていなかった場合は、そのパッケージがインストールされます。
- *package-name delete* を指定したが、*package-name* がシステムにインストールされていた場合、アップグレードが開始される前にそのパッケージは削除されます。
- *package-name delete* を指定したが、*package-name* がシステムにインストールされていない場合、インストールするように指定したクラスタの一部にそのパッケージが含まれていても、パッケージはインストールされません。

## partitioning プロファイルキーワード

*partitioning type*

*partitioning* は、インストール時にファイルシステム用にディスクをスライスに分割する方法を定義します。

プロファイルで *partitioning* を指定しないと、デフォルトで *default* タイプのパーティションが使用されます。

*type* 次のいずれかの値を使用します。

|                |                                                                                                        |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>default</i> | JumpStart プログラムはディスクを選択して、指定したソフトウェアをインストールするファイルシステムを作成します。ただし、 <i>filesys</i> キーワードで指定したファイルシステムを除きま |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|

す。rootdiskが最初に選択され、指定したソフトウェアがrootdiskに収まらない場合は、さらに別のディスクが使用されます。

**existing** JumpStartプログラムは、システムのディスク上にある既存のファイルシステムを使用します。/, /usr、/usr/openwin、/opt、/varを除く、すべてのファイルシステムが保存されます。JumpStartプログラムは、ファイルシステムのスーパーブロックにある最後のマウントポイントフィールドを使用して、スライスがどのファイルシステムのマウントポイントを表しているかを判断します。

---

注 - filesys プロファイルキーワードと partitioning existing を組み合わせる場合、size は existing である必要があります。

---

**explicit** JumpStartプログラムは、ディスクを使用し、filesys キーワードで指定されるファイルシステムを作成します。filesys キーワードでルート (/) ファイルシステムだけを指定した場合、すべての Oracle Solaris ソフトウェアがルート (/) ファイルシステムにインストールされます。

---

注 - explicit プロファイル値を使用するときには、filesys プロファイルキーワードを使用して、使用するディスクと作成するファイルシステムを指定してください。

---

## patch プロファイルキーワード

patch *patch-ID-list* | *patch-file patch-location optional-keywords*]

**patch-ID-list** インストールするパッチ ID 番号を指定します。このリストは、コンマで区切られた Oracle Solaris パッチ ID で構成するようにしてください。パッチは、リスト内に指定された順にインストールされます。コンマのあとに空白文字を入力しないでください。たとえば、112467-01,112765-02 のように指定します。

**patch-file** *patch-location* 内のパッチのリストが格納されたファイルです。パッチは、ファイル内に指定された順にインストールされます。

**patch-location** パッチのある場所を指定します。次の場所が許可されます。

- NFS サーバー
- HTTP サーバー
- ローカルデバイス

- ローカルファイル

*optional-keywords* オプションのキーワードです。パッチが格納されている場所によって異なります。次のセクションでは、指定可能な場所とオプションのキーワードについて説明します。

## NFS サーバーに格納されたパッチ

パッチが NFS サーバーに格納されている場合、次のいずれかのオプションで `patch` キーワードを使用します。

```
patch patch-ID-list | patch-file nfs server-name:/patch-directory [retry n]
patch patch-ID-list | patch-file nfs://server-name/patch-director [retry n]
```

*patch-ID-list* インストールするパッチ ID 番号を指定します。このリストは、コンマで区切られた Oracle Solaris パッチ ID のリストであるべきです。パッチは、リスト内に指定された順にインストールされません。

*patch-file* *patch-location* 内のパッチのリストが格納されたファイルです。パッチは、ファイル内に指定された順にインストールされません。

*server-name* パッチを格納したサーバーの名前を指定します。

*patch-directory* 指定されたサーバー上のパッチディレクトリの場所を指定します。標準形式のパッチを使用する必要があります。

*retry n* オプションのキーワード。*n* は、インストールユーティリティーがディレクトリのマウントを試みる回数の最大値です。

### 例 8-18 NFS を使った順序付きリストによるパッチの追加

この例の `patch` プロファイルキーワードは、`patch` ファイルに記載されたすべてのパッチを NFS パッチディレクトリ `nfs://patch_master/Solaris/v10/patches` から追加します。パッチは、`patch` 内の順番でインストールされます。マウントに失敗した場合、NFS マウントが 5 回試行されます。

```
patch patch_file nfs://patch_master/Solaris/v10/patches retry 5
```

### 例 8-19 NFS によるパッチの追加

この例の `patch` プロファイルキーワードは、サーバー `patch_master` のパッチディレクトリ `/Solaris/v10/patches` からパッチ 112467-01 と 112765-02 を追加します。

```
patch 112467-01,112765-02 nfs patch_master:/Solaris/v10/patches
```

## HTTP サーバーに格納されたパッチ

パッチが HTTP サーバーに格納されている場合、次のオプションで `patch` キーワードを使用します。

|                                |                                                                                                                                                                              |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>patch</code>             | <code>patch-ID-list</code>   <code>patch-file</code> <code>http://server-name</code> [ <code>:port</code> ] <code>patch-directory</code> <code>optional-http-keywords</code> |
| <code>patch</code>             | <code>patch-ID-list</code>   <code>patch-file</code> <code>http server-name</code> [ <code>:port</code> ] <code>patch-directory</code> <code>optional-http-keywords</code>   |
| <code>patch-ID-list</code>     | インストールするパッチ ID 番号を指定します。このリストは、コンマで区切られた Oracle Solaris パッチ ID で構成するようにしてください。パッチは、リスト内に指定された順にインストールされます。コンマのあとに空白文字を入力しないでください。たとえば、112467-01,112765-02 のように指定します。         |
| <code>patch-file</code>        | <code>patch-location</code> 内のパッチのリストが格納されたファイルです。パッチは、ファイル内に指定された順にインストールされます。                                                                                              |
| <code>server-name</code>       | パッチを格納したサーバーの名前を指定します。                                                                                                                                                       |
| <code>port</code>              | オプションポートを指定します。 <code>port</code> は、ポート番号でも、実行時に決定されるポート番号を持つ TCP サービスの名前でもかまいません。<br><br>ポートを指定しなかった場合、デフォルトの HTTP ポート番号 80 が使用されます。                                        |
| <code>patch-directory</code>   | 指定されたサーバーから取得するパッチディレクトリの場所を指定します。HTTP サーバーを使用する場合、パッチは JAR 形式でなければなりません。                                                                                                    |
| <code>optional-keywords</code> | HTTP サーバーからパッチを取得するとき使用するオプションのキーワードを指定します。                                                                                                                                  |

表 8-7 HTTP で使用するオプションの `patch` キーワード

| キーワード                    | 値の定義                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>timeout min</code> | <code>timeout</code> キーワードには、HTTP サーバーからのデータ受信を待機する最長の時間を分単位で指定できます。この時間に達すると、接続が切断され、再接続のあと、再開されます。 <code>timeout</code> 値として 0 (ゼロ) を指定すると、再接続は行われません。<br><br>タイムアウトによる再接続が発生すると、パッケージの先頭からインストールし直されます。タイムアウト以前に取得されたデータは破棄されます。 |

表 8-7 HTTP で使用するオプションの patch キーワード (続き)

| キーワード                        | 値の定義                                                                                                                                   |
|------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>proxy host:port</code> | proxy キーワードを使用して、プロキシホストとプロキシポートを指定できます。プロキシホストを使用すると、ファイアウォール越しに Oracle Solaris パッケージを取得できます。proxy キーワードを指定する場合は、プロキシポートを指定する必要があります。 |

#### 例 8-20 HTTP を使った順序付きリストによるパッチの追加

この例の patch プロファイルキーワードは、patch\_file ファイルに記載されたすべてのパッチを HTTP の場所 `http://patch.central/Solaris/v10/patches` から追加します。パッチは、patch ファイルに指定された順でインストールされます。データが取得されないまま 5 分以上経過すると、パッチデータが再度取得されます。以前のパッチデータは破棄されます。

```
patch patch_file http://patch.central/Solaris/v10/patches timeout 5
```

#### 例 8-21 HTTP によるパッチの追加

この例の patch プロファイルキーワードエントリは、パッチの場所 `http://patch_master/Solaris/v10/patches` からパッチ 112467-01 と 112765-02 を追加します。

```
patch 112467-01,112765-02 http://patch.central/Solaris/v10/patches
```

### ローカルデバイスに格納されたパッチ

パッケージをファイルシステム指向のランダムアクセスデバイス (フロッピーディスク、DVD-ROM など) に格納している場合は、ローカルデバイスから Oracle Solaris パッケージを取得できます。patch キーワードでは次の構文を使用します。

```
patch patch-ID-list | patch-file local_device \
device path file-system-type
```

**patch-ID-list** インストールするパッチ ID 番号を指定します。このリストは、コンマで区切られた Oracle Solaris パッチ ID で構成するようにしてください。パッチは、リスト内に指定された順にインストールされます。コンマのあとに空白文字を入力しないでください。たとえば、112467-01,112765-02 のように指定します。

**patch-file** *patch-location* 内のパッチのリストが格納されたファイルです。パッチは、ファイル内に指定された順にインストールされます。

**device** Oracle Solaris パッケージが格納されているドライブの名前を指定します。デバイス名が正規のパスである場合は、デバイスは直接マウントされます。正規のパスでないデバイス名を指定すると、インストールユーティリティーはパスに `/dev/dsk/` を加えます。

|                         |                                                                                                                                               |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>path</i>             | Oracle Solaris パッチのパスを指定します。指定したデバイス上のルート (/) ファイルシステムからの相対パスで指定する必要があります。                                                                    |
| <i>file-system-type</i> | デバイス上のファイルシステムのタイプを指定します。ファイルシステムのタイプを指定しない場合、インストールユーティリティーは、UFS ファイルシステムのマウントを試みます。UFS のマウントに失敗すると、インストールユーティリティーは HSFS ファイルシステムのマウントを試みます。 |

#### 例 8-22 ローカルデバイスを使った順序付きリストによるパッチの追加

この例の `patch` プロファイルキーワードは、`patch_file` ファイルに記載されているすべてのパッチをローカルデバイス `c0t6d0s0` の `/Solaris_10/patches` ディレクトリから追加します。パッチのインストールの順番は、`patch` ファイルによって決定されます。

```
patch patch_file c0t6d0s0 /Solaris_10/patches
```

#### 例 8-23 ローカルデバイスによるパッチの追加

この例の `patch` プロファイルキーワードは、ローカルデバイス `c0t6d0s0` のパッチディレクトリ `/Solaris_10/patches` からパッチ `112467-01` と `112765-02` を追加します。

```
patch 112467-01,112765-02 local_device c0t6d0s0 /Solaris_10/patches
```

## ローカルファイルに格納されたパッチ

システムをブートしたミニルートからパッチをインストールできます。JumpStart インストールを実行するときに、DVD、CD、または NFS ベースのミニルートからシステムをブートします。このミニルートからインストールソフトウェアがロードされ、実行されます。したがって、DVD、CD または NFS ベースのミニルートに格納したパッチは、ローカルファイルとしてアクセスできます。`patch` キーワードでは次の構文を使用します。

```
patch patch-ID-list | patch-file local_file patch-directory
```

|                      |                                                                                                                                                                                    |
|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>patch-ID-list</i> | インストールするパッチ ID 番号を指定します。このリストは、コンマで区切られた Oracle Solaris パッチ ID で構成するようにしてください。パッチは、リスト内に指定された順にインストールされます。コンマのあとに空白文字を入力しないでください。たとえば、 <code>112467-01,112765-02</code> のように指定します。 |
| <i>patch-file</i>    | <i>patch-location</i> 内のパッチのリストが格納されたファイルです。パッチは、ファイル内に指定された順にインストールされます。                                                                                                          |

*patch-directory* パッチディレクトリの場所を指定します。システムを Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間、システムからローカルファイルとしてアクセスできるパッチディレクトリでなければなりません。Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD または Oracle Solaris Operating System DVD からブートしている間は、システムは /net にアクセスできません。

例 8-24 ローカルファイルを使った順序付きリストによるパッチの追加

この例の *patch* プロファイルキーワードは、*patch\_file* ファイルに記載されているすべてのパッチを /Solaris\_10/patches ディレクトリから追加します。パッチのインストールの順番は、*patch* ファイルによって決定されます。

```
patch patch_cal_file local_file /Solaris_10/patches
```

例 8-25 ローカルファイルによるパッチの追加

この例の *patch* プロファイルキーワードは、パッチディレクトリ /Solaris\_10/patches からパッチ 112467-01 と 112765-02 を追加します。

```
patch 112467-01,112765-02 local_file /Solaris_10/patches
```

## patch キーワードを使用する際の制約

*patch* キーワードを使用する際には、次の制約があります。

- FTP の場所やローカルバックアップ(テープなど)からパッチを取得することはありません。
- 署名付きパッチは追加できません。
- *patchadd* コマンドでインストール可能なパッチでなければなりません。
- 現在インストールされていないパッチに依存しているパッチは、インストールされません。インストールログファイルまたはアップグレードログファイルにエラーメッセージが記録されます。
- パッチを正常にインストールするためには、正しい順番でインストールする必要があります。

## pool プロファイルキーワード (ZFS のみ)

*pool* キーワードは、ZFS ルートプールのインストールを定義します。プールは、*cluster* キーワードで指定したソフトウェアグループと共にインストールされます。新規ルートプールの作成には、*poolsize*、*swapsize*、*dumpsized*、および *vdevlist* オプションが必須です。

ZFS ルートプールで使用できる `pool` キーワードやその他のキーワードの詳細な説明については、170 ページの「[pool プロファイルキーワード \(ZFS のみ\)](#)」を参照してください。

## root\_device プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

注 - `root_device` キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。ZFS インストールの場合、このキーワードの使用は単一システムに制限されています。

- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、[表 8-2](#) を参照してください。
- ZFS ルートプールのインストールでの `root_device` キーワードの使用方法については、168 ページの「[ZFS ルート \(/\) ファイルシステムの JumpStart キーワード \(リファレンス\)](#)」を参照してください。

`root_device slice`

`root_device` は、システムのルートディスクを指定します。158 ページの「[システムのルートディスクを決定する方法](#)」に追加情報があります。

注 - ルートディスクは、JumpStart プログラムによって決定され、OS がインストールされる場所を指定します。rules ファイルでは、プローブキーワード「`rootdisk`」を使用しますが、このキーワードは JumpStart プロファイルで使用される `rootdisk` キーワードとは使い方が異なります。rules ファイルのプローブキーワード「`rootdisk`」を使って、インストールの場所を設定することはできません。プローブキーワード `rootdisk` は、インストール時のブート元を決定します。[表 8-10](#) を参照してください。

システムをアップグレードする場合、`root_device` は指定されるルート (/) ファイルシステムおよびその `/etc/vfstab` ファイルでマウントされるファイルシステムがアップグレードされることを示します。システム上で複数のルート (/) ファイルシステムがアップグレードできる場合は、`root_device` を指定する必要があります。`slice` は、`cwtxdysz` または `cxdysz` の形式で指定してください。

`root_device` キーワードを使用する場合は、次の点を考慮してください。

- 1 つだけのディスクを持つシステムで `root_device` を指定する場合、`root_device` とディスクが一致する必要があります。また、ルート (/) ファイルシステムを指定する任意の `filesys` キーワードは、`root_device` と一致する必要があります。

- RAID-1 ボリューム (ミラー) をアップグレードする場合、`root_device` に指定する値はミラーの一方である必要があります。他方のミラーは自動的にアップグレードされます。

例 8-26 `root_device` プロファイルキーワード

```
root_device c0t0d0s2
```

## システムのルートディスクを決定する方法

システムのルートディスクは、ルート (/) ファイルシステムを含むシステム上のディスクです。プロファイル内では、JumpStart プログラムがシステムのルートディスクを設定するディスク名の代わりに、この `rootdisk` 変数を使用できます。次の表では、JumpStart プログラムがインストール用にシステムのルートディスクを決定する方法を説明します。

注- システムのルートディスクサイズが確認されるのは、初期インストール時だけです。アップグレードの場合、システムのルートディスクは変更できません。

表 8-8 JumpStart がシステムのルートディスクを決定する方法 (初期インストールのみ)

| 段階 | 動作                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | プロファイル内で <code>root_device</code> キーワードが指定されている場合、JumpStart プログラムは <code>rootdisk</code> をルートデバイスに設定します。                                                                                                                                                                                          |
| 2  | プロファイル内で、 <code>rootdisk</code> が設定されていなくて、 <code>boot_device</code> キーワードが指定されている場合、JumpStart プログラムは <code>rootdisk</code> をブートデバイスに設定します。                                                                                                                                                       |
| 3  | プロファイル内で <code>rootdisk</code> が設定されていなくて、 <code>filesys cwtxdysz size /</code> エントリが指定されている場合、JumpStart プログラムは <code>rootdisk</code> をエントリで指定されたディスクに設定します。                                                                                                                                      |
| 4  | プロファイル内で <code>rootdisk</code> が設定されておらず、 <code>rootdisk.sn</code> エントリが指定されている場合、JumpStart プログラムは、システムのディスクから、カーネルのプロープの順番で、指定されたスライス上の既存のルートファイルシステムを検索します。ディスクが見つかった場合、JumpStart プログラムは見つかったディスクに <code>rootdisk</code> を設定します。                                                                |
| 5  | プロファイル内で、 <code>rootdisk</code> が設定されていなくて、 <code>partitioning existing</code> が指定されている場合、JumpStart プログラムはシステムのディスクで、(カーネルのプロープ順で) 既存のルートファイルシステムを検索します。ルートファイルシステムが見つからなかった場合、あるいは複数のルートファイルシステムが見つかった場合は、エラーが発生します。ルートファイルシステムが見つかった場合、JumpStart プログラムは見つかったディスクに <code>rootdisk</code> を設定します。 |
| 6  | プロファイル内で <code>rootdisk</code> が設定されていない場合、JumpStart プログラムは、ルート (/) ファイルシステムがインストールされるディスクに <code>rootdisk</code> を設定します。                                                                                                                                                                         |

## system\_type プロファイルキーワード

system\_type *type-switch*

system\_type は、Oracle Solaris OS のインストール先のシステムのタイプを定義します。

*type-switch* は、オプション `standalone` または `server` を表します。このオプションは、Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするシステムのタイプを指定するために使用します。system\_type をプロファイルに指定しないと、デフォルトによって `standalone` が使用されます。

## usedisk プロファイルキーワード (UFS と ZFS)

usedisk キーワードは、UFS ファイルシステム、ZFS ルートプールのどちらのインストールにも使用できます。このキーワードの使用方法は、UFS のインストールと ZFS のインストールで同じです。

- UFS または ZFS のインストールで使用できるキーワードの詳細な一覧については、表 8-2 を参照してください。
- ZFS インストールの実行の詳細については、第 9 章「JumpStart による ZFS ルートプールのインストール」を参照してください。

usedisk *disk-name* ...

このキーワードの各ディスクインスタンスには、個別の行項目が必要です。次の例に示すように、使用する複数のディスクを個別の行で指定します。

```
usedisk c0t0d0
 usedisk c0t1d0
 usedisk c0t2d0
```

partitioning default を指定すると、デフォルトではシステム上のすべての使用可能ディスクが使用されます。usedisk プロファイルキーワードには、JumpStart プログラムに使用させる 1 つ以上のディスクを指定します。disk-name は、cxytzy または cydz 形式 (たとえば c0t0d0 または c0d0s0) で指定する必要があります。

プロファイル内に usedisk を指定した場合、JumpStart プログラムは、usedisk キーワードの後ろに指定されたディスクだけを使用します。

---

注 - 同じプロファイルに usedisk キーワードと dontuse キーワードを同時に指定することはできません。

---

## JumpStart の環境変数

開始および終了スクリプトには、環境変数を使用できます。たとえば、開始スクリプトは、ディスクサイズ(SI\_DISKSIZE)を抽出し、実際のディスクサイズに基づいてシステムに特定のパッケージをインストールするかどうかを決定できます。

システムについて収集された情報は、これらの環境変数に格納されます。これらの変数は、通常、rules ファイルに使用するルールキーワードと値によって設定するかどうかが決まります。

たとえば、すでにシステムにインストールされているオペレーティングシステムに関する情報は、installed キーワードを使用した後にのみ、SI\_INSTALLED から入手できます。

次の表では、これらの変数とその値について説明します。

表 8-9 インストール環境変数

| 環境変数           | 値                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SI_ARCH        | インストールクライアントのハードウェアアーキテクチャー。SI_ARCH 変数は、rules ファイルで arch キーワードを使用する場合に設定されます。                                                                                                                                                             |
| SI_BEGIN       | 開始スクリプトを使用している場合はその名前。                                                                                                                                                                                                                    |
| SI_CLASS       | インストールクライアントをインストールするために使用されるプロファイルの名前。                                                                                                                                                                                                   |
| SI_DISKLIST    | コンマで区切られた、インストールクライアント上のディスク名のリスト。SI_DISKLIST 変数は、rules ファイルで disksize キーワードを使用して照合する場合に設定されます。SI_DISKLIST および SI_NUMDISKS 変数は、rootdisk に使用する物理ディスクを決定するために使用します。rootdisk については、 <a href="#">158 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」</a> を参照してください。 |
| SI_DISKSIZE    | コンマで区切られた、インストールクライアント上のディスクサイズのリスト。SI_DISKSIZE 変数は、rules ファイルで disksize キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                         |
| SI_DOMAINNAME  | ドメイン名。SI_DOMAINNAME 変数は、rules ファイルで domainname キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                                   |
| SI_FINISH      | 終了スクリプトを使用する場合はその名前。                                                                                                                                                                                                                      |
| SI_HOSTADDRESS | インストールクライアントの IP アドレス。                                                                                                                                                                                                                    |
| SI_HOSTNAME    | インストールクライアントのホスト名。SI_HOSTNAME 変数は、rules ファイルで hostname キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                           |

表 8-9 インストール環境変数 (続き)

| 環境変数            | 値                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SI_INSTALLED    | 特定のオペレーティングシステムが入っているディスクのデバイス名 (Oracle Solaris、System V など)。SI_INSTALLED 変数は、rules ファイルで installed キーワードを使用して照合する場合に設定されます。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。                                                                                                                        |
| SI_INST_OS      | オペレーティングシステムの名前。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。                                                                                                                                                                                                                                    |
| SI_INST_VER     | オペレーティングシステムのバージョン。SI_INST_OS と SI_INST_VER は、SI_INSTALLED の値を決定するために使用します。                                                                                                                                                                                                                                 |
| SI_KARCH        | インストールクライアントのカーネルアーキテクチャー。SI_KARCH 変数は、rules ファイルで karch キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                                                                                           |
| SI_MEMSIZE      | インストールクライアントの物理メモリーの量。SI_MEMSIZE 変数は、rules ファイルで memsize キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                                                                                           |
| SI_MODEL        | インストールクライアントのモデル名。SI_MODEL 変数は、rules ファイルで model キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                                                                                                   |
| SI_NETWORK      | インストールクライアントのネットワーク番号。SI_NETWORK 変数は、rules ファイルで network キーワードを使用して照合する場合に設定されます。                                                                                                                                                                                                                           |
| SI_NUMDISKS     | インストールクライアントのディスク数。SI_NUMDISKS 変数は、rules ファイルで disksize キーワードを使用して照合する場合に設定されます。SI_NUMDISKS および SI_DISKLIST 変数は、rootdisk に使用する物理ディスクを決定するために使用します。rootdisk については、158 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」を参照してください。                                                                                                    |
| SI_OSNAME       | Oracle Solaris ソフトウェアイメージのオペレーティングシステムリリース。SI_OSNAME 変数は、たとえば、Oracle Solaris Operating System DVD または Oracle Solaris SOFTWARE - 1 CD イメージ上のオペレーティングシステムのバージョンに基づいたシステムに Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする場合にスクリプト内で指定できます。                                                                                     |
| SI_ROOTDISK     | 論理名 rootdisk によって表されるディスクのデバイス名。SI_ROOTDISK 変数は、rules ファイルで disksize または installed キーワードを rootdisk に設定した場合に設定されます。SI_ROOTDISK 変数は、インストール時のブートデバイスを設定します。<br><br>注-rules ファイルのプロープキーワード rootdisk を使って、インストールの場所を設定することはできません。JumpStart プロファイルで設定される rootdisk 変数については、158 ページの「システムのルートディスクを決定する方法」を参照してください。 |
| SI_ROOTDISKSIZE | 論理名 rootdisk によって表されるディスクのサイズ。SI_ROOTDISKSIZE 変数は、rules ファイルで disksize または installed キーワードを rootdisk に設定した場合に設定されます。                                                                                                                                                                                        |

表 8-9 インストール環境変数 (続き)

| 環境変数         | 値                                                                                       |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| SI_TOTALDISK | インストールクライアント上のディスク容量の合計。SI_TOTALDISK 変数は、rules ファイルで totaldisk キーワードを使用して照合する場合に設定されます。 |

## プローブキーワードと値

次の表では、ルールキーワードと対応するプローブキーワードについて説明します。

注- プローブキーワードは、rules ファイルの最初、またはその近くに指定してください。

表 8-10 プローブキーワードの説明

| ルールキーワード    | 対応するプローブキーワード | プローブキーワードの説明                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|-------------|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| any         | なし            |                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| arch        | arch          | カーネルアーキテクチャー (i386 または SPARC) を判断して SI_ARCH を設定します。                                                                                                                                                                                                                             |
| disksize    | disks         | システムのディスクサイズ (M バイト) をカーネルプローブ順 (c0t3d0s0、c0t3d0s1、c0t4d0s0) で返します。disksize は、SI_DISKLIST、SI_DISKSIZE、SI_NUMDISKS、および SI_TOTALDISK を設定します。                                                                                                                                      |
| domainname  | domainname    | システムの NIS または NIS+ ドメイン名、あるいは空を返して、SI_DOMAINNAME を設定します。domainname キーワードは、domainname(1M) の出力を返します。                                                                                                                                                                              |
| hostaddress | hostaddress   | システムの IP アドレス (lo0 ではない ifconfig(1m) -a の出力にリストされた最初のアドレス) を返して、SI_HOSTADDRESS を設定します。                                                                                                                                                                                          |
| hostname    | hostname      | システムのホスト名 (uname(1) -n からの出力) を返して、SI_HOSTNAME を設定します。                                                                                                                                                                                                                          |
| installed   | installed     | システムにインストールされた Oracle Solaris OS のバージョン名を返して、SI_ROOTDISK と SI_INSTALLED を設定します。<br><br>Oracle Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンは SystemV になります。                                                                                                                  |
| karch       | karch         | システムのプラットフォームグループ (i86pc や sun4u など) を返し、SI_KARCH を設定します。プラットフォーム名のリストについては、『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』 ( <a href="http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html">http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html</a> ) を参照してください。 |

表 8-10 プローブキーワードの説明 (続き)

| ルールキーワード  | 対応するプローブキーワード | プローブキーワードの説明                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| memsize   | memsize       | システム上の物理メモリのサイズ(Mバイト)を返して、SI_MEMSIZEを設定します。                                                                                                                                                                                                            |
| model     | model         | システムのプラットフォーム名を返して、SI_MODELを設定します。プラットフォーム名のリストについては、『Oracle Solaris Sun ハードウェアマニュアル』( <a href="http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html">http://www.oracle.com/technetwork/indexes/documentation/index.html</a> )を参照してください。 |
| network   | network       | システムのネットワーク番号を返します。これはJumpStartプログラムがシステムのIPアドレスとサブネットマスクの論理和をとって判断します。システムのIPアドレスとサブネットマスクは、lo0ではないifconfig(1m) -aの出力にリストされた最初のアドレスから抽出されます。networkキーワードはSI_NETWORKも設定します。                                                                            |
| osname    | osname        | CDで検出されたOracle Solaris OSのバージョンおよびオペレーティングシステム名を返して、SI_OSNAMEを設定します。<br><br>Oracle Solaris リリースは検出されたが、バージョンを判断できないという場合は、返されるバージョンはSystemVになります。                                                                                                      |
|           | rootdisk      | システムのルートディスクの名前とサイズ(Mバイト)を返して、SI_ROOTDISKを設定します。                                                                                                                                                                                                       |
| totaldisk | totaldisk     | システムのディスク容量の合計(Mバイト)を返して、SI_TOTALDISKを設定します。ディスク容量の合計には、システムに接続された操作可能なディスクすべてが含まれます。                                                                                                                                                                  |



# JumpStart による ZFS ルートプールのインストール

---

この章では、ZFS ルートプール用の JumpStart インストールを実行するために必要な情報を提供します。次のセクションでは、計画情報、プロファイルの例、およびプロファイルキーワードについて説明しています。

- 166 ページの「ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart インストール (概要と計画)」
- 171 ページの「ZFS ルートプール用の JumpStart プロファイルの例」
- 168 ページの「ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart キーワード (リファレンス)」

## Solaris 10 10/09 リリースの新機能

**Solaris 10 10/09** リリース以降では、JumpStart プロファイルを設定して、ZFS ルートプールのフラッシュアーカイブを特定できます。

フラッシュアーカイブは、UFS ルートファイルシステムまたは ZFS ルートファイルシステムを実行しているシステムで作成できます。ZFS ルートプールのフラッシュアーカイブには、スワップボリュームとダンプボリュームおよび任意の除外されたデータセットを除く、プール階層全体が含まれます。スワップボリュームとダンプボリュームは、フラッシュアーカイブのインストール時に作成されます。

フラッシュアーカイブによるインストール方法は次のとおりです。

- ZFS ルートファイルシステムによるシステムのインストールとブートに使用できるフラッシュアーカイブを生成します。
- ZFS フラッシュアーカイブを使用して、システムの JumpStart インストールを実行します。

---

注-ZFS フラッシュアーカイブを作成すると、個別のブート環境ではなく、ルートプール全体がバックアップされます。flarcreate コマンドと flar コマンドの -D オプションを使用すると、プール内の個別のデータセットを除外できます。

---

詳細と制限事項については、『Oracle Solaris ZFS 管理ガイド』の「ZFS ルートファイルシステムのインストール (Oracle Solaris フラッシュアーカイブインストール)」を参照してください。

## ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart インストール (概要と計画)

このセクションでは、JumpStart プロファイルを作成して ZFS ルートプールをインストールする方法について説明します。

---

注-UFS ルート (/) ファイルシステムをインストールすることにより、すべての既存のプロファイルキーワードは、以前のリリースの Oracle Solaris の場合と同様に動作します。UFS プロファイルキーワードの一覧については、第 8 章「JumpStart キーワードリファレンス」を参照してください。

---

ZFS 固有のプロファイルには、pool キーワードを含めてください。pool キーワードにより、新規ルートプールがインストールされ、新しいブート環境がデフォルトで作成されます。既存の bootenv installbe キーワードと新しい bename および dataset オプションを使って、個別の /var データセットを作成できます。UFS マウントポイントの作成を指定するキーワードなど、UFS 固有のプロファイルで使用できるキーワードで ZFS 固有のプロファイルでは使用できないものがあります。

ZFS 計画全体の情報については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画』の第 5 章「ZFS ルートファイルシステムのインストール計画」を参照してください。

## ZFS ルートプールの JumpStart インストールの制限事項

ブート可能な ZFS ルートプールの JumpStart インストールを実行する前に、次の事項を考慮してください。

表 9-1 ZFS ルートプールの JumpStart の制限事項

| 制約                                                                                  | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 詳細                                                                                         |
|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| JumpStart インストールでは、既存の ZFS ストレージプールを使用してブート可能な ZFS ルートプールを作成できません。                  | <p>次のような構文を使用して、新しい ZFS ストレージプールを作成する必要があります。</p> <pre>pool rpool 20G 4G 4G c0t0d0s0</pre> <p>既存のプールは使用できないため、完全な pool キーワード行が必要です。bootenv キーワード行はオプションです。bootenv を使用しないと、デフォルトのブート環境が自動的に作成されません。例:</p> <pre>install_type initial_install cluster SUNWCall pool rpool 20G 4g 4g any bootenv installbe bename newBE</pre> | 170 ページの「pool プロファイル キーワード (ZFS のみ)」                                                       |
| ディスク全体に対してプールを作成できません。                                                              | <p>ディスク全体ではなく、ディスクスライスごとにプールを作成します。</p> <p>プロファイルで c0t0d0 のようにディスク全体に対してプールを作成すると、インストールが失敗し、次のようなエラーメッセージが表示されます。</p> <pre>Invalid disk name (c0t0d0)</pre>                                                                                                                                                              |                                                                                            |
| UFS マウントポイントの作成を指定するキーワードなど、UFS 固有のプロファイルで使用できるキーワードで ZFS 固有のプロファイルでは使用できないものがあります。 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 110 ページの「プロファイルキーワードのクイックリファレンス」                                                           |
| JumpStart でアップグレードはできません。Live Upgrade を使用する必要があります。                                 | <p>Live Upgrade では、現在稼働しているシステムのコピーを作成できます。このコピーをアップグレードしてから、現在稼働中のシステムとしてアクティブ化することができます。</p>                                                                                                                                                                                                                            | 『Oracle Solaris 10/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 10 章「Live Upgrade と ZFS (概要)」 |

## ZFS ルート (/) ファイルシステムの JumpStart キーワード (リファレンス)

このセクションでは、JumpStart プロファイルで使用できる ZFS 固有のキーワードについて説明します。このセクションで説明しているキーワードは、UFS プロファイルの場合とは使用方法が異なるか、ZFS プロファイルでのみ使用されるかのいずれかです。

- UFS および ZFS のプロファイルキーワードのクイックリファレンスガイドについては、[110 ページの「プロファイルキーワードのクイックリファレンス」](#)を参照してください。
- 次のキーワードを ZFS プロファイルで使用できます。使用方法は、UFS と ZFS 両方のプロファイルで同じです。これらのキーワードの詳細については、[112 ページの「プロファイルキーワードの説明と例」](#)を参照してください。
  - boot\_device
  - cluster
  - dontuse
  - fdisk
  - filesys (リモートファイルシステムをマウントする場合)
  - geo
  - locale
  - パッケージ
  - usedisk

## bootenv プロファイルキーワード (ZFS と UFS)

bootenv キーワードでは、ブート環境の特性を指定します。ブート環境は、pool キーワードに従ってインストール時にデフォルトで作成されます。bootenv キーワードに installbe オプションを付けて使用すると、新しいブート環境に名前を付け、そのブート環境内に /var データセットを作成することができます。

このキーワードは、UFS ファイルシステムまたは ZFS ルートプールのインストール用にプロファイルで使用できます。

- UFS ファイルシステムでは、このキーワードを使用して、将来のフラッシュアーカイブのインストール用に空のブート環境を作成します。詳細は、[121 ページの「bootenv プロファイルキーワード \(UFS と ZFS\)」](#)を参照してください。
- ZFS ルートプールでは、bootenv キーワードで、インストール時に作成されたデフォルトのブート環境の特性を変更します。このブート環境は、インストールするルートファイルシステムのコピーです。

bootenv キーワードには、installbe、bename、および dataset オプションを指定できます。これらのオプションにより、ブート環境に名前が付けられ、/var データセットが別個に作成されます。

```
bootenv installbe bename BE-name [dataset mount-point]
```

|                            |                                                                                                                                                      |
|----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| installbe                  | インストール時に作成されるデフォルトのブート環境の特性を変更します。                                                                                                                   |
| bename <i>BE-name</i>      | 新しく作成するブート環境の名前を指定します。名前は、30文字以内で指定できます。使用できるのは英数字のみで、複数バイト文字は使用できません。名前は、システム上で一意となるように指定する必要があります。                                                 |
| dataset <i>mount-point</i> | オプションの dataset キーワードを使用して、ROOT データセットと別個の /var データセットを指定できます。 <i>mount-point</i> の値は、/var に限定されています。たとえば、別個の /var データセットを指定する bootenv 構文行は次のようになります。 |

```
bootenv installbe bename zfsroot dataset /var
```

ブート環境のアップグレードとアクティブ化の方法については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 10 章「Live Upgrade と ZFS (概要)」を参照してください。

## install\_type キーワード (ZFS と UFS)

install\_type キーワードはすべてのプロファイルで必須です。UFS インストールではいくつかのオプションを利用できます。ZFS インストールで利用できるオプションは、initial\_install キーワードだけです。このオプションでは、システムに Oracle Solaris OS を新規インストールします。プロファイルの構文は次のとおりです。

```
install_type initial_install
```

次の UFS のオプションは、ZFS インストールでは使用できません。

- upgrade - ZFS ルートプールをアップグレードするために使用できるのは、Live Upgrade のみです。『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 10 章「Live Upgrade と ZFS (概要)」を参照してください。
- flash\_install - フラッシュアーカイブはインストールできません。
- flash\_update - フラッシュアーカイブはインストールできません。

## pool プロファイルキーワード (ZFS のみ)

pool キーワードでは、作成する新しいルートプールを定義します。プールは、cluster キーワードで指定したソフトウェアグループと共にインストールされます。新しいルートプールを作成するには、構文に示されたすべてのオプションが必要です。

```
pool poolname poolsize swapsize dumpsize vdevlist
```

---

注 - 特定のサイズ値を指定した場合は、g (G バイト) で指定しないかぎり、M バイト単位とみなされます。

---

|                 |                                                                                                   |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>poolname</i> | 新しく作成するプールの名前を指定します。新しいプールは、指定した <i>poolsize</i> と指定したデバイス <i>vdevlist</i> で作成されます。               |
| <i>poolsize</i> | 作成する新しいプールのサイズ。サイズを指定するか、auto オプションを使用して、ディスクのサイズや保存されているスライスなどの制約を考慮して可能な最大のプールサイズを割り当てることができます。 |

---

注 - *poolsize* キーワードの auto の意味は、UFS ファイルシステムで *filesys* キーワードの auto を使用する場合とは異なります。ZFS では、最小限の容量を確保できるかどうかを確認するために、ディスクのサイズをチェックします。最小限の容量が利用可能な場合、ディスクの容量、保存されているスライスなどの制約を考慮したうえで、可能な最大のプールサイズを割り当てます。

---

|                 |                                                                                                                                            |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>swapsize</i> | 新しいルートプール内に作成されるスワップボリューム (zvol) のサイズ。サイズを指定するか、auto オプションを使用してスワップ領域のサイズを自動的に設定できます。デフォルトのサイズは物理メモリーサイズの半分ですが、512M-2G バイトの範囲を超えることはできません。 |
| <i>dumpsize</i> | 新しいプール内に作成されるダンプボリュームのサイズ。サイズを指定するか、auto オプションを使用してデフォルトのダンプサイズを指定できます。                                                                    |
| <i>vdevlist</i> | プールの作成に使用される 1 つ以上のデバイス。                                                                                                                   |

*vdevlist* に指定するデバイスは、ルートプール用のスライスである必要があります。スライス名は、*cwtxdysz* の形式で指定してください。

---

注 - *vdevlist* の書式は、*zpool create* コマンドの書式と同じです。

---

このオプションに指定できる値:

|                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 単一のデバイス名                            | c0t0d0s0 など                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| mirror [ <i>device-names</i>   any] | mirror は、ディスクのミラー化を指定し、デバイス名を指定するか、キーワード any を指定してインストーラが適切なデバイスを選択できるようにします。<br><br>現時点では、複数のデバイスを指定する場合はミラー化構成だけがサポートされます。ディスクはいくつでもミラー化できますが、作成されるプールのサイズは、指定したディスクのなかで最も小さいものによって決まります。ミラー化ストレージプールの作成の詳細については、『 <a href="#">Oracle Solaris ZFS 管理ガイド</a> 』の「 <a href="#">ミラー化されたストレージプール構成</a> 」を参照してください。 |
| any                                 | インストーラが適切なデバイスを選択できるようにします。                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

## root\_device プロファイルキーワード (ZFS と UFS)

```
root_device cwtxdysz
```

root\_device では、ルートプールに使用するデバイスを指定します。root\_device キーワードは、オペレーティングシステムがインストールされている場所を特定します。いくつかの制限はありますが、このキーワードは ZFS と UFS ファイルシステムの両方で同じように使用できます。ZFS ルートプールでは、ルートデバイスは単一のシステムに限られます。このキーワードは、ミラー化されたプールには使えません。

## ZFS ルートプール用の JumpStart プロファイルの例

このセクションでは、ZFS 固有の JumpStart プロファイルの例を紹介します。

注-ZFS ルートプールをアップグレード可能およびブート可能にするには、ディスク全体ではなく、ディスクスライスごとにプールを作成します。プロファイルで `c0t0d0` のようにディスク全体に対してプールを作成すると、次のようなエラーメッセージが表示されます。

```
Invalid disk name (c0t0d0)
```

#### 例 9-1 ミラー化した ZFS ルートプールのインストール

```
install_type initial_install
cluster SUNWCall
pool newpool auto auto auto mirror c0t0d0s0 c0t1d0s0
bootenv installbe bename solaris10_6
```

この例では、次のキーワードと値を使用します。

|                                           |                                                                                                                                                                                             |
|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type initial_install</code> | <code>install_type</code> キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。 <code>initial_install</code> キーワードにより初期インストールが実行され、新規 ZFS ルートプールに新規 Oracle Solaris OS がインストールされます。                                        |
| <code>cluster</code>                      | 全体ディストリビューションソフトウェアグループ ( <code>SUNWCall</code> ) がシステムにインストールされます。ソフトウェアグループの詳細は、『 <a href="#">Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画</a> 』の「ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量」を参照してください。 |
| <code>pool</code>                         | <code>pool</code> キーワードは、新しい ZFS ルートプールの特性を定義します。                                                                                                                                           |
| <code>newpool</code>                      | ルートプールの名前を定義します。                                                                                                                                                                            |
| <code>auto</code>                         | ディスクのサイズを自動的に設定します。このサイズは、指定したディスクのサイズによって決まります。                                                                                                                                            |
| <code>auto</code>                         | スワップ領域のサイズは、 <code>auto</code> キーワードにより自動的に設定されません。デフォルトのサイズは物理メモリーサイズの半分ですが、512M - 2G バイトの範囲を超えることはできません。 <code>size</code> オプションを使用すれば、この範囲外のサイズを設定できます。                                  |

## 例 9-1 ミラー化した ZFS ルートプールのインストール (続き)

|                      |                        |                                                                                                                      |
|----------------------|------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                      | <code>auto</code>      | ダンプデバイスのサイズを自動的に設定します。                                                                                               |
|                      | <code>mirror</code>    | ミラー化されたディスク構成には、 <code>mirror</code> キーワードおよび <code>c0t0d0s0</code> と <code>c0t1d0s0</code> のように指定されたディスクスライスが存在します。 |
| <code>bootenv</code> | <code>installbe</code> | で、インストール時に作成されるデフォルトのブート環境の特性を変更できます。                                                                                |
|                      | <code>bename</code>    | 新しいブート環境に <code>solaris10_6</code> という名前を付けます。                                                                       |

## 例 9-2 ZFS ルートプールのディスクサイズのカスタマイズ

```
install_type initial_install
cluster SUNWCall
pool newpool 80g 2g 2g mirror any any
bootenv installbe bename solaris10_6
```

この例では、次のキーワードと値を使用します。

|                                           |                                                                                                                                                                                             |
|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>install_type initial_install</code> | <code>install_type</code> キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。 <code>initial_install</code> キーワードにより初期インストールが実行され、新規 ZFS ルートプールに新規 Oracle Solaris OS がインストールされます。                                        |
| <code>cluster</code>                      | 全体ディストリビューションソフトウェアグループ ( <code>SUNWCall</code> ) がシステムにインストールされます。ソフトウェアグループの詳細は、『 <a href="#">Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画</a> 』の「ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量」を参照してください。 |
| <code>pool</code>                         | <code>pool</code> キーワードは、新しい ZFS ルートプールの特性を定義します。                                                                                                                                           |
|                                           | <code>newpool</code> ルートプールの名前を指定します。                                                                                                                                                       |
|                                           | <code>80g</code> ディスクスライスのサイズを指定します。                                                                                                                                                        |
|                                           | <code>2g</code> スワップ領域とダンプボリュームは 2G バイトです。                                                                                                                                                  |

## 例 9-2 ZFS ルートプールのディスクサイズのカスタマイズ (続き)

|         |                                                                                                                                                                                                                    |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| mirror  | ミラー化されたディスク構成には、mirror キーワードおよび <code>c0t0d0s0</code> や <code>c0t1d0s0</code> のように指定されたディスクスライスが存在します。<br><br>ミラー化構成の any オプションにより、80G バイトのプールを作成するのに十分な容量を持つ2つの利用可能なデバイスが検索されます。そのような2つのデバイスがなかった場合、インストールは失敗します。 |
| bootenv | installbe で、インストール時に作成されるデフォルトのブート環境の特性を変更できます。<br><br>bename 新しいブート環境に solaris10_6 という名前を付けます。                                                                                                                    |

## 例 9-3 OS のインストール場所の指定

```
install_type initial_install
cluster SUNWCall
root_device c0t0d0s0
pool_nrpool auto auto auto rootdisk.s0
bootenv installbe bename bnv dataset /var
```

この例では、次のキーワードと値を使用します。

|                              |                                                                                                                                                                              |
|------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| install_type initial_install | install_type キーワードは、すべてのプロファイルに必要です。initial_install キーワードにより初期インストールが実行され、新規 ZFS ルートプールに新規 Oracle Solaris OS がインストールされます。                                                    |
| cluster                      | 全体ディストリビューションソフトウェアグループ (SUNWCall) がシステムにインストールされます。ソフトウェアグループの詳細は、『 <a href="#">Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: インストールとアップグレードの計画</a> 』の「ソフトウェアグループごとの推奨ディスク容量」を参照してください。 |
| root_device                  | OS がインストールされるディスクスライスを指定します。c0t0d0s0 で OS 用の特定のディスクとスライスを定義しています。                                                                                                            |

## 例 9-3 OS のインストール場所の指定 (続き)

|             |                                                                                                                               |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| pool        | pool キーワードは、新しい ZFS ルートプールの特性を定義します。                                                                                          |
| nrpool      | ルートプールの名前を定義します。                                                                                                              |
| auto        | ディスクのサイズを自動的に設定します。このサイズは、指定したディスクのサイズによって決まります。                                                                              |
| auto        | スワップ領域のサイズは、auto キーワードにより自動的に設定されます。デフォルトのサイズは物理メモリーサイズの半分ですが、512M - 2G バイトの範囲を超えることはできません。size オプションを使用すれば、この範囲外のサイズを設定できます。 |
| auto        | ダンプデバイスのサイズを自動的に設定します。                                                                                                        |
| rootdisk.s0 | ルートプールの作成に使用するデバイスは、スライス 0 として指定します。                                                                                          |
| bootenv     | installbe で、インストール時に作成されるデフォルトのブート環境の特性を変更できます。                                                                               |
| bename      | 新しいブート環境に bnv という名前を付けます。                                                                                                     |
| dataset     | ROOT データセットとは別に /var データセットを作成します。dataset の値は、/var だけです。                                                                      |

## 追加リソース

この章のトピックの追加情報については、次のリソースを参照してください。

- 概要、計画、詳細な手順を含む ZFS の情報については、『[Oracle Solaris ZFS 管理ガイド](#)』を参照してください。

- すべての JumpStart キーワードの一覧については、第 8 章「JumpStart キーワード リファレンス」を参照してください。
- Live Upgrade を使用して UFS から ZFS に移行する方法または ZFS ルートプールに新規ブート環境を作成する方法については、『Oracle Solaris 10 1/13 インストールガイド: Live Upgrade とアップグレードの計画』の第 10 章「Live Upgrade と ZFS (概要)」を参照してください。

# 用語集

---

- DHCP** Dynamic Host Configuration Protocol (動的ホスト構成プロトコル)の略。アプリケーション層のプロトコル。TCP/IP ネットワーク上の個々のコンピュータつまりクライアントが、中央管理を行なっている指定の DHCP サーバーから IP アドレスなどのネットワーク構成情報を抽出できるようにします。この機能は、大規模な IP ネットワークの保持、管理によるオーバーヘッドを削減します。
- /etc** ディレクトリ 重要なシステム構成ファイルや保守コマンドが収められているディレクトリ。
- /export** ファイルシステム OS サーバー上のファイルシステムで、ネットワーク上のほかのシステムと共有されます。たとえば、`/export` ファイルシステムには、ディスクレスクライアント用のルート (`/`) ファイルシステムとスワップ空間、それにネットワーク上のユーザーのホームディレクトリを収めることができます。ディスクレスクライアントは、ブートと実行の際に OS サーバー上の `/export` ファイルシステムに依存します。
- fdisk** パーティション x86 ベースのシステム上にある特定のオペレーティングシステム専用のディスクドライブの論理パーティション。Oracle Solaris ソフトウェアをインストールするには、x86 システム上に 1 つ以上の Oracle Solaris `fdisk` パーティションを設定する必要があります。x86 ベースのシステムでは、1 台のディスクに最大 4 つの `fdisk` パーティションを作成できます。これらのパーティションは、個別のオペレーティングシステムをインストールして使用できます。各オペレーティングシステムは、独自の `fdisk` パーティション上に存在しなければなりません。個々のシステムの Oracle Solaris `fdisk` パーティションの数は、1 台のディスクにつき 1 つに限られます。
- GRUB** **x86** のみ: GRUB (GNU GRand Unified Bootloader) は、簡単なメニューインタフェースを備えたオープンソースのブートローダーです。メニューには、システムにインストールされているオペレーティングシステムのリストが表示されます。GRUB を使用すると、Oracle Solaris OS、Linux、Microsoft Windows などの各種オペレーティングシステムを簡単にブートすることができます。
- GRUB** 編集メニュー **x86** のみ: GRUB メインメニューのサブメニューであるブートメニュー。このメニューには、GRUB コマンドが表示されます。これらのコマンドを編集して、ブート動作を変更できます。
- GRUB** メインメニュー **x86** のみ: システムにインストールされているオペレーティングシステムがリストされたブートメニュー。このメニューから、BIOS または `fdisk` パーティションの設定を変更することなく、簡単にオペレーティングシステムをブートできます。

|                                       |                                                                                                                                                                                                                                               |
|---------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>JumpStart インストール</b>               | インストール方法の1つ。出荷時にインストールされている JumpStart ソフトウェアを使用することによって、Oracle Solaris ソフトウェアをシステムに自動インストールできます。                                                                                                                                              |
| <b>JumpStart ディレクトリ</b>               | JumpStart インストールにプロファイルフロッピーディスクを使用する場合は、必要なすべての JumpStart ファイルを格納するフロッピーディスク上のルートディレクトリが JumpStart ディレクトリとなります。JumpStart インストールにプロファイルサーバーを使用する場合は、必要なすべての JumpStart ファイルを格納するサーバー上のディレクトリが JumpStart ディレクトリとなります。                           |
| <b>Live Upgrade</b>                   | アクティブブート環境が稼動している間に複製ブート環境のアップグレードを行うことにより、稼動中の環境のダウンタイムをなくすことを可能にするアップグレード方法。                                                                                                                                                                |
| <b>/opt ファイルシステム</b>                  | Sun 以外のソフトウェア製品や別製品のソフトウェア用のマウントポイントが収められているファイルシステム。                                                                                                                                                                                         |
| <b>Oracle Solaris DVD または CD イメージ</b> | システムにインストールされる Oracle Solaris ソフトウェア。Oracle Solaris DVD または CD から、あるいは Oracle Solaris DVD または CD イメージをコピーしたインストールサーバーのハードディスク上から利用できます。                                                                                                       |
| <b>RAID-0 ボリューム</b>                   | ストライプ方式または連結方式のボリューム。これらのコンポーネントはサブミラーとも呼ばれます。ストライプや連結は、ミラーを構築する基本構成ブロックです。                                                                                                                                                                   |
| <b>RAID-1 ボリューム</b>                   | 同じデータのコピーを複数保持しているボリューム。RAID-1 ボリュームは、「サブミラー」と呼ばれる1つまたは複数の RAID-0 ボリュームから構成されます。RAID-1 ボリュームは「ミラー」と呼ばれることもあります。                                                                                                                               |
| <b>rules.ok ファイル</b>                  | rules ファイルから生成されたファイル。JumpStart インストールソフトウェアは、rules.ok ファイルを使ってシステムとプロファイルを照合します。rules.ok ファイルは、check スクリプトを使用して作成してください。                                                                                                                     |
| <b>rules ファイル</b>                     | 自動的にインストールするシステムの各グループまたは単一のシステムのルールを含んでいるテキストファイル。各ルールは1つ以上のシステム属性に基づいてシステムグループを識別します。rules ファイルは、各グループをプロファイル(Oracle Solaris ソフトウェアをどのようにしてグループ内の個々のシステムにインストールするかを定めたテキストファイル)にリンクします。rules ファイルは、JumpStart インストールで使用されます。プロファイルも参照してください。 |
| <b>sysidcfg ファイル</b>                  | システムを事前構成する特殊な一連のシステム構成キーワードを指定するファイル。                                                                                                                                                                                                        |
| <b>/usr ファイルシステム</b>                  | スタンドアロンシステムまたはサーバー上のファイルシステム。標準 UNIX プログラムの多くが格納されています。ローカルコピーを保持する代わりに、大きな /usr ファイルシステムをサーバーと共有することにより、システム上で Oracle Solaris ソフトウェアをインストールおよび実行するために必要なディスク容量を最小限に抑えることができます。                                                               |
| <b>/var ファイルシステム</b>                  | システムの存続期間にわたって変更または増大が予想されるシステムファイルが格納されている(スタンドアロンシステム上の)ファイルシステムまたはディレクトリ。これらのファイルには、システムログ、vi ファイル、メールファイル、UUCP ファイルなどがあります。                                                                                                               |

|                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Volume Manager  | DVD-ROM、CD-ROM、およびフロッピーディスク上のデータへのアクセスを管理および実行するためのメカニズムを提供するプログラム。                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| ZFS             | ストレージプールを使用して物理ストレージを管理するファイルシステム。                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| アーカイブ           | マスターシステムからコピーされたファイルの集合体。このファイルには、アーカイブの名前や作成した日付など、アーカイブの識別情報が含まれています。アーカイブをシステムにインストールすると、システムはマスターシステムとまったく同じ構成になります。<br><br>更新前のマスターイメージと更新されたマスターイメージの相違部分のみを含むフラッシュアーカイブを、差分アーカイブとして使用することも可能です。差分アーカイブには、クローンシステムで保持、変更、または削除するファイルが含まれます。差分更新により、指定されたファイルだけが更新されます。また、差分更新を使用可能なシステムは、更新前のマスターイメージとの整合性を保持するソフトウェアを含むシステムのみに限定されます。 |
| アップグレード         | ファイルを既存のファイルとマージし、可能な場合には変更を保持するインストール。<br><br>Oracle Solaris OS のアップグレードでは、Oracle Solaris OS の新しいバージョンがシステムのディスク上の既存のファイルにマージされます。アップグレードでは、Oracle Solaris OS の以前のバージョンに対して行なった変更は最大限に保存されます。                                                                                                                                               |
| アップグレードオプション    | Oracle Solaris インストールプログラムによって提示されるオプション。アップグレード時には、新しいバージョンの Oracle Solaris とディスク上の既存のファイルがマージされます。前回 Oracle Solaris をインストールしてから加えられたローカルの変更内容は、できるかぎり残されます。                                                                                                                                                                                |
| インストールサーバー      | Oracle Solaris のインストール用に、Oracle Solaris DVD または CD のイメージをネットワーク上のほかのシステムに提供するサーバー(メディアサーバーとも呼ばれる)。Oracle Solaris DVD または CD のイメージをサーバーのハードディスクにコピーすることによってインストールサーバーを作成できます。                                                                                                                                                                 |
| エンドユーザーシステムサポート | コアシステムサポートソフトウェアグループのほかに、エンドユーザーに推奨するソフトウェアが収められているソフトウェアグループ。これには共通デスクトップ環境(CDE)や DeskSet ソフトウェアが含まれます。                                                                                                                                                                                                                                     |
| 開始スクリプト         | ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプト。rules ファイル内で指定され、Oracle Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされる前にタスクを実行します。このスクリプトは、Oracle Solaris の機能である JumpStart インストールでのみ使用できます。                                                                                                                                                                                         |
| 開発者システムサポート     | エンドユーザーシステムサポートソフトウェアグループのほかに、ソフトウェア開発用ライブラリ、インクルードファイル、マニュアルページ、およびプログラミングツールが収められているソフトウェアグループ。                                                                                                                                                                                                                                            |

|                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| カスタムプローブ<br>ファイル     | rules ファイルと同じ JumpStart ディレクトリに存在しなければならないファイルで、次の2つのタイプの関数を含む Bourne シェルスクリプト。含む2つのタイプは、プローブと比較です。プローブ関数は、必要な情報を収集し、実際の作業を行なって、定義に対応した <code>SI</code> 環境変数を設定します。プローブ関数は、プローブキーワードになります。比較関数は、対応するプローブ関数を呼び出してプローブ関数の出力を比較し、キーワードが一致する場合は0、キーワードが一致しない場合は1を返します。比較関数はルールキーワードになります。「rules ファイル」も参照してください。 |
| 仮想デバイス               | ZFS プール内の論理デバイス。物理デバイス、ファイル、または一連のデバイスを仮想デバイスに設定できます。                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 限定ネットワークシ<br>ステムサポート | ソフトウェアグループの1つ。Oracle Solaris システムのブートおよび実行に必要な最小限のコードが含まれ、ネットワークサービスのサポートも制限されます。限定ネットワークシステムサポートは、テキストベースのマルチユーザーコンソールと、システム管理ユーティリティを提供します。このソフトウェアグループを使用すると、システムでネットワークインタフェースを認識できますが、ネットワークサービスがアクティブになることはありません。                                                                                     |
| コアシステムサポート           | システムで Oracle Solaris OS をブートして実行するために必要な最小限のソフトウェアが収められているソフトウェアグループ。コアには共通デスクトップ環境 (CDE) を実行するために必要ないくつかのネットワーク用ソフトウェアとドライバが含まれます。CDE ソフトウェアは、コアには含まれません。                                                                                                                                                  |
| 更新                   | システムにインストールを実行して同じタイプのソフトウェアを変更することまたはそのインストール自体。アップグレードとは異なり、更新によりシステムがダウングレードされる場合があります。初期インストールとは異なり、更新を実行するには同じタイプのソフトウェアがあらかじめインストールされていなければなりません。                                                                                                                                                     |
| サブミラー                | RAID-0 ボリュームを参照してください。                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 差分アーカイブ              | 更新前のマスターイメージと更新されたマスターイメージの相違部分のみを含むフラッシュアーカイブ。差分アーカイブには、クローンシステムで保持、変更、または削除するファイルが含まれます。差分更新により、指定されたファイルだけが更新されます。また、差分更新を使用可能なシステムは、更新前のマスターイメージとの整合性を保持するソフトウェアを含むシステムのみに限定されます。                                                                                                                       |
| 終了スクリプト              | ユーザーが定義する Bourne シェルスクリプト。rules ファイル内で指定され、Oracle Solaris ソフトウェアがシステムにインストールされてから、システムがリポートされるまでの間にタスクを実行します。このスクリプトは、JumpStart インストールで使用しません。                                                                                                                                                              |
| 状態データベース             | Solaris ボリュームマネージャー構成の状態に関する情報を保存するデータベース。状態データベースは、複製された複数のデータベースコピーの集まりです。各コピーは「状態データベースの複製」と呼ばれます。状態データベースは、既知の状態データベースの複製の格納場所とステータスをすべて記録しています。                                                                                                                                                        |
| 状態データベースの複<br>製      | 状態データベースのコピー。複製により、データベース内のデータの有効性が保証されます。                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 初期インストール             | 現在実行中のソフトウェアを上書きするか、空のディスクを初期化するインストール。                                                                                                                                                                                                                                                                     |

|                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                         | Oracle Solaris OS の初期インストールでは、システムのディスクが Oracle Solaris OS の新しいバージョンで上書きされます。システム上で Oracle Solaris OS が稼働していない場合は、初期インストールを行う必要があります。アップグレード可能な Oracle Solaris OS がシステム上で稼働している場合は、初期インストールによってディスクが上書きされ、OS やローカルの変更は保持されません。                                                                       |
| スタンドアロン                 | ほかのマシンからのサポートを一切必要としないコンピュータ。                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| スナップショット                | 特定の時点における ZFS ファイルシステムまたはボリュームの読み取り専用イメージ。                                                                                                                                                                                                                                                           |
| スライス                    | ソフトウェアごとに分割される、ディスク領域の区分。                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| スワップ空間                  | メモリーに再ロードできる状態になるまで、メモリー領域の内容を一時的に保持するスライスまたはファイル。/swap または swap ボリュームとも呼ばれます。                                                                                                                                                                                                                       |
| 全体ディストリビューション           | Oracle Solaris リリース全体が含まれているソフトウェアグループ。                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 全体ディストリビューションと OEM サポート | Oracle Solaris リリース全体と、OEM のための追加ハードウェアサポートを含むソフトウェアグループ。Oracle Solaris を SPARC 搭載サーバーシステムにインストールする場合は、このソフトウェアグループを推奨します。                                                                                                                                                                           |
| ゾーン                     | 非大域ゾーンを参照してください。                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| ソフトウェアグループ              | Oracle Solaris ソフトウェアの論理グループ(クラスとパッケージ)。Oracle Solaris のインストール時には、次のいずれかのソフトウェアグループをインストールできます。コアシステムサポート、エンドユーザーシステムサポート、開発者システムサポート、または全体ディストリビューションです。また、SPARC システムのみ、全体ディストリビューションと OEM サポートもインストールできます。                                                                                         |
| 大域ゾーン                   | Oracle Solaris ゾーンでは、大域ゾーンはシステムのデフォルトのゾーンであり、システム全体での管理に使用されるゾーンでもあります。非大域ゾーンの構成、インストール、管理、およびアンインストールは、大域ゾーンからのみ行うことができます。物理デバイス、ルーティング、動的再構成 (DR) といったシステムインフラストラクチャーの管理は、大域ゾーンでのみ行うことができます。大域ゾーンで実行されるプロセスは、適切な権限が付与されていれば、ほかのゾーンに関連付けられているオブジェクトにもアクセスできます。Oracle Solaris ゾーンおよび非大域ゾーンも参照してください。 |
| データセット                  | 次の ZFS エンティティーの総称名。クローン、ファイルシステム、スナップショット、またはボリューム。                                                                                                                                                                                                                                                  |
| ネットワークに接続されたシステム        | ハードウェアやソフトウェアを介して接続されているシステムのグループ(ホスト)。通信や情報の共有が可能です。ローカルエリアネットワーク (LAN) とも呼ばれます。システムをネットワークに接続するには、通常、1 台以上のサーバーが必要です。                                                                                                                                                                              |
| パッケージ                   | モジュール形式でのインストールを可能にするソフトウェアの集まり。Oracle Solaris ソフトウェアは複数のソフトウェアグループに分割され、それぞれがクラスとパッケージで構成されています。                                                                                                                                                                                                    |

|              |                                                                                                                                                                                                                                                           |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 非大域ゾーン       | Oracle Solaris オペレーティングシステムの単一インスタンス内に作成された仮想オペレーティングシステム環境。非大域ゾーンでは、システムのほかの部分と相互に作用することなく、1つ以上のアプリケーションを実行できます。非大域ゾーンはゾーンとも呼ばれます。Oracle Solaris ゾーンおよび大域ゾーンも参照してください。                                                                                   |
| ファイルサーバー     | ネットワーク上のシステムに対して、ソフトウェアやファイルの記憶領域を提供するサーバー。                                                                                                                                                                                                               |
| ファイルシステム     | Oracle Solaris OS において、ユーザーがアクセスできるファイルおよびディレクトリから成るツリー構造のネットワーク。                                                                                                                                                                                         |
| ファンクションキー    | F1、F2、F3 などの名前が付いた 10 個以上のキーボードキー。これらのキーにはそれぞれ特定のタスクが割り当てられています。                                                                                                                                                                                          |
| ブート          | メモリーにシステムソフトウェアを読み込んで起動すること。                                                                                                                                                                                                                              |
| ブート環境        | Oracle Solaris OS を操作する上で重要な必須ファイルシステム (ディスクスライスおよびマウントポイント) の集まり。ディスクスライスは、同じ 1 つのディスク上に存在することも、分散された複数のディスク上に存在することもあります。<br><br>アクティブなブート環境とは、現在ブートしている環境を指します。単一のアクティブなブート環境からだけブートできます。アクティブでないブート環境とは、現在ブートしていないが、次のリブート時にアクティブ化できる状態にある環境のことを指します。 |
| ブートサーバー      | 同じネットワークのサブネット上のクライアントシステムに、起動に必要なプログラムと情報を提供するサーバーシステム。インストールサーバーの存在するサブネットが、Oracle Solaris ソフトウェアをインストールする必要があるシステムと異なる場合、ネットワークを介してインストールするにはブートサーバーが必要です。                                                                                             |
| ブートローダー      | <b>x86</b> のみ: ブートローダーは、システムの電源を入れた後に最初に実行されるソフトウェアプログラムです。このプログラムがブートプロセスを開始します。                                                                                                                                                                         |
| プール          | デバイスの論理グループ。使用可能な ZFS ストレージのレイアウトおよび物理特性を記述します。データセットの領域は、プールから割り当てられます。                                                                                                                                                                                  |
| フォーマット       | データを一定の構造にしたり、データを保存できるようにディスクをセクターに分割したりすること。                                                                                                                                                                                                            |
| プラットフォームグループ | 特定のソフトウェア用にベンダーが定義するハードウェアプラットフォームのグループ。たとえば i86pc や sun4c などです。                                                                                                                                                                                          |
| プラットフォーム名    | uname -i コマンドによって出力される情報。たとえば Ultra 60 のプラットフォーム名は、SUNW,Ultra-60 です。                                                                                                                                                                                      |
| プローブキーワード    | インストールに JumpStart を使用する場合、システムに関する属性情報を抽出する構文要素。プローブキーワードでは、ルールに必要な一致条件の設定およびプロファイルの実行は必要ありません。ルールも参照してください。                                                                                                                                              |

|                  |                                                                                                                                                                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| プロファイル           | JumpStart を使用する場合に、Oracle Solaris ソフトウェアのインストール方法を定義するテキストファイル。たとえば、プロファイルでインストールするソフトウェアグループを定義します。各ルールは、そのルールが一致したときにシステムがインストールされる方法を定義してあるプロファイルを指定します。通常は、ルールごとに異なるプロファイルを作成します。しかし、複数のルールで同じプロファイルを使用することも可能です。「rules ファイル」も参照してください。 |
| プロファイルフロッピーディスク  | すべての重要な JumpStart ファイルを、そのルートディレクトリ (JumpStart ディレクトリ) に持つフロッピーディスク。                                                                                                                                                                        |
| ボリューム            | システムで単一の論理デバイスとして扱われる、物理スライスやボリュームの集まり。ボリュームは、アプリケーションやファイルシステムにとって物理ディスクと同じように機能します。<br><br>一部のコマンド行ユーティリティーでは、ボリュームはメタデバイスと呼ばれます。一般的な UNIX 用語では、ボリュームは、「擬似デバイス」または「仮想デバイス」とも呼ばれます。                                                        |
| マウント             | マウント要求を行うマシンのディスクまたはネットワーク上のリモートディスクから、ディレクトリにアクセスするプロセス。ファイルシステムをマウントするには、ローカルシステム上のマウントポイントと、マウントするファイルシステム名 (たとえば /usr) が必要です。                                                                                                           |
| マウントポイント         | リモートマシン上に存在するファイルシステムのマウント先となる、ワークステーション上のディレクトリ。                                                                                                                                                                                           |
| ミラー              | RAID-1 ボリュームを参照してください。                                                                                                                                                                                                                      |
| ルート              | 複数の項目から成る階層構造の最上位。ルートは、ほかのすべての項目を子孫として持つ唯一の項目です。「ルートディレクトリ」または「ルート (/) ファイルシステム」を参照してください。                                                                                                                                                  |
| ルート (/) ファイルシステム | ほかのすべてのファイルシステムの元となる最上位ファイルシステム。ルート (/) ファイルシステムはほかのすべてのファイルシステムがマウントされる元となり、マウント解除されることはありません。ルート (/) ファイルシステムには、カーネル、デバイスドライバ、システムのブート (ブート) に使用されるプログラムなど、システムの稼働に不可欠なディレクトリやファイルが含まれています。                                               |
| ルートディレクトリ        | ほかのすべてのディレクトリの元となる最上位ディレクトリ。                                                                                                                                                                                                                |
| ルール              | 1 つ以上のシステム属性をプロファイルに割り当てる一連の値。ルールは、JumpStart インストールで使用されます。                                                                                                                                                                                 |
| ロケール             | 同一の言語、風俗、慣習、文化などを共有する地理上または政治上の地域圏 (コミュニティ)。たとえば、米国英語のロケールは en_US、英国英語のロケールは en_UK です。                                                                                                                                                      |
| フラッシュアーカイブ       | マスターシステムと呼ばれるシステムからファイルのアーカイブを作成する Oracle Solaris インストール機能。このアーカイブを使ってほかのシステムのインストールを行うと、そのシステムの構成はマスターシステムと同じになります。アーカイブも参照してください。                                                                                                         |



# 索引

---

## 数字・記号

#

rules ファイル内の, 31  
プロファイル内の, 35

(/) ファイルシステム

JumpStart で設定される値, 158

## A

add\_install\_client コマンド, JumpStart ディレクトリ  
のアクセス, 24

add\_install\_client コマンドの -s オプション, 103  
&& (アンパサンド) ルールフィールド, 32  
AND ルールフィールド, 32

any

プローブキーワード、説明と値, 163  
ルールキーワード、説明と値, 105, 162

archive\_location キーワード, 112-118

arch プローブキーワード, 162

arch ルールキーワード, 106, 162

auto\_install\_sample ディレクトリ

check スクリプト, 54, 77

JumpStart ディレクトリへのファイルのコ  
ピー, 28, 30

JumpStart ディレクトリへファイルをコ  
ピー, 23

## B

backup\_media キーワード, 118-120

begin.log ファイル, 58

begin ルールフィールド、説明, 32

boot\_device キーワード, 120

bootenv createbe キーワード, 121

## C

-c オプション

add\_install\_client コマンド, 102, 103

pfinstall コマンド, 52

check スクリプト

custom\_probes.ok ファイルの作成, 77

custom\_probes ファイルの妥当性検査, 76, 77

rules.ok ファイルの作成, 54

rules ファイルの検証, 54

rules ファイルの妥当性検査, 55, 77

派生プロファイルと, 59

ルールのテスト, 55, 77

check スクリプトの -p オプション, 54, 77

check スクリプトの -r オプション, 55, 77

client\_arch キーワード, 123

client\_root プロファイルキーワード, 123

cluster プロファイルキーワード

説明と値, 124-125, 126

例, 36

CPU (プロセッサ)

プローブキーワード, 162

ルールキーワード, 106, 162

.cshrc ファイル, 64

custom\_probes.ok ファイル

作成, 76, 77

custom\_probes.ok ファイル (続き)

説明, 76

custom\_probes ファイル

check による妥当性検査, 76, 77

custom\_probes のテスト, 77

名前の指定, 74

要件, 74

## D

dfstab ファイル, 99

disksize ルールキーワード、説明と値, 106, 162

disks プロブキーワード、説明と値, 162

domainname プロブキーワード, 162

domainname ルールキーワード, 106, 162

dontuse プロファイルキーワード, 127, 159

## E

eng\_profile の例, 99

/etc/dfs/dfstab ファイル, 99

## F

fdisk コマンド, 68, 71

fdisk プロファイルキーワード

説明と値, 127-129

例, 36

fileys キーワード, 130-134, 134-136

fileys プロファイルキーワード

説明と値, 130

例, 36

finish.log ファイル, 61

finish ルールフィールド、説明, 33

## G

geo キーワード, 137

getfile: RPC failed: error 5: RPC Timed out

メッセージ, 26

GRUB ベースのブート

インストール, 90

コマンドリファレンス, 93

プロファイルフロッピーディスクの作成, 29

## H

hostaddress プロブキーワード, 162

hostaddress ルールキーワード, 106, 162

hostname プロブキーワード、説明と値, 162

hostname ルールキーワード

説明と値, 106, 162

例, 105-109

## I

install\_config コマンド, 26

install\_type キーワード, 138

install\_type プロファイルキーワード

プロファイルのテスト, 53

要件, 35, 36

例, 36

installed プロブキーワード、説明と値, 162

installed ルールキーワード、説明と値, 107, 162

IP アドレス

プロブキーワード, 162

ルールキーワード, 106, 162

## J

JumpStart インストール

tip ライン接続の要件, 85, 90

オプション機能, 57

開始スクリプト, 57, 59

概要, 57

サイト固有のインストールプログラム, 72

終了スクリプト, 60

概要, 17

準備, 17, 55

説明, 17

プロファイルキーワード, 110

例, 104

## JumpStart インストール, 例 (続き)

- check スクリプト, 101
- eng\_profile の作成, 99
- フラッシュアーカイブプロファイル, 40, 42, 43
- JumpStart ディレクトリ, 99
- marketing\_profile の作成, 100
- RAID-1 ボリュームプロファイル, 44
- rules ファイルの編集, 101
- WAN ブートインストールプロファイル, 41
- エンジニアリングシステムの設定, 102
- サイトの設定, 96
- スタンドアロンシステム, 15
- ネットワークに接続された, 16
- ネットワークに接続されていない, 15
- ブートとインストール, 104
- マーケティングシステムの設定, 98, 102

## JumpStart ディレクトリ

- rules ファイルの例, 31
- アクセス権, 21, 26
- 共有, 21, 99
- 作成
  - SPARC ベースのシステム用フロッピーディスク, 27
  - x86 ベースのシステム用フロッピーディスク, 26, 29
  - サーバー, 21
  - 例, 99
- 終了スクリプトでファイルを追加, 62
- ファイルのコピー
  - インストールファイル, 23, 28, 30
  - 終了スクリプトの使用, 61

## JumpStart ディレクトリの共有, 99

**K**

- karch プローブキーワード, 162
- karch ルールキーワード, 107, 162

**L**

- layout\_constraint キーワード, 138-141
- locale キーワード, 141

**M**

- marketing\_profile の例, 100
- memsize プローブキーワード, 説明と値, 163
- memsize ルールキーワード, 説明と値, 107, 163
- metadb プロファイルキーワード, 142
- model プローブキーワード, 説明と値, 163
- model ルールキーワード, 説明と値, 108, 163

**N**

- network プローブキーワード, 説明と値, 163
- network ルールキーワード, 説明と値, 108, 163
- no\_master\_check キーワード, 143
- noneuclidean プロファイルキーワード, 143

**O**

## Oracle Solaris ソフトウェア

- グループ, 124-125
  - アップグレード, 126
  - プロファイルの例, 36
- リリースまたはバージョン
  - installed プローブキーワード, 162
  - installed ルールキーワード, 107, 162
  - osname プローブキーワード, 163
  - osname ルールキーワード, 108, 163

## Oracle Solaris ソフトウェアのバージョン

- installed プローブキーワード, 162
- installed ルールキーワード, 107, 162
- osname プローブキーワード, 163
- osname ルールキーワード, 108, 163

## Oracle Solaris ソフトウェアのリリース

- installed プローブキーワード, 162
- installed ルールキーワード, 107, 162
- osname プローブキーワード, 163
- osname ルールキーワード, 108, 163
- osname プローブキーワード, 163
- osname ルールキーワード, 108, 163

**P**

## partitioning

- fdisk パーティション, 36

- 例, 36

partitioning キーワード, 150

pfinstall コマンド, 49

probe ルールキーワード, 説明と値, 109

prvtoc コマンド

- SPARC: ディスク構成ファイルの作成, 66

- x86: ディスク構成ファイルの作成, 69, 71

**R**

root\_device キーワード, 157

rootdisk

- filesystem のスライス値, 131

- JumpStart で設定される値, 158

- 定義, 158

RPC failed: error 5: RPC Timed out メッセージ, 26

RPC Timed out メッセージ, 26

rule\_keyword ルールフィールド, 32

rule\_value ルールフィールド, 32

rules

- 検証, 55

- 派生プロファイル, 58, 59

- フィールドの説明, 33

- 複数行のルール, 32

- 例, 33

rules.ok ファイル

- 作成, 54

- 説明, 54

rules.ok ファイル, ルールの順序を一致させる, 33

rules.ok ファイル

- ルールの順序を一致させる, 83, 89

rules ファイル

- check による検証

- JumpStart の例, 101

- 派生プロファイルと, 59

- check による妥当性検査, 55

- JumpStart の例, 101

- 構文, 32

- コメント, 31

- 作成, 31

rules ファイル (続き)

- 説明, 31

- 名前の指定, 31, 32

- 複数行のルール, 32

- ルールの追加, 32

- ルールのテスト, 55

- 例, 31

rules ファイル内のバックスラッシュ, 32

rules ファイルの行を折り返す, 32

**S**

setup\_install\_server コマンドの -b オプション, 99

shareall コマンド, 22, 99

share コマンド, JumpStart ディレクトリの共有, 99

SI\_PROFILE 環境変数, 59

stty コマンド, 85, 90

SUNWCall グループ, 124-125

SUNWCprog グループ, 124-125

SUNWCreq グループ, 124-125

SUNWCrnet グループ, 124-125

SUNWCuser グループ, 124-125

SUNWCXall グループ, 124-125

system\_type プロファイルキーワード

- 説明と値, 159

- 例, 36

**T**

tip ライン接続ディスプレイの要件, 90

tip ライン接続の要件, 85

totaldisk プローブキーワード, 163

totaldisk ルールキーワード, 109, 163

**U**

upgrade, プロファイルキーワード, 138

usedisk プロファイルキーワード, 説明と値, 159

**V**

/var/sadm/system/logs/begin.log ファイル, 58  
 /var/sadm/system/logs/finish.log ファイル, 61  
 volcheck コマンド, 27,29

**Z****ZFS**

概要と計画, 166  
 キーワード, 説明, 168  
 制限事項, 166  
 プロファイルキーワード  
   クイックリファレンス, 110  
 プロファイルの例, 171

ZFS の制限事項, 166

**あ****アーカイブ**

JumpStart プロファイルの例, 40, 41, 42, 43  
 キーワード, JumpStart, 112-118

**アクセス権**

JumpStart ディレクトリ, 21, 26  
 開始スクリプト, 58  
 終了スクリプト, 61

**アップグレード**

プロファイルキーワード, 126, 150

アンパサンド (&&) ルールフィールド, 32

**い****一致**

rootdisk 値, 158

**一致させる**

ルールの順序, 33, 83, 89

インストールの準備, JumpStart, 55

インストールの準備, JumpStart の使用, 17

**え**

エンドユーザーシステムサポート, 124-125

**か**

開始, check スクリプト, 55

開始, check スクリプト, 54

**開始スクリプト**

アクセス権, 58

インストール継続期間の追跡, 59

概要, 57

サイト固有のインストールプログラム, 72

派生プロファイルの作成, 58, 59

ルールフィールド, 32

開発者システムサポート, 124-125

開発者システムサポートソフトウェアグループ,  
 プロファイルの例, 36

!(感嘆符) ルールフィールド, 32

感嘆符 (!) ルールフィールド, 32

**き****キーワード**

フラッシュアーカイブアーカイブ,

  JumpStart, 112-118

プローブ, 73

**け****検証**

custom\_probes ファイル

  テスト, 77

rules ファイル

  check の使用, 54

  JumpStart の例, 101

  派生プロファイルと, 59

  ルールのテスト, 55

限定ネットワークシステムサポート, 124-125

**こ**

コアシステムサポート, 124-125

構成, ディスク構成ファイルの作成, 66

**コピー**

JumpStart インストールファイル, 23, 28, 30

JumpStart ディレクトリファイル, 61

## コメント

- rules ファイル内の, 31
- プロファイル内の, 35

## さ

## サーバー

- JumpStart ディレクトリの作成, 21
- ルート領域, 123

## サイズ

- tip ライン接続ディスプレイのサイズ, 85, 90
- スワップ空間
  - 最大サイズ, 124
  - ディスクレスクライアント, 123
  - プロファイルの例, 17
- ハードディスク
  - プローブキーワード, 162, 163
  - ルート領域, 123
  - ルールキーワード, 106, 109, 162, 163
- メモリー, 107, 163

## サイト固有のインストールプログラム, 72

## 削除, アップグレード時のクラスタ, 126

## 作成

- custom\_probes.ok ファイル, 76, 77
- JumpStart ディレクトリ, サーバー上, 21
- RAID-1 ボリューム, 134-136
- rules.ok ファイル, 54, 76
- rules ファイル, 31
- ディスク構成ファイル, 66
- プロファイル
  - 説明, 35
  - 派生, 58
- ローカルファイルシステム, 130-134

## し

## 終了スクリプト

- インストール継続期間の追跡, 59
- パッケージとパッチの追加, 62
- ルート環境のカスタマイズ, 64
- ルールフィールド, 33

## 出力ファイル

- 開始スクリプトログ, 58

## 出力ファイル(続き)

- 終了スクリプトログ, 61
- 照合, 派生プロファイル, 59

## す

## スクリプト

- 開始スクリプト, 57, 59, 72
- 終了スクリプト, 60, 72
- ルールフィールド内の Bourne シェルスクリプト, 32

## スタンドアロンシステム

- JumpStart インストールの例, 15
- プロファイルの例, 36

## スライス

- プローブキーワード, 162
- プロファイルの例, 36
- ルールキーワード, 107, 162

## スワップファイルシステム

- サイズの決定, 124
- ディスクレスクライアントのスワップ空間, 123
- プロファイルの例, 17
- メモリーサイズと, 124

## せ

- 全体ディストリビューション, 124-125
- 全体ディストリビューションと OEM サポート, 124-125

## そ

## ソフトウェアグループ

- アップグレード, 126
- プロファイルの例, 36
- プロファイル用, 124-125

## た

- 代替インストールプログラム, 72

## 妥当性検査

- custom\_probes ファイル
  - check の使用, 77
- rules ファイル
  - check の使用, 55, 77

## つ

## 追加

- アップグレード時のクラスタ, 126
- 終了スクリプトでパッケージとパッチを, 62
- ソフトウェアグループからパッケージを, 145
- ルールを rules ファイルに, 32

## て

## ディスク構成ファイル

- 作成
  - x86 ベースのシステム, 68, 71
- 説明, 49

## ディスクレスクライアント

- スワップ空間, 123
- プラットフォーム, 123

## ディスプレイ

- tip ライン接続の要件, 85, 90

## ディレクトリ

- JumpStart
  - rules ファイルの例, 31
  - アクセス権, 21, 26
  - インストールファイルのコピー, 23, 28, 30
  - システム用に作成, 26
  - ディレクトリの共有, 99
  - ディレクトリの作成, 99
  - ファイルのコピー, 61
  - ファイルの追加, 62

## 移動

- JumpStart ディレクトリへ, 54, 77
- ローカルディスク上の Oracle Solaris SPARC ソフトウェアのイメージ, 28
- ローカルディスク上の Oracle Solaris ソフトウェアのイメージ, 23
- ローカルディスク上の x86 ベースの Oracle Solaris ソフトウェアのイメージ, 30

## ディレクトリの移動

- JumpStart ディレクトリへ, 54, 77
- ローカルディスク上の Oracle Solaris SPARC ソフトウェアのイメージ, 28
- ローカルディスク上の Oracle Solaris ソフトウェアのイメージ, 23
- ローカルディスク上の x86 ベースの Oracle Solaris ソフトウェアのイメージ, 30

## テスト

- custom\_probes ファイルの検証
  - custom\_probes のテスト, 77
- custom\_probes ファイルの妥当性検査
  - check の使用, 76
- rules ファイルの検証
  - check の使用, 54
  - JumpStart の例, 101
  - 派生プロファイルと, 59
  - ルールのテスト, 55
- rules ファイルの妥当性検査
  - check の使用, 55, 77
- プロファイル, 49, 53

## デフォルト

- インストールするソフトウェアグループ, 125
- パーティション分割
  - ディスクの指定, 159
  - ディスクの除外, 127
- 派生プロファイル名, 59

## と

## ドメイン

- プローブキーワード, 162
- ルールキーワード, 106, 162

## な

## 名前/名前の指定

- custom\_probes ファイル, 74
- rules ファイル, 31, 32
- システムモデル名, 108, 163
- 派生プロファイル名, 59
- ホスト名, 106, 162

## ね

- ネットワークインストール, JumpStart インストール, 例, 16
- ネットワーク番号, 108, 163

## は

- パーティション分割
  - fdisk パーティション, 127-129
  - ディスクの除外, 127
  - プロファイルキーワード, 150, 159
- ハードディスク
  - partitioning
    - プロファイルキーワード, 150
    - 例, 36
  - rootdisk 値, 158
  - サイズ
    - プローブキーワード, 162, 163
    - ルート領域, 123
    - ルールキーワード, 106, 109, 162, 163
  - スワップ空間
    - 最大サイズ, 124
    - ディスクレスクライアント, 123
    - プロファイルの例, 17, 36
  - パーティション分割
    - partitioning default 用に指定, 159
    - partitioning default 用に除外, 127
  - マウント, 130
- パス、check スクリプト, 54, 77
- 派生プロファイル, 58, 59
- パッケージ
  - 管理ファイル, 57
  - 追加
    - chroot による, 61
    - 終了スクリプトで, 62
- パッチ
  - 追加
    - chroot による, 61
    - 終了スクリプトで, 62

## ふ

- ファイルとファイルシステム
  - 開始スクリプトの出力, 58
  - コピー
    - JumpStart インストールファイル, 23, 28, 30
    - 終了スクリプトによる JumpStart ディレクトリファイルの, 61
  - 作成
    - RAID-1 ボリューム, 134-136
    - ローカルファイルシステム, 130-134
    - 終了スクリプトの出力, 61
    - リモートファイルシステムのマウント, 130
- ブート
  - GRUB によるインストール, 90
  - GRUB の使用, コマンドリファレンス, 93
  - プロファイルフロッピーディスクの作成, 29
- 複数行ある rules ファイル, 32
- プラットフォーム
  - システム属性とプロファイルを一致させる, 33, 83, 89
  - システムモデル名, 108, 163
  - ディスクレスクライアント, 123
  - プローブキーワード, 162
  - ルールキーワード, 107, 162
- プローブキーワード
  - arch, 162
  - disks, 162
  - domainname, 162
  - hostaddress, 162
  - hostname, 162
  - installed, 162
  - karch, 162
  - memsize, 163
  - model, 163
  - network, 163
  - osname, 163
  - rootdisk, 163
  - totaldisk, 163
- プロセッサ
  - プローブキーワード, 162
  - ルールキーワード, 106, 162
- フロッピーディスク
  - JumpStart ディレクトリのアクセス, 25
  - x86: JumpStart ディレクトリ, 26

- プロファイル
    - コメント, 35
    - 作成, 35
    - システムを一致させる, 33, 83, 89
    - 説明, 35
    - テスト, 53
    - 名前の指定, 36
    - 派生プロファイル, 58, 59
    - 要件, 31, 35
    - ルールフィールド, 32
    - 例, 36
      - eng\_profile, 99
      - marketing\_profile, 100
      - WAN ブートインストール, 41
      - ZFS, 171
      - フラッシュアーカイブ, 40, 42, 43
  - プロファイルキーワード, 110, 159
    - archive\_location, 112-118
    - backup\_media, 118-120
    - boot\_device, 120
    - bootenv createbe, 121
    - client\_arch, 123
    - client\_root, 123
    - client\_swap, 123
    - cluster
      - 説明と値, 124-125, 126
      - 例, 36
    - dontuse
      - usedisk と, 159
      - 説明と値, 127
    - fdisk
      - 説明と値, 127-129
      - 例, 36
    - filesystem
      - RAID-1 ボリューム, 134-136
      - 説明と値, 130
      - リモートファイルシステム, 130
      - 例, 36
      - ローカルファイルシステム, 130-134
    - forced\_deployment, 説明と値, 136
    - geo
      - 説明と値, 137
    - install\_type
      - ZFS 用, 169
  - プロファイルキーワード, install\_type (続き)
    - 説明と値, 138
    - 要件, 35, 36
    - 例, 36
    - layout\_constraint, 説明と値, 138-141
    - local\_customization, 説明と値, 141
    - locale, 説明と値, 141
    - metadb
      - 説明と値, 142
      - 例, 36
    - no\_master\_check, 説明と値, 143
    - noneuclidean, 143
    - partitioning
      - 説明と値, 150
      - 例, 36
    - root\_device, 157
    - system\_type
      - 説明と値, 159
      - 例, 36
    - usedisk, 説明と値, 159
    - ZFS 用の bootenv installbe, 168
    - ZFS 用の root\_device, 171
    - ZFS 用プール, 170
    - 大文字小文字の区別, 110
    - クイックリファレンス, 110
    - 状態データベースの複製 (meatball) の作成, 142
    - パーティション分割
      - ディスクの指定, 159
      - ディスクの除外, 127
  - プロファイルフィールドの等号 (=), 59
- へ
- 変数
    - SI\_PROFILE, 59
    - SYS\_MEMSIZE, 52
- ま
- マイクロプロセッサ
    - プローブキーワード, 162
    - ルールキーワード, 106, 162

## マウント

- Solaris インストールによる, 61
- 開始スクリプトに関する注意事項, 58
- リモートファイルシステム, 130

## め

## メモリー

- スワップ空間のサイズと, 124
- プローブキーワード, 163
- ルールキーワード, 107, 163

## よ

## 要件

- custom\_probes ファイル, 74
- プロファイル, 31, 35

## り

- リモートファイルシステム, マウント, 130

## る

- ルート (/) ファイルシステム, プロファイルの例, 17
- ルート環境、終了スクリプトによるカスタマイズ, 64
- ルール
  - rootdisk の一致規則, 158
  - 構文, 32
  - 順序を一致させる, 33, 83, 89
  - 妥当性のテスト, 77
  - フィールドの説明, 32
- ルールキーワード, 105
  - any、説明と値, 105, 162
  - arch, 106, 162
  - disksize、説明と値, 106, 162
  - domainname, 106, 162
  - hostaddress, 106, 162
  - hostname, 105–109, 162

## ルールキーワード (続き)

- installed, 説明と値, 107, 162
- karch, 107, 162
- memsize, 107, 163
- model, 108, 163
- network, 108, 163
- osname, 108, 163
- probe, 109
- totaldisk, 109, 163
- ルールフィールド内の Bourne シェルスクリプト, 32

## ろ

## ログファイル

- 開始スクリプトの出力, 58
- 終了スクリプトの出力, 61